

タイ人日本語学習者の様態モダリティの学習の問題点からみた

学習項目の改善

—「(シ) ソウダ」を中心に—

齋藤太郎

(5680118522)

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科

日本語講座・修士課程

2015年 5月

チュラーロンコーン大学著作権

氏名 : 齋藤太郎

論文名 : タイ人日本語学習者の様態モダリティ学習の問題点からみた
学習項目の改善—「(シ) ソウダ」を中心に—

指導教官 : アサダーユット・チューシー

ページ数 : 92 ページ

要 旨

本研究の目的は、タイ人日本語学習者（日本語能力試験 N4-N5 レベル）を対象に、様態モダリティ「(シ) ソウダ」の学習の問題点を明らかにした上で、その解決策として、使用場面別の学習項目を立て、適切な教える順番を提案するものである。

タイ人学習者の使用傾向では、「状態動詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用が少ないことがわかった。原因は、意味・用法の場面ごとの使い分けの理解が不十分なため、関連するモダリティ表現との混用が生じているためであった。

そこで、使用傾向の偏りを解決するため、意味・用法ごとの使用場面別の指導法を提案した。新たな学習項目として「動詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法において「働きかける表現」の「希望表明の場面」の指導を取り入れ、実験授業を行った。その結果「(シ) ソウダ」の適切な使用ができるという学習効果があった。初級タイ人学習者は、「動詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法において「働きかける表現」の希望表明の実用的な会話ができるようになった。

文学部東洋言語学科

日本語講座

2014 年度

院生の署名 : _____

指導教官の署名 : _____

บทคัดย่อ

งานวิจัยนี้จัดทำขึ้นเพื่อวิเคราะห์ประเด็นปัญหาในการใช้ทัศนานุเคราะห์แสดงสภาพ 「(シ) ソウダ」ของผู้เรียนชาวไทย(ระดับการสอบวัดระดับ(N4-N5))แล้วจึงตั้งหัวข้อการเรียนโดยอ้างอิงสถานการณ์การใช้งานและเสนอแนะลำดับการสอนทัศนานุเคราะห์แสดงสภาพ 「(シ) ソウダ」 ที่เหมาะสม

จากผลการวิเคราะห์พบว่า ผู้เรียนชาวไทยมีแนวโน้มต่ำในการใช้ 「คำกริยาแสดงสภาพ + (シ) ソウダ」 ซึ่งใช้แสดงสภาพสาเหตุเนื่องจากผู้เรียนมีความเข้าใจวิธีการใช้ที่ไม่เพียงพอ จึงเป็นเหตุให้เกิดการใช้สำนวนทัศนานุเคราะห์ที่เกี่ยวข้องประเภทอื่นทดแทน

ดังนั้น งานวิจัยฉบับนี้จึงได้เสนอแนะวิธีการสอนโดยแยกตามสถานการณ์การใช้งานแต่ละประเภทเพื่อแก้ปัญหาคำกริยาที่โน้มเอียงไปในทิศทางเดียว จากการเปรียบเทียบกับการใช้ของเจ้าของภาษา ผู้วิจัยจึงเสนอแนะหัวข้อการเรียนใหม่สำหรับผู้เรียนขั้นต้น คือ การนำคำกริยาแสดงสภาพไปใช้เป็น “สำนวนจันกรรม”(働きかける表現) กรณีต้องการแสดงความปรารถนาและจากการทดลองจัดการเรียนการสอนที่สอดคล้องสถานการณ์ที่ผู้พูดต้องการแสดงความปรารถนา พบว่าผู้เรียนที่มีผลสัมฤทธิ์ในการใช้ 「(シ) ソウダ」 ได้อย่างเหมาะสม

目 次

第1章 序論	1
1.1 問題提起と目的	1
1.2 課題	2
1.3 本論文における用語の定義	4
1.3.1 様態のモダリティ「(シ) ソウダ」	4
1.3.2 認識のモダリティ	4
1.4 本論文の構成	5
第2章 先行研究	7
2.1 言語研究的な先行研究	7
2.1.1 「(シ) ソウダ」の基本概念と意味・用法の先行研究	7
2.1.1.1 「(シ) ソウダ」の基本概念に関する先行研究	7
2.1.1.2 「(シ) ソウダ」の意味・用法に関する先行研究	9
2.1.2 関連するモダリティ表現の先行研究	13
2.1.2.1 「ト思ウ (ダロウ)」について	13
2.1.2.2 「カモシレナイ」について	13
2.1.2.3 「ヨウダ・ミタイダ」, 「ラシイ」について	13
2.1.3 「(シ) ソウダ」に共起しやすい表現の先行研究	17
2.2 日本語教育的な先行研究	18
2.2.1 「(シ) ソウダ」の使用傾向を調査した先行研究	18
2.2.1.1 佐々木・川口 (1994)	18
2.2.1.2 山森 (2004, 2006)	19
2.2.1.3 鳥 (2010)	19
2.2.2 「(シ) ソウダ」の学習項目を取り挙げる教科書	21
2.2.2.1 初級教科書の「(シ) ソウダ」の学習項目の取り扱い	21
2.2.2.2 中級教科書の「(シ) ソウダ」の学習項目の取り扱い	23
2.2.2.3 全体的な教材分析における「(シ) ソウダ」の意味・用法の取り扱い	25
2.2.2.4 教科書におけるモダリティ表現の置き換えの取り扱い	25
2.2.3 「(シ) ソウダ」の教授法に関する先行研究	26
2.2.3.1 石田 (2000)	27

2.2.3.2 高橋 (2010)	27
2.2.3.3 市川 (2011)	27
2.2.3.4 川口 (2005)	27
第3章 研究方法	29
3.1 本論文の表記方法	29
3.2 本研究における動詞, 形容詞の下位分類の定義	29
3.3 調査方法	31
3.3.1 調査の場所, 対象者, 及び, 調査実施期間	31
3.3.2 調査方法	31
第4章 「(シ) ソウダ」の使用傾向からみた問題点	37
4.1 会話文完成テストによるタイ人学習者の使用の特徴	37
4.1.1 「(シ) ソウダ」の意味・用法別使用傾向	37
4.1.1.1 全体的な使用傾向	38
4.1.1.2 使用率が高い文法形式と意味・用法	39
4.1.1.3 使用率が低い文法形式と意味・用法	40
4.1.2 日本語母語話者とタイ人の学習者のモダリティ形式別の使用の特徴	40
4.1.2.1 「形容詞+モダリティ表現」の形式別の使用傾向	41
4.1.2.2 「動態動詞+モダリティ表現 (1)」の形式別の使用傾向	42
4.1.2.3 「動態動詞+モダリティ表現 (2)」の形式別の使用傾向	43
4.1.2.4 「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用傾向	46
4.1.3 「状態動詞+ (シ) ソウダ」の1人称の文の使用の問題点	48
4.1.3.1 場面における文脈化の問題	48
4.1.3.2 タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の置き換えの問題点	49
4.2 意見表明の作文テストによるタイ人学習者の使用の特徴	50
4.2.1 産出面の「(シ) ソウダ」の使用傾向	50
4.2.2 「(シ) ソウダ」及び, 関連するモダリティ表現の使い分け	53
第5章 「(シ)ソウダ」の学習項目の改善の提案	56
5.1 「(シ) ソウダ」の学習の問題点	56
5.2 「(シ) ソウダ」の学習項目の再検討	58
5.2.1 学習の問題点の解決策	58

5.2.2 「働きかける表現」の場面の「(シ) ソウダ」と共起しやすい表現	60
5.3 新しい提案による授業の学習効果の検証	62
5.3.1 実験授業の実施計画	62
5.3.2 アンケートによる学習者の使用傾向の比較	65
5.4 学習効果のまとめ	68
5.4.1 学習者の「(シ) ソウダ」の「様態」の意味・用法の理解	68
5.4.2 学習効果の定着の検証	70
5.5 「(シ) ソウダ」の意味・用法の教え方の順序の提案	71
第6章 結論	72
6.1 本論文の概要	72
6.2 本論文の結論	77
6.3 今後の課題	79
付録1 「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類の詳細	81
付録2 初級教科書の練習形態の分析	86
参考文献	89
資料の出典	91
謝辞	92

図表の目次

【図 1-1】 モダリティ表現の下位分類.....	5
【図 2-1】 「家が倒れる成立条件がそなわっている」状態の概念図.....	9
【表 2-1】 主な先行研究の「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類.....	11
【表 2-2】 本研究における (シ) ソウダの意味・用法の分類.....	12
【表 2-3】 「(シ) ソウダ」と「ヨウダ・ミタイダ」, 「ラシイ」の意味・用法別の相違.....	14
【表 2-4】 先行研究からの関連するモダリティ表現の意味・用法の使い分け.....	16
【表 2-5】 母語話者との比較における学習者のモダリティ形式別の使用傾向.....	20
【表 2-6】 初級教科書の「(シ) ソウダ」の意味・用法と形式別の出現数の比較.....	22
【表 2-7】 初級教科書の「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の例文.....	23
【表 2-8】 中級教科書の意味・用法と形式別の出現回数の比較.....	24
【図 3-1】 動詞の下位分類.....	30
再掲【表 2-2】 本研究における (シ) ソウダの意味・用法の分類.....	30
【図 3-2】 会話文完成テストの設問の一部.....	32
【図 3-3】 「語る表現」の場面の会話タスク用のとびら型のイラスト.....	35
【図 3-4】 「働きかける表現」の場面の会話タスク用のとびら型のイラスト.....	35
【表 4-1】 タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の意味・用法別の使用傾向.....	38
【図 4-1】 「形容詞+モダリティ表現」の形式別の使用傾向.....	41
【図 4-2】 「変化動詞(1)+モダリティ表現」の形式別の使用傾向.....	42
【図 4-3】 「変化動詞(2)+モダリティ表現」の形式別使用傾向.....	44
【図 4-4】 「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用傾向.....	46
【表 4-2】 作文産出による「(シ) ソウダ」の文型と意味・用法別の使用実態.....	51
【表 5-1】 使用場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法.....	59
【表 5-2】 初級レベルの「希望表明の場面」で使用する主な動詞の一覧表.....	61
【表 5-3】 場面別会話文作成タスクの授業の教案.....	63
【図 5-1】 イラストによる2つの場面の区別.....	64
【表 5-4】 「動詞+ (シ) ソウダ」の3つの意味・用法の使用傾向.....	66
再掲【表 2-2】 本研究における (シ) ソウダの意味・用法の分類.....	73
再掲【図 4-4】 「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用傾向.....	75
再掲【表 5-1】 使用場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法.....	76
【表 6-1】 「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用傾向.....	78

第1章 序論

本論文の目的は、様態の「(シ) ソウダ」の習得のために効果的な指導法を提案することである。1.1では、問題提起と目的を述べる。1.2では、研究課題を述べる。1.3では、本論文における用語の様態の「(シ) ソウダ」の定義及び、認識のモダリティの定義を述べる。1.4では、本論文の構成を述べる。

本論文の「(シ) ソウダ」の表現にはバリエーションがある。「(シ) ソウダ/ダッタ」, 「(シ) ソウデス/デシタ」, 否定形の「(シ) ソデハナイ/ (シ) ソウニハナイ/ (シ) ソウニナイ/ (シ) ソウニモナイ/ (シ) ソウモナイ/ (シ) ナサソウダ」, 連体接続形, 連用接続形の「~ (シ) ソウナ/~ (シ) ソウニ/~ソウデ~」の表現及び、会話で使用される場合の「~ (シ) ソウ」という言い切りの形がある。本稿では、これらの表記も「(シ) ソウダ」の表現と同様のものとして扱う。

1.1 問題提起と目的

モダリティの様態表現の「(シ) ソウダ」は、日本語の教科書の初級後半で提示されている。他のモダリティ表現「ヨウダ (様態・比況)」, 「(スル) ソウダ (伝聞)」と同時期に学習するため、教師側から見ると、タイ人学習者が文法形式、意味・用法を間違った状態で使用している場面が見られる。これについて、高橋 (2010 : 14) では、「「形容詞+そうです」は授業後学習者もある程度使うようだが、「動詞+そうです」は中級レベルの学習者でも「雨が降りそうです」以外の用法はあまり使用していないように見受けられる」と述べている。同様の指摘が市川 (2011 : 128) にもある。

筆者が教鞭をとっているブラパー大学教育学部のタイ人日本語初級学習者も同様に「形容詞+ (シ) ソウダ」で「おいしそうです」, 「あまそうです」, 「上手そうです」などの使用が多いが、「動詞+ (シ) ソウダ」では「雨が降りそうです」以外の使用があまり見られない。

先行研究 (山森 2004, 2006, 大島 1993, 鳥 2010, 伊集院・高橋 2004, 佐々木・川口 1994) には、非母語話者の日本語学習者が①「~ト思ウ」②モダリティなしの「断言」を多く産出しているという報告がある。そのため筆者は、予想を陳述する文で、意見を陳述する表現を使うと、日本語母語話者には、自己主張のように聞こえ、失礼に当るのではないかと思われる。

教える側から見ると、学習者が他のモダリティ表現「カモシレナイ」, 「ヨウダ」と「(シ) ソウダ」との使い分けができずに混同している場面が見られる。

さらに、「(シ) ソウダ」自体の意味・用法は、直前の徴候、変化の予想 (見通し)、様態、

を述べる意味・用法や比喻表現がある。このような意味・用法を、学習者は考慮せずに他のモダリティ表現に代用するため、意味の変化が生じることがある。日本語非母語話者は、「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ」などの主観的な意見や判断を述べる表現形式を使っている場面が多い¹。初級前半レベルのコミュニケーション重視の学習で、最低限の会話ができるレベルを目標としている場合、使いやすい表現で代用することは、当然である。

しかし、日本語のレベルが上がっていくと、使い分けができないため、モダリティ表現の安易な代用が原因で、母語話者が聞くと、伝えたい意味がわからなくなってくる。

本論文では、話し手がどのように対象を捉えているかを表すことができるレベルの学習方法、つまり、適切な表現を選んで使用できるという学習目標が課せられる初級後半の学習方法を考えたい。問題提起として、このレベルのタイ人学習者が、「(シ) ソウダ」の意味・用法を間違えて使用し、不適切な文を作ってしまう点を挙げる。

その例を挙げる。学習者の「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の理解が不十分な²ため、これを使用しないで、「カモシレナイ」、「ト思ウ」、「ヨウダ」に置き換えてしまった非文の例である。「(タイ人が日本人に辛い料理を勧める時) この料理は食べられそうですか。」と疑問文として使用する場合、単なる動詞可能形の「食べられますか」は使用できるが、「食べられると思いますか。」または「食べられるようですか。」という形で置き換えた場合、不自然な文になる³。

そこで本研究では、タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向を解明し、どのような使い方の偏りがあるかを明らかにしたい。意味・用法の理解の不十分な点を明らかにしたい。不十分な学習項目を見直し、効果的な教え方を考えて重点的に学習すれば、「(シ) ソウダ」の意味・用法が適切に使えるようになると共に、関連するモダリティ表現との使い分けも適切にできるようになると考えられる。この理由から、筆者は、学習者が場面に適した状態で、偏りなく「(シ) ソウダ」の意味・用法が使えるための効果的な学習法の改善案を提案したい。

1.2 課題

筆者による初級タイ人学習者対象の調査⁴の結果では、次のような回答があった。多くの学

¹ 先行研究 2.2.1 を参照。

² 非母語話者の「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用偏重は、先行研究の 2.2.1.2 山森 (2004, 2006) を参照。また理解不十分の考察については、市川 (2011) の指摘がある。

³ 他にもタイの日系企業の職場の会話で「納期までに間に合いそうですか。」という予想の表現の返答に「間に合うと思います。」のように意見を述べる表現を使用すると、日本人母語話者との会話の齟齬が生じる。

⁴ [分析資料 3] 1 回目のフォローアップインタビューの 1-4 参照。

習者は、「(シ) ソウダ」の文法形式は簡単だが、他のモダリティ表現との使い分けできないこと、意味・用法が直前の徴候、予想、今度の見通し、様態、比喻など、たくさんあって、覚えていないという回答をした。日本国内の母語の異なる中上級日本語学習者の認識のモダリティの使用を調査した山森（2004，2006）では①日本語非母語話者は主観的な表現「ト思ウ」や「カモシレナイ」の使用が顕著である。②認識のモダリティの中では「ヨウダ」、「ラシイ」、「ミタイダ」と比べ、「(シ) ソウダ」は母語話者の使用傾向に近い反面、その文法形式と意味用法には偏りがある。③非母語話者は形容詞に接続する様態の表現の使用が中心であり、動詞に接続する形式で現状観察に基づく予想を表すもの・仮定した場合の事態の推移の予想の使用が少ないという結果を述べている。

一方、タイ国のタイ人学習者を対象にした「(シ) ソウダ」の使用傾向の調査の先行研究がないため、その使用実態は明らかではない。さらにタイ人学習者に絞った使用の問題点に対応した具体的な指導法の先行研究は管見の限り見当たらない。現在タイ人学習者は、既成の教材に提示されている文型及び、練習のパターンに沿って学習していることが多い。そこで本論文では、以下の2つを研究課題を設ける。

【課題1】「(シ) ソウダ」のタイ人学習者の使用実態の把握からその傾向を明らかにし、学習の問題点を明らかにする。

「(シ) ソウダ」の意味・用法をスキーマとして捕らえ、整理した上で、その主な意味・用法を明確にする⁵。その意味・用法を基に、山森（2004，2006）の調査方法に従って、会話文完成テスト及び、意見文の作文産出タスクを行うことにする。そこから、タイ人学習者の使用傾向を調査する。どのような意味・用法の使い方の偏りがあるかを明確化する。これに関連し、その使用傾向から「ヨウダ」、「カモシレナイ」、「ト思ウ」との使い分けの問題も検討する。また母語話者との使用傾向の比較を行い、学習の問題点を解明する。

【課題2】「(シ) ソウダ」の意味・用法からの場面別の教え方を提案する。

「(シ) ソウダ」の学習者の使用傾向及び、先行研究の教科書分析の使用傾向から、タイ人学習者の学習の問題点と思われる要因を考察したい。

その上で、意味・用法から場面別の会話文作成タスクによる教え方で実験授業を行い、**【課題1】**の問題点を解決する。指導法を改善して、実験授業を実施する。その後、アンケート調査とフォローアップインタビューでその学習効果を見る。「(シ) ソウダ」の場面別適応し

⁵ 菊池（2000）、ケキゼ（2000）、Kekidze(2004)、日本記述文法研究会編（2009）のから「(シ) ソウダ」の基本概念をまとめる。

た教える順番を提案したい。理由は、文法教育ばかりではなく、「働きかける表現」の場面の視点からみた適切な使い方を指導することで、実用的な会話ができるという利点があるためである⁶。

1.3 本論文における用語の定義

1.3.1 様態のモダリティ「(シ) ソウダ」

「(シ) ソウダ」の意味・用法の定義は寺村(1984)⁷、日本語記述文法研究会編(2009)、仁田(1992, 2000)などにまとめられている。モダリティ表現の中の扱いで、下位分類名など相違もあるが、同様の定義で分類にされている。本論文では、日本語記述文法研究会編(2009)を用いて「(シ) ソウダ」の基本的概念を「話し手がその事柄を徴候との関連においてとらえていることを表す。」(p.171)とする⁸。そして、タイ人学習者にとって理解しやすいと考え、「(シ) ソウダ」の日本語文法の中での位置づけは、以下 1.3.2 で述べる認識のモダリティの中の証拠性または徴候性判断とする。中心的な意味・用法は「仮想の上に設定された予測」(中島 1991 : 28)とする。その中に意味・用法として、直前の徴候、変化や動きからの予想(田野村 : 1992, 仁田 1992, 日本語記述文法研究会編 : 2009)が含まれるとする。

1.3.2 認識のモダリティ

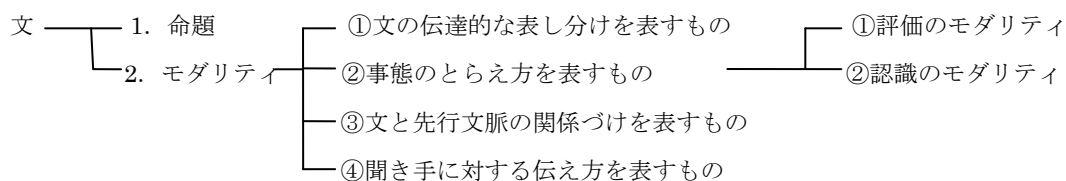
認識のモダリティの定義は安達(1999 : 18)によると「事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すもの」となっている。日本語記述文法研究会編(2009)では、外部の存在する情報を観察したり、取り入れたりすることを通じて、その認識が成立していると定義されている。その下位分類は、次のページの【図 1-1】のようになっている。

⁶ これは川口(2005)、市川(2011)及び、山森(2006)の知見に基づく。

⁷ 寺村(1984)では、「(シ) ソウダ」に前接するのが動的事象を表す動詞ならば、近く起こることが予想される様相、状態的述語であれば、内面についての推測、あるいはある内面をうかがわせる様相をいうということが、原則的にはいえる(p.240)」と述べている。意味・用法では「ある性質、内情が表面に現れている」ことを表す用法と「ある対象が近く動的事象が起こることを予想させる様相を呈している」ことを表す用法の2つに分けている。

⁸ 同様に石沢他(2002)では、変化をおこす徴候や外観の様子からその状態や性質を推察し、話し手が視覚的にとらえた情報を基に推量した様態を表すと説明している。その中で①外見から判断してその様子に見える②その動作や変化が起こる直前の状態あるいは、近い将来発生する事態の予想を表すという意味・用法があると述べている(同 : 166-167)。

【図 1-1】モダリティ表現の下位分類



(日本語記述文法研究会編 (2009) を基に筆者が作成)

また、仁田 (1992) では、認識のモダリティの下位分類は、断定 (断定形) , 推量「ダロウ」, 蓋然性「カモシレナイ」, 証拠性 (観察によるものと推定によるもの) 「ヨウダ・ミタイダ・ラシイ・(シ) ソウダ」⁹, 伝聞「(スル) ソウダ」となっている。「(シ) ソウダ」は、言表事態めあてモダリティの中に認識系の判断のモダリティと名づけている。意味・用法は「外界の存在している徴候から引き出した推し量りを表しているとともに、推し量りを引き出させた徴候」(p. 59) を表すと述べている。

その中で「(シ) ソウダ」だけの特徴として話し手の心的態度の言語表現に限定される真性モダリティ用法以外に、話し手以外の心的態度に言及するという擬似モダリティ (p. 54) 用法も併せ待つと述べている¹⁰。

1. 4. 本論文の構成

本論文は、「序論」(第 1 章) , 「本論」(第 2 章～第 5 章) , 「結論」(第 6 章) から構成される。以下は各章別の概要を記す。

第 1 章 序論

1.1 問題提起と目的, 1.2 課題, 1.3 本稿における「(シ) ソウダ」の様態のモダリティの定義, 1.4 本論文の構成について述べる。

第 2 章 先行研究

以下の 5 点について検討し、本研究の位置づけを行う。

1)～2)では、言語研究的な先行研究について、3)～5)では、日本語教育的な先行研究について記述する。

1) 「(シ) ソウダ」の意味・用法とその分類の研究を検討する。

⁹ 仁田 (2000 : 96-97) は、これについて、徴候性判断と名づけている。話し手にとってどのような捉え方をしているか、どういった徴候の存在の元に推し量られたものであるかという認識的な態度を表すとしている。また徴候とは、客観的に存在しているものから、引き出された推し量りの表現であると述べている。

¹⁰ 仁田 (2000) は、これについて擬似モダリティの真性化と呼んでいる。また「(シ) ソウダ」による「徴候の存在の元での推し量り」は、他の形式によるそれより現象描写文に近い (p.64)としている。

- 2) その他の関連する表現の研究を検討する。
- 3) 「(シ) ソウダ」の使用状況を調査した研究を検討する。
- 4) 「(シ) ソウダ」の学習項目を取り上げる教科書を検討する。
- 5) 「(シ) ソウダ」の教授法に関する研究を検討する。

第3章 研究方法

以下3点について述べる。

- 1) 本論文における動詞・形容詞の分類
- 2) 本論文の表示方法
- 3) 実態調査として調査対象者と調査方法を述べる。その方法は次の4つの調査を行う。
 - 〔調査1〕 会話文完成テスト(1)を実施する。「(シ) ソウダ」の意味・用法を調査する。
 - 〔調査2〕 会話文完成テスト(2)を実施する。日本語母語話者及び、タイ人学習者のモダリティ形式別の使用傾向の調査を実施する。
 - 〔調査3〕 意見文の作文産出テストを実施する。以上の調査結果について、学習者の使い分けの意識を見るために、フォローアップインタビューを実施する。
 - 〔調査4〕 実験授業を実施する。その3週間後に、学習効果の定着を調べるため、アンケート調査とフォローアップインタビューを実施する。

第4章 「(シ) ソウダ」の使用傾向からみた問題点

【課題1】の究明のため、〔調査1~3〕を実施し、その結果を述べる。母語話者との比較も含め、タイ人学習者の使用傾向から「(シ) ソウダ」の意味・用法の偏りを分析する。また、フォローアップインタビューから、理解の不十分な面を見る。その中では、特に「動詞+(シ) ソウダ」の文型の様態の意味・用法について、使用実態を考察する。

第5章 「(シ) ソウダ」の学習項目の改善の提案

調査分析から【課題2】の「(シ) ソウダ」の学習項目の改善を提案する。まず、【課題1】に対する解決案として、「働きかける表現」の使用場面の検討を行い、様態の意味・用法の指導法の見直しをした後、新しい学習項目を立てて実験授業を行う。最後に、実験授業の学習効果を見るため、〔調査4〕のアンケート調査及び、フォローアップインタビューを実施する。この学習効果から、学習者が「動詞+(シ) ソウダ」の様態の意味・用法で「働きかける表現」を使い、適切な表現ができるようになる学習法を提案する。

第6章 結論

本論文の概要を記し、その結論をまとめ、本論文の意義を示す。最後に今後の課題について言及する。

第2章 先行研究

本章は2節から構成される。2.1では、言語研究的な先行研究について述べる。「(シ) ソウダ」の基本概念と主な意味・用法の分類を述べる。また、関連するモダリティ表現及び、共起しやすい表現について述べる。2.2では、日本語教育的な研究について述べる。**【課題1】**に関するタイ人学習者の使用傾向の先行研究を紹介する。次いで、教科書での取り扱いを検討する。また、**【課題2】**の学習法を検討するため、教え方に関する先行研究を記述する。

2.1. 言語研究的な先行研究

2.1.1では、「(シ) ソウダ」の基本となる意味・用法と分類の先行研究から、基本的概念を見出し、そこから顕著な3つの意味・用法をまとめる。2.1.2では、関連するモダリティ表現として「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ・ミタイダ¹¹」、「ラシイ」の意味・用法の分類をまとめる。2.1.3では、「(シ) ソウダ」に共起しやすい表現の先行研究をまとめる。

2.1.1 「(シ) ソウダ」の基本概念と意味・用法の先行研究

2.1.1.1 「(シ) ソウダ」の基本概念に関する先行研究

第1章の日本語記述文法研究会編(2009:171)では、「(シ) ソウダ」は「話し手がその事柄を徴候との関連においてとらえていることを表す」と定義づけされていた。同様の定義づけが仁田(2000)にもある¹²。ここでは、その定義について、より具体的でわかりやすく、その基本的概念を解説している研究を取り上げたい。田野村(1999)、菊池(2000a, 2000b)、ケキゼ(2000)、Kekidze(2004)、の先行研究である。その中では、学習者の理解の手助けになりそうなスキーマ理論として、菊池(2000a, 2000b)及び、ケキゼ(2000)、Kekidze(2004)を中心に以下に記述する。

(1) 田野村(1999)

田野村(1999:318-325)では、「(シ) ソウダ」の意味の中心は「様態」ではなく¹³、「予

¹¹ 「ミタイダ」は、「ヨウダ」の話し言葉と考えられる(仁田2000:155による)。

¹² 仁田(2000)では、話し手がその事柄を徴候との関連において、どうとらえているかを表すことが基本的意味であるとしている。ただし、変化の直前の状態である場合では、実際に見ているのはその事態の起こる前の状態であるとし、例に「あっ、荷物が落ちそうだ。」(p.154)を挙げている。

¹³ 国語学の見地から、田野村は、意味・用法を「未来における事態の実現の予想」、「未確認の現在の事実を予想」、「仮想のもとでの予想」、「誇張」の4つに分類している。また、風間(1964:160)は「(シ) ソウダ」について「傾斜・方向づけ」と定義している。

想」と呼ぶことを提唱している。基本的な意味は「～と予想される・～と予想される気分である」と定義している。

(2) 菊池 (2000a, 2000b)

菊池は「(シ) ソウダ」を想定する描写であると定義し、以下の基本的な意味・用法を提示している。

- ① 話者が「まだ現実のものとなっていない次の局面「次の絵」」を思い描いて述べる。
- ② 話者が「自分が直接体験していない場面・感情・感覚」を思い描いて述べる。
- ③ 話者が「現実」がそのようなことを思い描かせるような性質を持つだろうと「仮想世界」を思い描いて述べる。
- ④ 話者がやがて得られた場合その局面で、そういえるだろうと思い描いて述べる。
- ⑤ 婉曲は断定を避ける表現して慣用化したものとしている。(同 2000b : pp.16-25)

(3) ケキゼ (2000), Kekidze (2004)

「(シ) ソウダ」は「ある物事の成立条件がそろっていること」を認めることにとどまり、ある事物の成立に関しては触れてはいないとしている。そして、比喩的な予測と現状との関係を結ぶ概念として、モノが静的状態にある場合でも、次の状態へのプロセス開始の状態と捉えることが可能であるとし、事態は静止状態であってもいいし¹⁴、例えば、転がっていくボールの場合のように動きがあってもいいと述べている。その動作・変化の開始前を「成立条件がそろっている」という状態としてとらえることができるとしている。

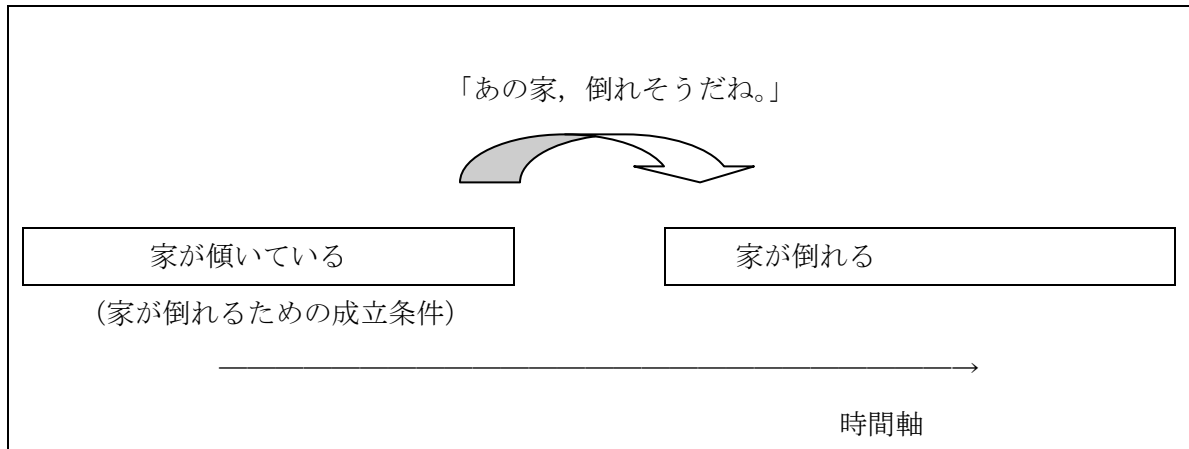
ここでは、次の4つの代表的な用法を挙げている。①プロセス一ひとつの対象に起こる連続的な変化一を表す予想の用法(話者の捉え方を基に予想する場合を含む用法)。②「モノ」における外的な特徴から内的な特徴・性質を判断する用法。③出来事における成立条件の用法。④判断のやわらげの用法があるとしている¹⁵。

Kekidze (2004 : 199) の図解として「家が倒れる成立条件がそなわっている」状態の概念図を次のページの【図 2-1】に示す。

¹⁴ 静的状態では「[人が持っている荷物を見て]『重そうだね。』』と言うのは、自分が体験したとすれば「重いにちがいない」と思い描いている記述としている。基本的な意味は①近く起こることの予想②内面の性質が外見に表れている様態としている。

¹⁵ この分類の基づき「事態が成立せず、未現実のまま終わっている場合」に「～しそうになる」というパターンがあるとしている。例文は「おかしな顔を見て、笑いそうになった。」(ケキゼ : 2000) である。

【図 2-1】「家が倒れる成立条件がそなわっている」状態の概念図



(Kekidze2004 : 199 図 2 「家が倒れる」と結びつく〔複合体〕より抜粋)

この概念を考慮すると、「(シ) ソウダ」の概念は、静的様態の想定から、動的な変化の予想（見通し）、そして直前の徴候までの推移する予想の表現と定義づけられる。換言すれば、「(シ) ソウダ」は、時間軸上を移動する予想の表現で、静的状態から変化の予想（見通し）、そしてその直前の徴候までを表せるという特徴があると言える。

以上から「(シ) ソウダ」の予想の基本概念を概念を明示できる。菊池の「次の絵」及び、ケキゼの「成立条件」の概念とは、動的状態への推移の予想である。つまり静止状態から、推移する予想、そして直前の徴候までの連続していく時間軸に沿って推移する予想を表す概念が「(シ) ソウダ」にあると考えられるためである。

2.1.1.2 「(シ) ソウダ」の意味・用法に関する先行研究

「(シ) ソウダ」の分類は、仁田（1992, 2000）、石沢（2002）、森田（2006）、日本語記述文法研究会編（2009）、市川（2011）、などがある。

分類の詳細なものとして、菊池（2000a, 2000b）の「(シ) ソウダ」の意味・用法の研究を見ると、次のように分けている。

- (1) 様態の予想：あの二人たぶん、結婚しそうよ。
- (2) 想定（想像）：彼はうれしそうだ。 / （大きなかばんを見て）重そうだ。
- (3) 次の局面（次の絵）：雨が降りそうだ。（直前の徴候を含む）
 （予想）：（機上から下の村を見て）戸数は百戸ぐらいはありそうだ。
- (4) 婉曲：～と見られそうだ。 / と言ってよさそうだ・ / といえそうだ。
- (5) 仮想：三蔵法師の一行が、（略）河原の砂煙の中から姿を現しそう。 / 障害児たちのことを思うと、胸が張り裂けそうだよ。

森田(1990)と菊池(2000a,2000b)が詳しい分類をしている。一方、仁田(1992, 2000)は、基本的な概念の統合化の視点から分類しているため意味・分類の区分けが少ない。反対に、森田(1990)は「予想の根拠あり」をさらに「予測(個人の視点からの判断による)」と「形勢(大勢の視点からの判断による)」の2つに細分化した分類となっている¹⁶。

田野村(1999)、菊池(2000a, 2000b)は、国語学の研究から分類し、比喻表現を「仮想」と名付けているため、日本語学習者にとって、わかりにくい分類となっている。様態だけを述べているのか、様態の変化を予想して述べているのか、例文が不明確なものが見受けられる。意味・用法の分類でどちらともとれる場合があり、本論文での意味・用法の分類には不向きである。また田野村(1999)、菊池(2000a, 2000b)は、形容詞や動詞の文型と意味・用法と組み合わせた分類を明確化にしていない。

これに対して、「動詞・形容詞+(シ)ソウダ」の文法形式と意味・用法の分類を組み合わせ提示している文献では、山森(2006)及び、日本語記述文法研究会編(2009)がある。ただし、山森(2006)では、中心的な3つの意味・用法を取り上げて研究したため、婉曲表現、比喻表現の2つの意味・用法が見当たらない。

他の意味・用法の分類研究も含め、次のページの【表2-1】にまとめて提示する¹⁷。

¹⁶ これについて菊池(2000a:17)は、森田(1990)の予測と形勢を1つにまとめる提言をしている。また、推量・予測・形勢の3つは、山森(2004・2006)、仁田(2000)他大方の研究ではこれらの意味・用法を予想・見通しとしてまとめている。また森田(1990)自身も、予測と形勢は1つの意味・用法に含むことも可能としている。

¹⁷ 各文献別の意味・用法と例文は〔付録1〕を参照。

【表 2-1】 主な先行研究の「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類

文献 意味 ・用法		森 田 (1990)	仁 田 (1992, 2000)	田 野 村 (1999)	ケキゼ (2000) Kekidze(2004)	菊 池 (2000a, b)	山 森 (2006)	日本語記述文 法 研 究 会 編 (2009)
①様態		○ 外 観 の 特 徴	○ 状 態 把 握	○ 現 在 の 予 想	○ 表 面 的 特 徴 从 の 特 性	○ 現 実 の 様 態 の 描 写 と 予 想	○ 外 観 从 の 観 察	○ 様 態 の 想 定
① 予 想	根 拠 あ り	○ 予 測	○ 出 来 事 把 握 (事 態 の 徴 候 を 含 む)		○ 連 続 的 な 変 化 (プ ロ セ ス) の 予 想		○ 後 に 起 こ る 予 想 ・ 見 通 し	○ 予 想 ・ 見 通 し
	根 拠 な し	○ 推 量		○ 未 確 認 の 予 想	○ 話 者 の 捉 え 方 に よ る プ ロ セ ス	○ 未 体 験 場 面 描 写		○ 様 態 の 想 定 (根 拠 不 明) (仮 想)
③直前の徴候		○ 寸 前		○ 未 来 予 想 (寸 前 ま で)	○ 成 立 条 件 从 の 予 想	○ 次 の 絵 の 描 写	○ 後 に 起 こ る 徴 候	○ 直 前 の 徴 候
④婉曲		○ 婉 曲	○ や わ ら げ		○ や わ ら げ	○ 婉 曲		
⑤比喩		○ 非 現 実		○ 誇 張 仮 想		○ 仮 想 の 描 写		○ 誇 張

(先行研究の各文献を基に筆者作成)

最も本論文の研究に適切と思われる分類は、日本語記述文法研究会編(2009)である。婉曲表現はないが、全体的にわかりやすく、かつ詳細な分類となっている。日本語非母語話者にとっては最も理解しやすいと言える。例文(同: pp. 170-174)を引用すると次のようになる。①直前の徴候「おい、シャツのボタンがとれそうだよ。」②変化の予想(見通し)「この調子なら、この仕事は今週中に片付きそうだ。」「今日は祭日だから、映画館は人が多そうだ。」③様態の予想「このカバンはみるからに重そうだ。/あの人なら、そういうことを言いそうだ。」、「田中さんは留学してたから、英語ができそうだ。」④誇張(比喩)「腹が減って死にそうだ。」本研究では、日本語記述文法研究会編(2009)の分類を用いる。3つの基本的意味・用法

と、派生的な用法として比喩表現¹⁸がある、と規定する。まとめて以下の【表 2-2】に示す。

【表 2-2】本研究における「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類

	意味・用法	文 型	例 文 (出典)
①	直前の徴候	動態動詞+(シ)ソウダ	おい, シャツのボタンが <u>とれそう</u> だよ。 (日本語記述文法: 2009)
②	変化の予想	動態動詞+(シ)ソウダ	午後は, 雨に <u>なりそう</u> だ。 (日本語記述文法: 2009)
		形容詞+(シ)ソウダ	鈴木を説得するのは, <u>難し</u> そうだ。 (日本語記述文法: 2009)
③	様態 (可能性の推量を含む) の予想	形容詞+(シ)ソウダ	このメロンは <u>おいし</u> そうだ。 (日本語記述文法: 2009)
		状態動詞+(シ)ソウダ (動詞可能形+(シ)ソウダ)	田中君は留学してたから, 英語が <u>でき</u> そうだ。(日本語記述文法: 2009)
	比 喩 表 現	動態動詞/状態動詞+(シ)ソウダ	腹が減って, <u>死</u> に <u>そう</u> だ。 (日本語記述文法: 2009)

(表中の略語: 日本語記述は, 日本語記述文法研究会編 (2009) の略である。)

以上から①から③が主な意味・用法である¹⁹。静的様態の想定から動的变化の予想・見通し、直前の徴候まで移動していく推移の予想が「(シ) ソウダ」の意味・用法の基本となる。この中でそれぞれの様相の顕著なものとして①変化・動きの直前の徴候②変化の予想、見通し③様態の3つの主な意味・用法とする。また、比喩表現は様態の意味・用法の派生的表現とし、これに準じる。これ以外の婉曲 (またはやわらげ) 表現については (仁田: 1992, 2000) の指摘を採用し²⁰、婉曲表現を独立した意味・用法で取り扱わず、①~③の各意味・用法の中に含める。

¹⁸ 比喩表現は, 日本語文法記述研究会編 (2009) の中の「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の箇所では、「動詞+(シ) ソウダ」の拡張的な用法として程度を大げさに表現する用法があると述べている。本論文では、この解説の文型及び、様態の派生的な用法として比喩表現を取り扱う。

¹⁹ この3つの分類は, 山森 (2006・2004) の「(シ) ソウダ」の3つの意味・用法の分類①直後にあることが起こる徴候について述べる用法②今後の見通し, 予想について述べる用法③概観として観察される性質や内的状態について述べる場面を述べる用法に相当する。

²⁰ 仁田 (1992) は「婉曲」を「やわらげ表現」と名づけている。また「(シ) ソウダ」の婉曲性は推し量り性を抜いた状態では成り立っていないため、そこには常に推し量りの表現があると述べている。この提言に筆者は同意する。

2.1.2 関連するモダリティ表現の先行研究

各モダリティー表現の意味・用法の分類及び、関連するモダリティ表現との使い分け（置き換え）の先行研究では、仁田（1992, 2000）、睦路・川木（2000）がある。これらの先行研究から、学習者が「(シ) ソウダ」と類似する表現で、どのような表現と混同しやすいか把握しやすくなる。主な「(シ) ソウダ」と置き換えられる表現では「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」である。以下にこれらのモダリティ表現についてまとめる。

2.1.2.1 「ト思ウ（ダロウ）」について

仁田（1992 : 192）では「ト思ウ」は「判断のモダリティへ形式化している」と述べている²¹。「ト思ウ」の意味・用法は純粋な内的思考を示すものである。一方「(シ) ソウダ」は証拠に基づかずに、予想するものであると言える。要するに、両方とも証拠がない様態を表す。

2.1.2.2 「カモシレナイ」について

事態成立の可能性を描く形式として、仁田（2000 : 130）では、「ニチガイナイ」と「～カモシレナイ」を挙げ、判断のモダリティ中の可能性把握として分類している。平田（2001 : 16）は、推量の結果、可能性が相対的に低い場合使われると述べている。可能性が低いため、証拠性がない「(シ) ソウダ」の様態の表現に近い表現となる。

2.1.2.3 「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」について

田野村(1992)では、「ヨウダ」の基本的な意味を「～という外見・様子である。～である印象を受ける」と定義している。睦路・川木（2000）では、「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」の意味・用法を①様態表現 ②婉曲表現 ③比喩（非現実的事態の表現）に分類している²²。

次に「(シ) ソウダ」と置き換え可能な意味・用法及び、置き換え不可能な意味・用法の相違点をまとめる。「(シ) ソウダ」の3つの意味・用法に対して「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」に置き換えられないものが見られる。個別に見ていく。「(シ) ソウダ」の直前の徴候の意味・用法は、「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」と置き換えられないとなっている。

例文：○今にも、家が倒れそうだ。

×今にも、家が倒れるようだ²³。

²¹ 仁田（1992）では、「ト思ウ」は、推量のモダリティ「ダロウ（丁寧形は「デショウ」）」に近い働きを持つと述べている。そして「ダロウ」は、判断のモダリティの近似形式にずれ込んでいったもの（同：69）と考えられるとしている。

²² 国語学の観点からの使い分けでは、中畠(1991)において「ヨウダ」は比況、「(シ) ソウダ」は予測と区別している。

²³ 記号の説明：○＝置き換えられる/△＝置き換えられるが、意味が変わってくる/×＝置き換えると非文になる。

「(シ) ソウダ」の様態及び、変化の予想の意味・用法は、置き換えられる場合と置き換えられない場合がある。この置き換えの研究を文献ごとにまとめて、次のページの【表 2-3】に示す。

【表 2-3】「(シ) ソウダ」と「ヨウダ・ミタイダ」, 「ラシイ」の意味・用法別の相違

研究者 (年号)	モダリティ	「(シ) ソウダの意味・用法				直 前 の 徴候
		様態		変化の予想		
		証拠性あり	証拠性なし	予兆あり	予兆なし	
田 野 村 (1992)	(シ)ソウダ	○ 外見や印象の現在の状態の表現	○ 話者の想像	○ 現在の予兆から見た未来の	○ 未確認の未来の予想	
	ヨウダ		×	予想	×	
木下 (1998)	(シ)ソウダ	○ 証拠に基づく判断, 又は, 意思決定がある場合	○ 証拠なし	○ 予兆あり, 必然的に事態が生	○ 未来の不定時に起こる事態	
	ヨウダ		×	起する場合	×	
菊池 (2000 a) (2000 b)	(シ)ソウダ	○ 様態・比喩の表現		○ 予兆あり, 誰かの意志で生起が決定ずみの場合	○ 未知の不定時に起こる事態の予想の場合	○ 直 前 の 徴候
	ヨウダ	○ 推量・比況表現			×	
日本語記述 文法研究会 編(2009)	(シ)ソウダ	○ 様態の表現				○ 直 前 の 徴候
	ヨウダ	○ 推量の表現				×

表中の「ヨウダ」の中に「ミタイダ」及び「ラシイ」も含む。表中の記号の説明：○=使用できる×=使用できない。

置き換え可能か、そうでないかの相違は、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の中でも、

証拠性の有無²⁴によって、置き換えられる場合とそうでない場合が生じてくる。

置き換え可能な場合は、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法と「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」の様態、推量、(比喩)の意味・用法とが、置き換えられるとなっている。

「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」は、証拠性を伴う様態表現に使用可能である。一方、「(シ) ソウダ」は、証拠性がある場合及び、証拠性がない場合(または、話者の想像のみの場合)の両方に使用可能である。置き換え可能なものは、証拠性があるものである。

例文：○ 明日は、いそがしそうだ。(筆者作例)

△ 明日は、いそがしいようだ。²⁵(筆者作例)

しかし、証拠性がない場合(想像の場合)は「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」は使えない。

例文：○ この川には、河童がいそうだ。(筆者作例)

× この川には、河童がいるようだ。(筆者作例)

また、「(シ) ソウダ」の変化の予想の意味・用法と「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」は、確かな予兆または、意志決定があり、必然的に起こる事態については、置き換え可能である。しかし、未知の不定時に起こる事態に対して、置き換え不可能であり、「(シ) ソウダ」しか使えない。

例文：○ しっかり運転しないと、事故になりそうだ。(筆者作例)

× しっかり運転しないと、事故になるようだ。(筆者作例)

以上から「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「(シ) ソウダ」、「ヨウダ・ミタイ」、「ラシイ」の意味・用法の相違点をまとめて次のページの【表 2-4】に示す。

²⁴ これ以外の研究では、村田(2001)も、同様に証拠性の有無によって、「ヨウダ」、「ラシイ」と「(シ) ソウダ」を区別している。「ヨウダ」は、根拠がある判断、推定である。「(シ) ソウダ」は根拠がない推定であるとしている。

²⁵ 但し、いずれの先行研究も、置き換えると意味が変わってくるという指摘がある。

【表 2-4】 先行研究からの関連するモダリティ表現の意味・用法の使い分け

モダリティ形式	意味・用法	話者の対照への態度	証拠（根拠）の有無	話者の対象への態度 ²⁶	予想する対象・事柄
(シ) ソウダ	認識（様態 予想・徴候）	客観的	あり・なし	ひきはなし	静的～動的变化～ 直前の徴候までの 様相の推移
ト思ウ	意見・判断	主観的	あり・なし	ひきよせ	様相の感想
ダロウ	推 量				
カモシレナイ	判断（低い可能性）	主観的	あり・なし	ひきよせ	様相の判断
ヨウダ・ミタイ	認識（様態・推 量・比況）	客観的	あり	ひきよせ	静的状態の様相の 推量
ラシイ	認識（推定）	客観的	あり	ひきはなし	様相の推定

以上の使い分けをまとめる。「ト思ウ」は話者の意見を述べる表現である。「カモシレナイ」は、話者の判断（可能性が少ない場面）の表現である。「ヨウダ・ミタイダ」は、証拠性から話者が導いた様態・印象・推定を述べる場合の表現である。これは主に様態、推量、比況などの意味・用法がある。同様に「ラシイ」も証拠性から導いた様態・推定を述べる表現である。これに対して「(シ) ソウダ」は、未知の事態の予想に使える表現で、証拠性がなくてもよい。また、変化を伴う予想で、直前の徴候を表す場合にも使える。

以上より「(シ) ソウダ」との置き換えにおいて、最も混乱しやすいのは、「ヨウダ・ミタイダ」、「ラシイ」の様態の意味・用法であると言える。この両者の区別は、「ヨウダ」は様態の推量（証拠性がある、確かな予兆がある事態）で、一方「(シ) ソウダ」は様態の予想（証拠性がなくてもよい、未知の不定時の事態でもよい）であると、区別することができる。

つまり、同じ様態の表現でも、使い方に相違がある。1 人称の話者自身のことである自分の様態及び、今後の予想について「ヨウダ」を使って推量できないのに対し、「(シ) ソウダ」はこの状況でも使用が可能である。例えば「ヨウダ」（根拠性あり。確かな予兆あり）を「病気になるかけ/病気の治りかけ」の推移（変化）の予想に使えない。

²⁶ 黄（2003）では、根拠に基づいて推量判断のは「ヨウダ」、「ラシイ」ともに持つ特徴であるが、異なる点は、「ラシイ」は客観的な推量判断であり、話者が「ひきはなし」の態度を持って使う一方、「ヨウダ・ミタイダ」は主観的な推量判断で話者が「ひきよせ」の態度を持って、推量判断をしていると区別している。

例文：× 私は、病気になるようだ²⁷。(筆者作例)

△ 私は、病気が治るようだ。(筆者作例)

このような不定時の推移の予想の場合において、話者自身の今後の変化を予想する場面では、「(シ) ソウダ」が適切である²⁸。

例文：○ 私は、病気になりそうだ。(筆者作例)

○ 私は、病気がなおりそうだ。(筆者作例)

2.1.3 「(シ) ソウダ」に共起しやすい表現の先行研究

本節では【課題 2】の学習法の改善の提案について、その使い分けの手がかりとなる共起しやすい表現を研究したものを取り上げる。以下、日本語記述文法研究会編(2009)、工藤宏(2000)からまとめると、次のようになる。

- (1) 「今にも・もうすぐ・もう少しで」＋「動詞＋(シ) ソウダ」は、変化・動作の直前の徴候を表す。語る表現の描写の場面で用いられる。(様態・推量・比況の「ヨウダ」とは置き換えられない。「(シ) ソウダ」のみ共起する表現である。)
- (2) 「たぶん・きっと」＋「動詞・形容詞＋(シ) ソウダ」は、様態の予想・変化の予想を表す。人称に関係なく使用される。
- (3) 「どうも・どうやら」＋「動詞＋(シ) ソウダ」は様態の予想・変化の予想を表す。
- (4) 「いかにも・みるからに」＋「動詞・形容詞＋(シ) ソウダ」で、様態の予想を表す。3人称の文で用いられる。

(2)～(4)は、様態・推量・比況の「ヨウダ」及び、他のモダリティ表現とも共起する。)

以上から、直前の徴候を表す場合では、特に(1)が使われることがわかる。これは他の意味・用法と区別する手がかりとなる。また(2)、(3)の副詞と使う場合「(シ) ソウダ」は、変化の予想や様態の意味・用法となる。

²⁷ 例外的に「名詞＋ヨウダ」の文型で、「○(私は) 病気のようにだ。」の文が成立する、話者は自分の体調の推量として、使うことができるが、これは、話者自身が、自分を第3者の視点に立って、自分の体調について、他の人のように、扱った上で、使用する場合に限られる。

²⁸ このように証拠性なしの不定時の予想つまり、静的状態から動的状態への「推移の予想」に「(シ) ソウダ」が適切であると学習者に教えることで、意味・用法を把握しやすくなり、「ヨウダ」と区別しやすくなる。この考え方は発展させて、第5章の【課題 2】の解決策としての効果的な学習方法の「働きかける表現」の中に取り入れることができる。「働きかける表現」については、2.2.3.4を参照。

このように「(シ) ソウダ」に (1) ~ (4) を共起させることで、その意味・用法と場面が明確になり、学習者にとって「(シ) ソウダ」の意味・用法が文脈化した上で、効果的に学習できるようになる。そこで、この共起しやすい表現を効果的な教え方として、本研究の第5章の会話文作成タスクの用例の中に、取り入れることにする。

2.2 日本語教育的な先行研究

日本語教育の現場の視点から、次の3節を設けた。2.2.1では、学習者と母語話者の「(シ) ソウダ」の使用傾向をまとめる。2.2.2では、初級及び、中級の日本語教科書において「(シ) ソウダ」の学習項目の取り扱いを教材分析の視点から、検討する。「(シ) ソウダ」の教科書の出現傾向を見る。2.2.3では、「(シ) ソウダ」のモダリティの教授法に関する先行研究を記述する。

2.2.1 「(シ) ソウダ」の使用傾向を調査した先行研究

「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現の意味・用法において、日本語学習者と日本語母語話者との使用傾向の比較を行っている先行研究が多い。ここでは、本研究に関する佐々木・川口(1992)、山森(2004, 2006)、鳥(2010)を取り挙げる。

2.2.1.1 佐々木・川口(1994)

この研究では、日本語母語話者の第一言語習得の過程と日本語学習者の使用傾向を比較している。日本語母語話者の小学校～大学生の作文の文末表現の調査を行い、これを日本語学習者の文末表現と比較している。「カモシレナイ・チガイナイ・ハズダ・(シ) ソウダ・ヨウダ・ラシイ・ダロウ」等のモダリティの使用を言語習得過程に視点から調査している。年齢と共に日本語学習者・母語話者ともに主観性が強い表現から客観性を帯びた表現へと移行するという発達過程が認められると述べている²⁹。しかし、日本語学習者の場合、母語話者との比較において、使用傾向の差が見られる。非母語話者は、母語話者の発達過程の途中の段階と、同じ使用傾向を持つ。例えば「ト思ウ」の使用率は、母語話者の中学2-3年生レベルである。(母語話者は中学1年生が最も使用し、その後は、減少する。)
「(シ) ソウダ」や「ヨ

²⁹ 認識のモダリティの習得研究は、次のようなものがある。①大島(1933)は中国人話者・韓国人話者は推量や判断のモダリティ「ダロウ、カモシレナイ」と認識のモダリティ「ヨウダ、ミタイダ、ラシイ」を混同して使用する傾向があることを明らかにしている。②伊集院ほか(2004: 93)は意見文作文産出における文末のモダリティ表現を中国人日本語学習者と母語話者として比較をしている。結果は学習者は断定や評価のモダリティ、終助詞などを多用し、認識のモダリティの使用頻度が少ないと報告している。また、迫田(2002)も同様の指摘をしている。

ウダ」の使用率は、小学生4-5年生レベルである。(母語話者は、中学1年生でピークで、その後年齢とともに「ト思ウ」の使用が減少し、反対に様々なモダリティの使用が増加する。)つまり、日本語母語話者の同年齢の被験者と比べると「(シ) ソウダ」, 「ヨウダ」の使用率が低いことを明らかにしている。

2.2.1.2 山森 (2004, 2006)

日本国内の母語の異なる中上級日本語学習者の認識のモダリティの使用傾向を3項目に分け、調査している。扱っているモダリティは「(シ) ソウダ・ヨウダ・ミタイダ・ラシイ・カモシレナイ・ト思ウ」で、3つの調査で各使用率を比較している。

- ① 自然発話での使用傾向の調査。(話題を設定し、自由に話す。)
- ② 一定場面での会話文完成テストでの調査。(一定の場面を見せ、空所のある会話文を完成させる。) 10問中4問「重そう(様態)」, 「うれしそう(様態)」, 「(幽霊が) 出そう(予想・見通し)」, 「(もうすぐ雨が) 降りそう(直前の徴候)」の出題である。
- ③ Eメールでの使用傾向の調査。(友人誘われた設定で旅行のパンフレットを見てもう一人別の友人をさそうメールを書く。)

「形容詞+(シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、母語話者と同様の使用数であるが、「動詞+(シ) ソウダ」の様態の予想の意味・用法の使用数が少ないことを明らかにしている。

2.2.1.3 烏 (2010)

中国人日本語学習者の語りにおける説明と描写において被験者に絵本の説明をしてもらい、その語りの特徴を日本語母語話者と比較した。その結果、学習者と母語話者と使用の相違が明らかになった。学習者はモダリティ表現を使用せず、そのまま感情動詞(うれしい・痛い・恐いなど)や心情動詞(がっかりする・後悔するなど)を使用するケースも多いことがわかった。

日本語学習者は「ト思ウ」の使用に続いて、様態の「形容詞+(シ) ソウダ」の文型を使用し、外観から描写する様態の表現が多い。これは母語話者と同様の使い方である。例として「うれしそうな感じで～」, 「心配しそうな目で～」, 「悲しそうに見つめて～」の表現があった。

以上から、3つの調査結果とも日本語学習者は、日本語母語話者と比べて、「ト思ウ」, 「カモシレナイ」を多く使用する傾向が見られる。また、「形容詞+(シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、両方とも同様の使用傾向である。反対に、日本語学習者は、日本語母語話者と比べて、「動詞+(シ) ソウダ」, 「ヨウダ・ミタイダ」, 「ラシイ」の使用が少ない。

3つの先行研究の非母語話者のモダリティ形式及び、文型、意味・用法別の使用傾向をまとめると、次のページの【表 2-5】のようになる。

【表 2-5】母語話者との比較における学習者のモダリティ形式別の使用傾向

研究者 (年号)	佐々木・川口 (1994)	山森 (2004, 2006)	鳥 (2010)	
調査方法	作文の文末表現	自然発話・会話文完成テスト・Eメール	絵本のストーリー・テーリング	
モダリティ形式	(シ) ソウダ	△ 小学校 4-5 年生レベルの低い使用率	○ 「形容詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法は母語話者同様の使用率	○ 「形容詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、母語話者同様の使用率
			△ 「動詞+ (シ) ソウダ」の様態・推移 (変化) の予想の意味・用法は、低い使用率	
	ト思ウ	◎ 日本人中学 2-3 年生レベルの高い使用率	◎ 主観的な表現で、高い使用率	◎ 人物の心情描写で、思考動詞が多い
	カモシレナイ		◎ 主観的な表現で、高い使用率	
	ヨウダ (ミタイダ)・ラシイ	△ 小学校 4-5 年生レベルの低い使用率	△ 客観的な表現は、低い使用率	

表中の記号の説明：◎は、学習者の使用率がかなり高いもの。○=学習者と母語話者の使用率が同じもの。
△=学習者の使用率が、母語話者より低いもの。

以上から、日本語母語話者及び、非母語話者の「(シ) ソウダ」の意味・用法の使用傾向をまとめると、次の3点になる。

(1) 母語話者の使用状況は、「ヨウダ」、「(シ) ソウダ」、「ラシイ」の認識のモダリティの意味・用法は、「カモシレナイ」や「ヨウダ」と並び、よく使われる表現となっている。

(2) 学習者の使用状況は「ト思ウ」の主観的な判断のモダリティの使用率が高い。

(3) 学習者にとって、「形容詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用が中心である。「動詞+ (シ) ソウダ」の文型での変化の予想及び、様態の予想は、使用率が低い。母語話者は3つの意味・用法を均等に使用するのに対し、学習者の使用傾向は、偏りがある。

2.2.2 「(シ) ソウダ」の学習項目を取り挙げる教科書

前述の先行研究の中で、非母語話者の意味・用法の使用傾向の偏りがあることを述べた。そこで、【課題2】の学習項目の改善案とするため、授業で使用する教科書の「(シ) ソウダ」の取り扱いを調べることにする。主な3つの意味・用法が、具体的に教科書では、どのように扱われているか、その出現傾向をまとめる。

本研究の被験者となる学習者が日本語総合の授業で使用している初級教科書は、『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』（田中よね他：2002）である。タイでよく使用されている『あきこと友だち』（บุษบาและคณะ：2009）も、タイの高等学校で学習した者が多い。他にも、管見では、タイで補助教材として、部分的に教えているケースが散見される『文化初級日本語Ⅰ』（文化外国語専門学校編：2006）を取り挙げる。

そこで、本稿で取り上げる教科書は以下のものである。初級教科書では『みんなの日本語初級Ⅱ』、『あきこと友だち 4, 5, 6』（『ワークブックあきこと友だち 3+4』含む）、『新文化初級日本語Ⅰ,Ⅱ』の3種類の教科書を取りあげる。中級教科書として『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』（田中よね他(2009)）、『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』（鎌田他（1998）（『同ワークブック』を含む）、『どんなとき、どう使う日本語表現文型 200』（Etsuko 他：2000）、及び、タイで市販されており、タイ語の解説もある教科書『ホップ・ステップ・ジャンプ（一）』（กนกวรรณ: 2002）を取り挙げる。

2.2.2.1 初級教科書の「(シ) ソウダ」の学習項目の取り扱い

「(シ) ソウダ」の提示されている意味・用法の種類や件数、文型の種類（動詞、形容詞の種類）の出現数を調べる。次いで、文型、例文、練習問題（動詞などの活用変換問題、会話文問題、読解文問題など）からどんな練習形態が多いかを分析し、その傾向をまとめる。各教科書の「(シ) ソウダ」の意味・用法の取り扱いとその傾向を明らかにしたい。

まず、具体的な教材分析として、次のことを行う。「形容詞・動詞＋(シ) ソウダ」で提示される文法形式、例文、その意味・用法、練習形態を分析する。主な3つの意味・用法の使用傾向を各教科書ごとにまとめ、相違点をまとめる。全教科書に共通する出現傾向及び、例文の全体的な傾向をまとめる。

全体的にみると、延べ語数、異なり語数とも『みんなの日本語』が最も多い。続いて『あきこと友だち』、『文化初級日本語Ⅰ』の順になっている。結果を次のページの【表 2-6】に示す。

【表 2-6】初級教科書の「(シ) ソウダ」の意味・用法と形式別の出現数の比較

意味 ・用法	文型	出現数 (出現率)					
	教科書名	『みんな』		『あきこ』		『文化初級』	
	延べ数/異なり数	延べ数	異なり数	延べ数	異なり数	延べ数	異なり数
様態	「形容詞＋ (シ) ソウダ」	50 語 (46.73)	28 語 (46.67)	64 語 (71.91)	15 語 (51.72)	28 語 (44.44)	9 語 (50.00)
	「状態動詞＋ (シ) ソウダ」	4 語 (3.74)	4 語 (6.67)	4 語 (4.49)	4 語 (14.00)	15 語 (23.81)	5 語 (27.78)
変化の 予想	「変化/状態動詞 ＋ (シ) ソウ	32 語 (29.91)	18 語 (30.00)	8 語 (8.99)	5 語 (17.24)	10 語 (15.87)	2 語 (11.11)
直前の 徴候	「変化動詞＋ (シ) ソウダ」	21 語 (19.62)	10 語 (16.66)	13 語 (14.61)	5 語 (17.24)	10 語 (15.87)	2 語 (11.11)
合 計		107 語 (100)	60 語 (100)	89 語 (100)	29 語 (100)	63 語 (100)	18 語 (100)

各教科書ごとに文型と意味・用法別の表現の出現率を 100%とする。

教科書名の略：みんな＝『みんなの日本語』，あきこ＝『あきこと友だち』（ワークブックも含む），文化初級＝『文化初級日本語 I』である。

各意味・用法別にみると『あきこと友だち』は「形容詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の取り扱いが多い反面、「動詞＋ (シ) ソウダ」の変化の予想の出現数が少ない。ワークブックで「動詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の提示が見られる。

同様に『みんなの日本語初級 II』では、「形容詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法が多く、次いで「動詞＋ (シ) ソウダ」直前の徴候及び、変化の予想の意味・用法の提示がある。「動詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法（4 語）も取り挙げている。ただし、2 つの教科書とも、変化の予想と様態の意味・用法の明確な区別がなく、「状態動詞（可能形動詞）＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の取り扱いが少ない。

『文化初級日本語 I』は、「動詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の提示が延べ数 15 語である。まず、第 33 課で「形容詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法と「動詞＋ (シ) ソウダ」の予想と直前の徴候の意味・用法を学習する。その後第 35 課で状態動詞を使った様態の意味・用法を学習する。教科書ごとの「動詞＋ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の例文を次のページの【表 2-7】に示す。

【表 2-7】初級教科書の「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の例文

教科書名	提示される例文
『あきこと友だち』(4), (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・(1年生も) 答えられそうな問題 (1) ・「(安いので, 学生も) 買えそうです (1) ・(何時ごろ, むこうに) 着きそうですか。(1) ・(時間に) 遅れそうです。(1)
『みんなの日本語初級Ⅱ』	<ul style="list-style-type: none"> ・(いいレポートが) 書けそうです。(1) ・もうすぐ, 帰れそうです。(1) ・(服が) 売れそうです。(1) ・(会議が) 終わりそうです。(1)
『文化初級日本語Ⅰ』	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字が少ないから, 読めそうです。(4) ・(電車の席に) 座れそうです。(2) ・熱があって, (明日は) 行けそうにありません。(1) ・(おなかがいっぱいで), 食べられそうにないです。(1) ・(時間に) 間に合いそうです (3)

(表中の () の中の数字は延べ語数)

全体的に見ると、初級では「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法は、出現数が少ない。練習形態の分析³⁰では、運用面に焦点を当てた練習の種類が少ない。

2.2.2.2 中級教科書の「(シ)ソウダ」の学習項目の取り扱い

次に、中級の教科書の同様の教材分析を行う。本研究の調査対象者が、使用している教科書は『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』(田中よね他：2009), 『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』(鎌田他：1998), 『(同) [ワークブック]』(同：2013) 及び、『どんなとき、どう使う日本語表現文型 200』(Etsuko 他：2000) である。またタイで市販されているタイ語の文法解説付きの教科書の『ホップ・ステップ・ジャンプ (一)』(กนกวรรณ：2002) を加えて、4種類の教科書の教材分析をする。

中級になると、4種類とも「形容詞・動詞＋ソウナ」の文型で、連体修飾節の様態の意味・用法及び、「形容詞・動詞＋ソウニ」の文型で、連用修飾節の様態の意味・用法が多く扱われている。この中で『ホップ・ステップ・ジャンプ (一)』(กนกวรรณ：2002) が、「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の出現数が、他の教科書より多い。分析結果を次のページの【表 2-8】に示す。

³⁰ 初級教科書の練習問題形態ごとの分析は〔付録 2〕参照。

【表 2-8】中級教科書の意味・用法と形式別の出現回数の比較

意味・用法	文型	出現数（出現率）							
	教科書名	『みんな（中級）』		『生きた素材』		『日本語表現文型』		『ホップ・ステップ』	
	延べ数/異なり数/	延べ数	異なり数	延べ数	異なり数	延べ数	異なり数	延べ数	異なり数
様態	形容詞+（シ）ソウダ	14 語 (50.00)	14 語 (53.85)	9 語 (75.00)	8 語 (72.73)	11 語 (33.33)	9 語 (30.00)	36 語 (64.28)	16 語 (45.71)
	状態動詞+（シ）ソウダ	6 語 (21.43)	6 語 (23.08)	3 語 (25.00)	3 語 (27.27)	14 語 (41.18)	12 語 (40.00)	14 語 (25.00)	13 語 (37.14)
変化の予想	変化/状態動詞+（シ）ソウダ	8 語 (28.57)	6 語 (23.08)	0 語 (0)	0 語 (0)	3 語 (8.82)	3 語 (10.00)	4 語 (7.14)	4 語 (11.42)
直前の徴候	変化動詞+（シ）ソウダ	0 語 (0)	0 語 (0)	0 語 (0)	0 語 (0)	6 語 (17.65)	6 語 (20.00)	2 語 (3.57)	2 語 (5.71)
合計		28 語 (100)	26 語 (100)	12 語 (100)	11 語 (100)	34 語 (100)	30 語 (100)	56 語 (100)	35 語 (100)

表中の教科書名の略：みんな（中級）＝『みんなの日本語中級 I 本冊』，生きた素材＝『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』及び『(同) ワークブック』，日本語表現文型＝『どんなとき，どう使う日本語表現文型 200』，ホップ・ステップ＝『ホップ・ステップ・ジャンプ（一）』

中級教科書では，全体として出現数は，初級より減るが，様態の意味・用法が増える。『ホップ・ステップ・ジャンプ（一）』（延べ語数 56 語，異なり語数 35 語）及び，『どんなとき，どう使う日本語表現文型 200』（延べ語数 34 語，異なり語数 30 語）は，他の教科書と比べ，様態の意味・用法の出現数が多い。

練習形態から分析すると以下のようになる。『みんなの日本語中級 I』では，動詞の活用変換練習や絵を見て作文する問題，会話練習は，運用面を考慮した多様な練習形態がある。「動詞+（シ）ソウダ」の文型の中で，「ミーティングはまだ終わりそうにありません。」等の様態の意味・用法が多く提示されている。

『生きた素材で学ぶ 新・中級から上級への日本語』及び，『(同) ワークブック』では，「いかにも～（シ）ソウダ」の共起表現と関連づけて，形容詞，動詞の活用変換練習がある。

例文は「いかにもありそうな話だと思った。」である。

『どんなとき、どう使う日本語表現文型 200』は、「V タㇿ+ソウナ〜」の連体修飾の文型で、様態の意味・用法の「太郎ちゃんは食べたそうな顔をしています。」や「動詞可能形+ (シ) ソウダ」の文型の様態の意味・用法で「このパソコンなら、私にも使えそうです。」の例文の提示がある。また、理解面の形容詞、動詞の活用の練習問題がある。

『ホップ・ステップ・ジャンプ (一)』では、「可能形動詞+ (シ) ソウダ」の文型で「売れそう」、「覚えられそうにない」、「できそうにない」が提示されている。例文と絵と文を組み合わせた練習問題を中心に提示されている。

2.2.2.3 全体的な教材分析における「(シ) ソウダ」の意味・用法の取り扱い

以上から、初級レベルで「形容詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、「動詞+ (シ) ソウダ」の直前の徴候、変化の予想の意味・用法を中心に学習することがわかった。また「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、中級の学習項目としての取り扱いが、多い。各教科書ごとに、出現率に差があるものの全体的には、共通して3つの意味・用法を学習項目として、取り挙げていることがわかる。

様態の意味・用法³¹についてみると、初級の限られた学習時間内で、「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、あまり扱わない。中級に含める学習項目になっているといえよう。このことから、中級まで含めると、3つの意味・用法は「(シ) ソウダ」の意味・用法の学習項目と言えるため、これを基に学習することが適していると言える。

学習方法は、各意味・用法をそれぞれの文型に当てはめ、個別に覚える形式となっている。その結果、変化する予想の基本概念として、3つの意味・用法を関連づけて学習することができないという点が指摘される。

2.2.2.4 教科書におけるモダリティ表現の置き換えの取り扱い

「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の表現の人称の相違で「ヨウダ」との置き換えが可能であったり、不可能であったりするという点の文法解説が見当たらない。例えば、話者自身の様態の予想を表す場面で、1人称の話者自身が文の主体となる場面の例文で、「(私は) 時間に

³¹ 初級では、「形容詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、「動詞+ (シ) ソウダ」の直前の徴候の意味・用法を学習項目として学ぶと言える。そのため、3人称の文の「描写の場面」を中心に、学習する傾向があると思われる。これは、コーパス分析の使用頻度の高いものから学習できるようになると言える。しかし、注目する点は、コーパスの使用数が、多い様態の予想の意味・用法の「できそう」=973件(『少納言書き言葉コーパス』)の取り扱いは、全体的に初級の教科書では、提示が見られない。

遅れそうなので、(約束の時間を変更したい。)(『みんなの日本語中級 I』 pp.33-35)」という文と、3人称が文の主体となる場面の例文の「雨が降りそうな日は、洗濯をしません。(同)」の両方が、様態の意味・用法として区別されず、提示をされている。

この場合、1・2人称が主体となる文は「ヨウダ」に置き換えられない。一方、3人称が主体となる文は、意味が変わるものの「ヨウダ」に置き換えることが可能である。この点を教師が、気が付かないまま教科書の提示のまま教えると、学習者は安易に「ヨウダ」と置き換えられると考え、非文を作ってしまう可能性が生じてくると考えられる。これは、学習者が使用率の高い「形容詞+(シ) ソウダ」の3人称の様態表現を「動詞+(シ) ソウダ」の様態表現でも同様だと考えてしまい、1・2人称の「(シ) ソウダ」の予想を伴う様態の意味・用法に気が付かなくなる原因となる。これについては、後述する4.1.3の〔調査2〕の結果及び、5.1.で詳しく述べる。

初級、中級教科書を含め、人称に関係なく例文が並んでいるため、学習者は使い分けの面で混乱が生じる。そのため、教師は、1・2人称の「動詞+(シ) ソウダ」の様態の意味・用法は、「ヨウダ」に置き換えられない表現であるということを明確に教えることが重要であると言える。今回取り挙げた初級、中級教科書の教員用手引書には、直前の徴候だけが「(シ) ソウダ」に特徴的表現であり、「ヨウダ」に置き換えられないという記述があるが、様態の意味・用法の1・2人称の文は、置き換えられないというこの項目は、記述されていないものがある³²。

これは、後述する川口(2005)³³の「語る表現」と「働きかける表現」の区別が明確に提示されていないことが原因であると考えられる。そこで、効果的な学習方法を考える上で、教科書の学習項目を改善策の重要なポイントして取り上げること考えることにする。そこで、次に、教授法の提案についての先行研究を述べる。

2.2.3 「(シ) ソウダ」の教授法に関する先行研究

「(シ) ソウダ」を含むモダリティの指導法については高橋(2010)、石田(2000)などがある。どういう場面で使われるかが、重要であるという指摘をしている。絵や実物を使用したり、会話場面を設定したりして、理解の定着や運用面の応用力をつけようとしている(石

³² ケキゼ(2000)、Kekidze(2004)、仁田(2000、2004)には記載されているが、日本語文法記述研究会編(2009)、今回教材分析で取り挙げた教科書及び、その教員指導書には、この記述がない。

³³ 川口(2005)の提唱は、2.2.3.4を参照

橋 2000, 睦路・川木 2000, 山森 2006)。このような先行研究の提案を要約する。

続いて、使用場面別の教授法として、文脈化を前提とした場面別の教え方について提唱している川口 (2000, 2003, 2005) の先行研究を述べる。その中で、特に川口 (2005) の「語る表現」と「働きかける表現」を場面として、取り挙げた新しい教授法を紹介する。

2.2.3.1 石田 (2000)

初級の文法事項を指導する際、場面と表現について関連させて指導することを提案している。文型を教えただけでは、使えるようにならない。どういう場面でその文型を使うか、その文型が果たす役割を理解させる必要を述べている (同 : pp.150-156)。

次に場面別にどのような構文の表現が使われるかを知らないと、文法的に正しくても不自然な表現となる。そのために文型練習前後で場面設定のある簡単な会話練習を行い、自分の言いたいことをその文型を使って言えるようにする。その段階まで達しなければ、その文型を学んだことにならないと述べている (同 : p.156)。

2.2.3.2 高橋 (2010)

初級後半の日本語学習者に対して、日本国内のホームステイ前の準備のための授業として「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法を主に取り挙げて学習した。グループワークで会話タスクを行う方法を取り入れたモデル授業を行った。例文として、「(ホストファミリーから、氷まくらをもらって) これでよく寝られそうです」という様態の表現の練習をしている。学習後の学習者からのコメントには、ホームステイで使える会話表現なので、役に立つ文型表現の練習であったという報告がある。

2.2.3.3 市川 (2011)

「(シ) ソウダ (様態)」は形容詞に接続する場合と動詞に接続する場合がある。「前者に指導の重点が行きやすいので、後者の理解・練習も十分にすべきであり、動詞接続では「感じ (兆候)」を表す場合とその事態が起こる「可能性」を表す場合がある。そのうち学習者はこの「可能性」を表す文型があまり使えないので、十分練習させること」(同 : p.130) を提案している。そして、教える際その表現はいつ、どういう状況で、どんな文脈で使うのかを学習者に示すことが大切であると述べている。

2.2.3.4 川口 (2000, 2003, 2005)

文法教育と会話教育を有機的に結びつけるための教授法の新しい概念として、「働きかける表現」と「語る表現」を提唱している。1つの目の「働きかける表現」とは、相手に働きかけることで、特定の「表現意図」を満足させる表現である。例えば、「～といいですね」のように相手への希望表明がその機能にあるとしている。例文は「フルーツでダイエットすると、

やせられますよ。」(川口：2005)である。2つの目の「語る表現」とは、「何かをするため」の実用性はないが、それによって自分のことや他者のことを、どう捉えているか、自己の内面を言語化した表現の描写文である。例文は「毎朝8時半になると、図書館が開きます。」(川口：2005)である。

初級レベルから教科書の文型、会話練習、練習問題を教える際、2つの表現のどちらであるかを、明らかに示した上で、バランスよく両方の表現機能とも初級の文型の紹介の時点から教えることを提案している。

また、「働きかける表現」では、「だれが、だれに向かって、何のために」表現するかという「文脈化」の概念が重要であり、各文型表現の練習の中で、それを明示しなければならないとしている。

以上から、本研究では、まず【課題1】を解明するために、タイ人学習者を対象に使用傾向の調査を実施し、どのような使用の偏りが見られるかを調査する。その使用傾向を基に、新しい指導法を考える。その際、先行研究の川口(2005)の新しい教授法の提案を、知見に取り入れて【課題2】の学習の改善案を提案したい。改善した学習法で、学習効果が期待できると考えられるためである。そして、その「語る表現」と「働きかける表現」を学習項目に設けた実験授業を実施し、タイ人学習者に対して、どのような学習効果が見られるかを調べることにする。

第3章 研究方法

第3章は3節から成る。3.1は、本論文の表記方法を述べる。3.2では本論文における動詞、形容詞の分類を述べる。3.3では、実態調査として調査対象者と調査方法を述べる。

調査方法は4つある。〔調査1〕では、会話文完成テストの実施概要を述べる。〔調査2〕では、日本語母語話者の使用傾向を調査し、タイ人学習者の関連するモダリティ形式の使用傾向と比較する。〔調査3〕では、意見文の作文産出テストの実施概要を述べた後、1回目のフォローアップインタビューの実施方法について述べる。

〔調査1～3〕の結果に基づいて「働きかける表現」を学習項目として取り入れた実験授業の実施方法を述べる。その後〔調査4〕として、学習効果を検証するためのアンケート調査と2回目フォローアップインタビューの実施について述べる。

3.1 本論文の表記方法

本論文では、文法表現が適切かどうかを判断するために、次のような表記方法に統一する。

- = 適切な表現である。(また、無記号の例文も適切な文である。)
- △ = 他の適切な表現がある。
- × = 非文である。

(会話文の例)

A1: ○ Bさん、うれしそうですね。

A2: △ Bさん、うれしいでしょう。

A4: × Bさん、うれしいかもしれません。

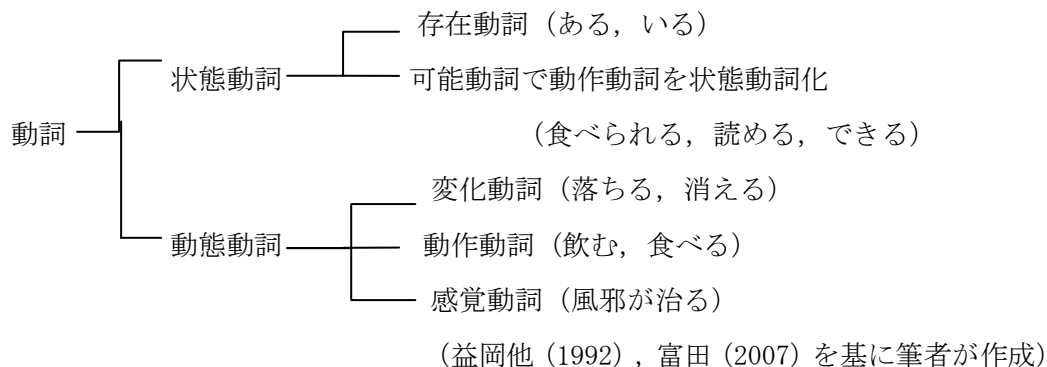
B: ええ、来月から月給が上がるんですよ。

3.2 本研究における動詞、形容詞の下位分類の定義

本研究では動詞、形容詞の下位分類については、益岡他(1992)、工藤真由美(1995)、富田(2007)に基づいて以下のように分類する。

動詞は、状態動詞と動態動詞の2つに分ける。状態動詞の中には、存在動詞(「ある」、「いる」)及び、可能動詞で、動作動詞を状態動詞化したもの(「食べられる」、「読める」等)が含まれる。次のページの【図3-1】に示す。

【図 3-1】 動詞の下位分類



形容詞の下位分類については、益岡他 (1992) を基に、属性形容詞 (「おいしい」) 及び、感情形容詞 (「こわい」) に分類する。

「(シ) ソウダ」の意味・用法は、第 2 章の先行研究の 2.1.1.2 の主な 3 つの意味・用法を基に、直前の徴候、変化の予想、様態の 3 つとする。詳細は以下【表 2-3】に基づく。

再掲【表 2-2】 本研究における「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類

	意味・用法	文 型	例 文 (出典)
①	直前の徴候	動態動詞+(シ)ソウダ	おい, シャツのボタンが <u>とれそう</u> だよ。 (日本語記述: 2009)
②	変化の予想	動態動詞+(シ)ソウダ	午後は, 雨に <u>なりそう</u> だ。 (日本語記述: 2009)
		形容詞+(シ)ソウダ	鈴木を説得するのは, <u>難し</u> そうだ。 (日本語記述: 2009)
③	様態(可能性の推量を含む)の予想	形容詞+(シ)ソウダ	このメロンは <u>おいし</u> そうだ。 (日本語記述: 2009)
		状態動詞+(シ)ソウダ (動詞可能形+(シ)ソウダ)	田中君は留学してたから, 英語が <u>でき</u> そうだ。 (日本語記述: 2009)
	比 喩	動態動詞/状態動詞+(シ)ソウダ	腹が減って, <u>死</u> に <u>そう</u> だ。 (日本語記述: 2009)

表中の略語「日本語記述」は、日本語記述文法研究会編の略である。

関連するモダリティ表現の意味・用法の分類は、以下の通りとする。様態の意味・用法は「(シ) ソウダ」及び、「ヨウダ・ミタイダ」, 「ラシイ」で重なるものがある。「ヨウダ・ミ

タイダ」,「ラシイ」は,証拠性を伴う様態表現のみに使用可能である。一方,「(シ) ソウダ」は,証拠性がある場合及び,証拠性がない場合(または,話者の想像のみの場合)の両方に使える。よって,証拠性がない場合(想像の場合)は「ヨウダ・ミタイダ」,「ラシイ」は使えない。「(シ) ソウダ」の変化の予想の意味・用法と「ヨウダ・ミタイダ」,「ラシイ」は確かな予兆または,意志決定があり,必然的に起こる事態について共に使用可能である。一方,未知の不定時に起こる事態に対しては「ヨウダ・ミタイダ」,「ラシイ」は使えない。これに「ト思ウ」,「カモシレナイ」を含め,関連するモダリティ表現の意味・用法と使い分けを第2章の先行研究の2.1.2の【表2-4】の分類表にまとめた。

本稿では,タイ人学習者の使用傾向を分析する際,これらの「動詞,形容詞+(シ) ソウダ」の文型及び,関連するモダリティ表現の意味・用法の分類を用いることにする。

3.3 調査方法

実態調査の調査対象者と各調査方法を述べる。調査は4つある。第一段階は,【課題1】を解明するために〔調査1~3〕を行う。第二段階は【課題2】を解明するために,〔調査4〕を行う。

3.3.1 調査の場所, 対象者及び, 調査実施期間

ブラパー大学教育学部で,調査を実施する。対象者は大学4年生(全32名。内訳女性29名,男性3名)である。日本語のレベルは,N3合格者3人,N4合格者19人,N5合格者10人である。(『みんなの日本語』の50課までの学習を終えたばかりの学習者である³⁴。)

また,日本語母語話者10名にも,モダリティ表現において,母語話者の使用傾向を知るために調査を行う。タイ在住及び,日本在住の日本語母語話者(25歳~60歳)10名(男性5人,女性5人)を対象に行う。日本語母語話者の使用傾向を調べ,タイ人学習者と比較するためである。

さらに,同大学,同学部の同等の日本語のレベルのタイ人学習者(32名)にも,調査を実施する。これは,通常の学習項目のみで,同人数で授業を行うクラスとして設定する。理由は,新たに学習項目を設定した実験授業を受けた前述の32名のクラスの学習効果を,この通常クラスと比較するためである。調査期間は,2015年1月から4月までである。

3.3.2 調査方法

調査は次の4つである。

³⁴ 合計300時間の学習時間終了者。全体のレベルは,中級前半の入り口の段階である。

(1) 【調査1】 会話文完成テスト(1)

タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の文法形式と意味・用法の使用実態を調べるため、山森(2006)を参考に会話文完成テストを行う。調査は、2015年1月14日に実施する³⁵。単語を与えた上での空欄補充問題である。制限時間は1時間である。問題は全26問である。問題形式は、「(シ) シウダ・カモシレナイ・ヨウダ・ミタイダ・カモシレナイ・ト思ウ・何も入れない・その他」の中から、1つ選択し、挿入する問題を作成した。これは「(シ) ソウダ」の意味・用法及び、関連するモダリティ表現を適切に使用しているかを、明らかにするために調査した。一部、関連するモダリティ表現も含め、設問を作成した。今回の調査項目とした単語の内訳は、以下のものである³⁶。以下の【図3-2】に設問の一部を紹介する。

【図3-2】 会話文完成テストの設問の一部

- | |
|---|
| ① A: 何がこわいですか。
B: 私は暗いところがこわいです。 幽霊が (出る) からです。 |
| ② A: えんぴつが 机から (おちる)。
B: あっ。本当だ。ありがとう。 |
| ③ A: 祭日は, デパートの映画館は, 人が (多い)。
B: そうですね。道も混みそうです。 |
| ④ A: 田中さんが婚約したのを知っていますか。
B: そうですね。だから (うれしい) 顔をしているんですね。 |
| ⑤ A: 日本の歌手のAK48は, あまり知らないけど, とくテレビに出ているね。
B: たぶん日本で, すごい人気がある () よ。 |

「形容詞+ (シ) ソウダ」の文型で様態の意味・用法は、属性形容詞（「高そうだと、おいしそうだと」）2問及び、感情形容詞（「こわそうだと、かなしそうだと」）2問である。また「形容詞+ (シ) ソウダ」の文型で、予想を表すものは「祭日はデパートは人が多そうだと」、「あしたのテストは難しそうだと」2問である。

動態動詞の直前の変化を表すものは、変化動詞（「落ちそうだと、消えそうだと」）2問及び、動

³⁵ その後、単語、順番などを入れ替えて数回調査し、ばらつきがあったものは除外する。使用率が最も近似しているデータ結果に絞り、その際、顕著な数値が表れたものを調査する。数回行った理由は、1回の調査のみでは、偶然の解答の場合もあり、使用の偏りを明確することができないと考えるためである。

³⁶ これらの語彙は『みんなの日本語 I・II』、先行研究の例文の語彙及び、『少納言書き言葉コーパス』から使用頻度が高いものから筆者が適時に選抜した。また、このテストは、タイ人学習者に対して、単語や文や設問の順を入れ替えて、数回にわたり実施した。

作動詞（「食べそうだ、帰りそうだ」）2問及び、変化の予想（見通し）を表すもの（「晴れそうだ³⁷・幽霊が出そうだ」）2問である。

様態を表す動詞は、「きれいになりそうだ、涙が出そうだ」及び、これに関連し、比喩表現（「頭が痛くて、割れそうだ、おなかがすいて、死にそうだ」）2問である。様態の予想を表す動詞では、「太りそうだ、やせそうだ」2問である。また感覚動詞（風邪をひきそう、風邪が治りそう）2問である。

次に状態動詞では、様態を表す「人気がありそうだ、ユーモアがありそうだ」2問を設けた。また、動詞の可能形で様態を表す動詞として（「食べられそうだ、できそうだ」）2問を設けた。

これらの文脈、単語の意味が学習者に理解できない場合、筆者が簡単なタイ語で意味を説明した。また
形容詞・動詞の種類についても日本語でどのような分類として扱われるか、その種類についても簡単に説明を行う。〔調査1〕の結果では、「(シ) ソウダ」の意味・用法だけを取り上げて分析する³⁸。

(2) 〔調査2〕の会話文完成テスト (2)

日本語母語話者を対象に、「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現の使用傾向を調査する。これを〔調査1〕で行ったタイ人学習者のモダリティ形式別使用傾向と比較する。

理由は、母語話者の使用傾向とタイ人学習者の使用傾向を比較することで、タイ人学習者の使用傾向の偏りを明らかにするためである。

〔調査1〕の会話文作成テストと同様の質問票を使って、日本語母語話者の「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ形式「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ」などの使用傾向調査を実施する。実施期間は、2015年1月から2月までである。日本語母語話者についての調査は個別に面接及び、Eメールにより、1ヶ月費やして、データを回収する。

³⁷この動詞は、晴れている状態を表す場合は、状態動詞として扱うことができるが、今回の調査で用いた会話文完成テストでは、天候の変化について表現する動詞として扱う。「(雨の日の場面で)、空が明るくなってきたから、午後からは、晴れそうです」という設問であるため、変化に注目した表現である。そのため、この場合の「晴れる」は、今後の天気の見通しとして、予想を述べている表現として、扱うことにする。以上の理由から、本研究では、変化（見通し）の予想の意味・用法に分類した。

³⁸ この質問票の詳細は〔分析資料1〕を参照。また学習者の解答は〔分析資料4〕を参照。

(3) [調査 3] 意見表明の作文テストとフォローアップ・インタビュー

作文産出において、学習者がどのような表現として「(シ) ソウダ」を使用しているか、その傾向を調べるために行う。調査対象者は 3.3.1 と同様である。調査日は、2015 年 1 月 21 日である。調査方法は次のように行う。

意見文の作文テストでは、日本に行ったことがないタイ人日本語学習者を対象に雑誌、テレビ、ウェブサイトで見た日本の情報から、日本のついでイメージを書いてもらった。日本へ行ったら、どこで、何をしてみたいか、どんなものが見られるかについて自由に作文してもらった。A4 用紙 1 枚に 600 字以内で書いてもらった。制限時間は 1 時間で、辞書の使用を認める条件で行った。

書いてもらった作文の中で「(シ) ソウダ」のどのような文法形式と意味・用法が多いかについて、その使用頻度を調査する。関連するモダリティ表現の使い分けもみる。

テスト回収後、後日、フォローアップインタビューを行った。無作為に選んだ 4 人の学習者を対象に行う。インタビュー時間は、1 人につき 5 分以内である。どのような考え方で、[調査 1.~3] の解答をしたかを答えてもらう。

これは、学習者の「(シ) ソウダ」の意味・用法の理解及び、関連するモダリティ形式の使い分けについての使用理由を明らかにするためである。

(4) 実験授業の実施計画及び、[調査 4] アンケート調査とフォローアップ・インタビュー

[調査 1~3] の「(シ) ソウダ」の使用偏重の結果から学習の問題点をまとめる。これを基に解決案として「働きかける表現」を学習項目として、取り入れた会話文作成タスクの実験授業を提案する。提案としては、様態の意味・用法を中心とした「働きかける表現」の「希望表明の場面」を設けた会話タスクの実施を提案する。その際の実験授業の実施方法を述べる。

対象者は、[調査 1] と同様である。調査日は 2015 年 3 月 18 日である³⁹。実施方法は「(シ) ソウダ」の意味・様式別に「語る表現」の「描写場面」と「働きかける表現」の「希望表明の場面」の会話文作成タスクを実施する。

実験授業の内容は次の通りである。グループ活動として行う。どんな場面で、どんな意図で、会話をするか考えた上で、行う。タスクカードには、場面のイラスト及び、条件、指示内容を提示する⁴⁰。自由にグループ内で話し合っ、タスクを実施する。1 グループは 4-6 人程度で全部で 8 グループとする。会話文ができれば、2 人（または 3 人）のペアで会話文を覚えて、

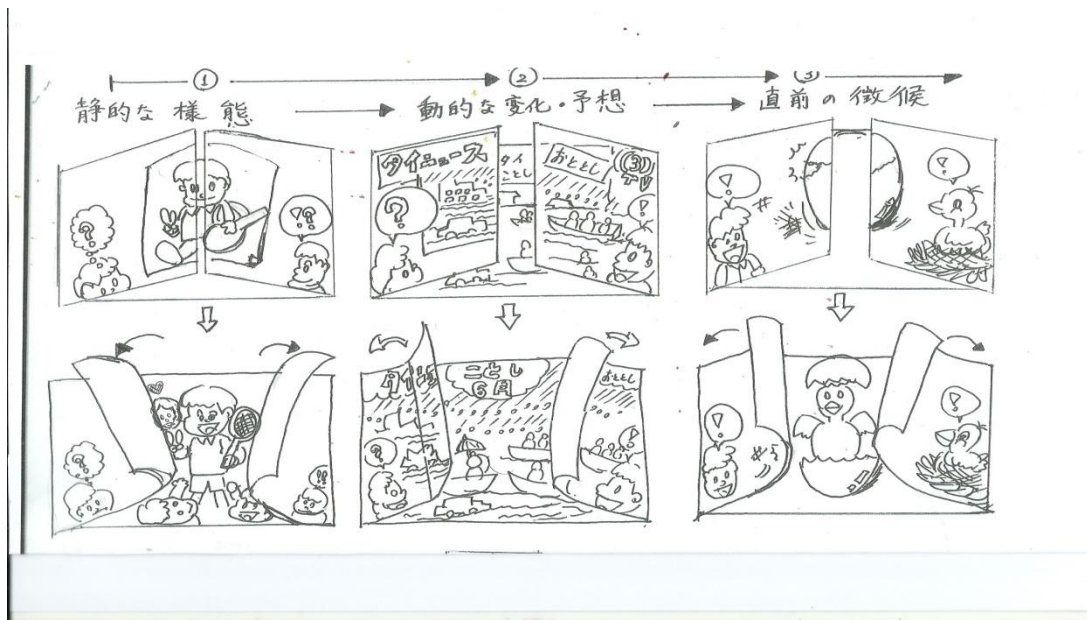
³⁹ [調査 1~3] の後、しばらく日数をあけて実施した。

⁴⁰ また、単語については、個別に学習者の質問があった場合、学習者の日本語のレベルの応じて、段階的に与えるようにする。

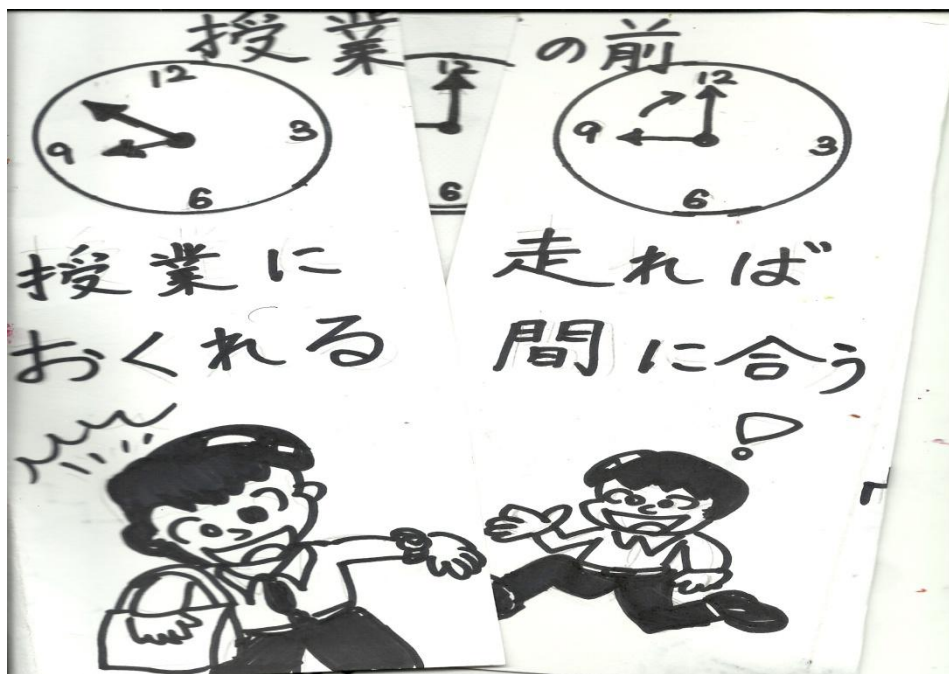
3-5分で、ロールプレイをする⁴¹。以下にタスクで使用するイラストの主なものを紹介する。

【図3-3】は「語る表現」の「描写の場面」のタスク用、【図3-4】は「働きかける表現」の「希望表明の場面」タスク用である。

【図3-3】「語る表現」の場面の会話タスク用のとびら型のイラスト(筆者作成)



【図3-4】「働きかける表現」の場面の会話タスク用のとびら型のイラスト(筆者作成)



実験授業では、初めに様態の意味・用法の「形容詞+(シ)ソウダ」の句型及び、比較的タ

⁴¹ 場面別の会話文作成タスクで参考にする教材は、鮎澤(1998)、鎌田ほか(2013)、Sasaki(2003)、小山(2004)の教材を参考にする。

イ人学習者が理解できている直前の徴候の意味・用法の「動態動詞（変化動詞）＋（シ）ソウダ」の文型で、場面別会話タスクを実施し、タスクのやり方に馴れてもらう。これは、「語る表現」の「描写の場面」の会話文作成タスクである。

次に学習者が理解できていない様態の意味・用法の「状態動詞（可能動詞）＋（シ）ソウダ」、
「動態動詞（変化動詞）」及び、予想（見通し）の表現で「動態動詞（変化動詞・感覚動詞）」
の場面別の会話タスクを同様の手続きで実施する。これは「働きかける表現」の「希望表明の
場面」を中心とした会話文作成タスクである。

また、実験授業の効果を比較するためのクラスをもう1つ通常クラスとして設ける。この
クラスは同大学の同日本語レベルの学生（32名）である。このクラスは、既存の学習項目だけ
で、様態の意味・用法を中心に、中級レベルの文型練習や会話練習問題を授業で行う。使用教
科書は、田中よね他（2009）の『みんなの日本語中級 I 本冊』及び、Etsuko（2000）の『どん
なとき、どう使う日本語表現文型 200』である。この通常クラスは、実験授業のクラスの後に
実施する。

その後、実験授業の効果を検証するため、〔調査4〕としてアンケート調査を行う⁴²。調査対
象者は、実験授業体験者32名及び、これと比較するための通常クラスの学習者32名である。
この調査は、どのような学習効果があったかを調べるために行う。3週間後に行い、学習効果
の定着を検証する。調査実施期間は2015年4月10日である。制限時間は20分である。

調査項目のアンケート内容は鮎澤（1998）を参考に、質問票を作成する。主な質問は「状態
動詞（可能動詞）＋（シ）ソウダ」、「動態動詞（変化動詞）」、「形容詞＋（シ）ソウダ」の様
態の例文を読んで、学習者が適切と考えて、使用するかどうか、○×式で回答してもらう。ま
た、○の場合は、どんな意味・用法を考えているか、直前の兆候・変化の予想・様態の中から
選択式で回答してもらう。アンケートの質問票の様態の意味・用法について設問の例文を挙げ
ると、「きのうはよく勉強したから、テストでいい点が取れそうだ。」、「あの人は背が高く
て、走るのが速いから、たぶんサッカーができそうだ。」等の例文である。

さらに、この質問票の解答について前回のインタビューと同様の4名に対して、2回目のフ
ォローアップインタビューを行う。これは学習者の理解面がどのように促進されたかを調査す
るためである。制限時間は5分以内である。これは、〔調査4〕の後に行った。

以上の〔調査1～3〕の結果は、次の第4章で述べる。また〔調査4〕の結果は第5章で述
べる。

⁴² このアンケート調査の質問票は〔分析資料2〕を参照。学習者の回答は〔分析資料5〕を参照。

第4章「(シ) ソウダ」の使用傾向からみた問題点

本章は2節から成る。**【課題1】**のタイ人学習者の使用傾向を解明する。4.1では、〔調査1〕の会話文完成の文法テストを行うことで、のタイ人学習者の「(シ) ソウダ」の意味・用法の使用傾向をみる。続いて〔調査2〕では、関連するモダリティ表現について日本語母語話者の「(シ) ソウダ」の使用傾向とタイ人学習者の使用傾向を比較をする。4.2では、〔調査3〕の意見文の作文産出による「(シ) ソウダ」の使用傾向をまとめ、タイ人学習者の使用の偏りを分析する。その後〔調査1～3〕の結果について、学習者はどのような理由で「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現を使用しているかをフォローアップインタビューを行い、分析する。

4.1. 会話文完成テストによるタイ人学習者の使用の特徴

4.1.1 「(シ) ソウダ」の意味・用法別使用傾向

前章の〔調査1〕の手続きに従って、タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向をまとめ、分析する。

32名のタイ人学習者を対象に調査した。会話文完成テストは、26の設問がある。本調査では、特徴的な結果が表れたものとして、合計24の設問を取り出して分析する。これを各2問ずつを1つの文法形式及び、意味・用法別の項目にまとめる。そして、12の文法形式及び、意味・用法のそれぞれの平均使用率を調べた。テストの解答方法は、各設問に対して、各モダリティ表現のどれが適切かを選んで書く方法である⁴³。その結果を学習者の使用率として表すことにした。またこの会話文完成テストは、単語及び文の順番を入れ替えて数週間に分け、5回実施した。

さらに人称制限についても考慮するため、各設問の文脈によって1・2人称と3人称に分けた。調査結果の表中の「-」の記号は、その人称での使用がない場合を表す。例えば「形容詞+(シ) ソウダ」の様態表現は1人称で自分のことを「楽しそうだ」を表現しないので、この項目は「-」となる。「✓」はその人称の表現ができるものである。「(✓)」はその人称での表現があるが、今回の調査の設問に設定しなかったものである。

結果は次のページの**【表4-1】**に示す。

⁴³ 選択肢は、「(シ) ソウダ・ヨウダ・ト思ウ・カモシレナイ・(スル) ソウダ」である。各設問は、4.2.1 参照。

【表 4-1】 タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の意味・用法別の使用傾向

品 詞	意味・用法	種類	語 彙	使用率	平均使用率	1・2 人称	3 人 称		
形容 詞	1 様態	属性	高そうだ	96.98%	96.98%	—	✓		
			おいしそうだ	96.98%					
		感情	悲しそうだ	75.00%	87.44 %				
			こわそうだ	93.75%					
	2 予想	属性	人が多そうだ	62.25%	62.25%	—	✓		
		感情	難しそうだ	62.25%					
動 態	3 直前の 徴候	変化動 詞	落ちそうだ	59.38%	60.94%	—	✓		
			消えそうだ	62.50%					
	2 予想	変化動 詞	空が晴れそうだ	62.50%	62.50%	—	✓		
			幽霊が出そうだ	62.50%					
		動作動 詞	帰りそうだ	46.88%	39.06%			—	(✓)
			食べそうだ	31.25%					
	1 様態 (想定)	変化 動詞	きれいになりそうだ	12.5%	20.31%	✓	(✓)		
			涙が出そうだ	28.13%					
	2 比喩		頭が割れそうだ	40.63%	30.80%	✓	(✓)		
			死にそうだ	20.97%					
	3 予想		太りそうだ	62.50%	48.39%	✓	✓		
			やせそうだ	31.25%					
	2 予想	感覚 動詞	風邪をひきそうだ	46.88%	45.31%	✓	✓		
			治りそうだ	43.75%					
状 態 動 詞	1 様態	可能 動詞	食べられそうだ	43.75%	50.00%	✓	✓		
			できそうだ	56.25%					
	1 様態	存在 動詞	人気がありそうだ	43.75%	46.88%	—	✓		
			ユーモアがありそうだ	50.00%					

語彙の選択は日本語の教科書で扱われているものか筆者が任意で採用した。

太字は、使用率が 56%（約過半数）以下のものを示す。

4. 1. 1. 1 全体的な使用傾向

【表 4-1】の使用傾向を全体的に「形容詞＋(シ) ソウダ」対「動詞＋(シ) ソウダ」の対照から使用率を見ると、タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の文法形式と意味・用法を形容詞対動詞の対立で捉え、大まかに見ると一対一の意味・用法の対応をさせていることがわかる。「形容詞＋(シ) ソウダ」は、様態の意味・用法は使用率が 80%以上で高い。同じ形容詞で

も予想の意味・用法の使用率になると、62.25%である。これは「形容詞＋（シ）ソウダ」の文型に、様態の意味・用法を対応させていると考えられる。一方、「動詞＋（シ）ソウダ」は、直前の兆候も変化の予想の一部と捉えるなら、全体的な傾向として「変化動詞＋（シ）ソウダ」の文型で、予想の意味・用法に使用率が高い傾向が見られる⁴⁴。

このように大まかに一対一の対応をさせる傾向がある。そのため「動詞＋（シ）ソウダ」の直前の徴候の意味・用法の「落ちそうだ」、「晴れそうだ」など、変化がはっきりしている動詞に使用率が高い。変化動詞でも、すぐに変化が起こらない長期の予想「やせそうだ」及び、様態の変化の「涙が出そうだ」の使用率が低い。

反対に「状態動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法は、「ユーモアがありそうだ」、「人気がありそうだ」が平均46.88%の使用率である。様態の想定（予想）の「食べられそうだ」、「できそうだ」の動詞の可能形は、平均使用率50%である⁴⁵。

この他の使用率が低い設問を見る。すぐに変化が起こらないため、明確な予想ができない表現の使用傾向では、「やせそうだ」の使用率は31.25%である。また、「きれいになりそうだ」及び、「涙が出そうだ」の平均使用率は20.31%である。これらの使用率を見ると、動態動詞の変化動詞を使った動詞の文型で、様態の予想の意味・用法が、使用率が低い。

次に人称別にみると3人称については、「（シ）ソウダ」は全てにつく一方、1・2人称では限定的な使用しかないものがある⁴⁶。意味・用法では1・2人称では、人称制限がある。それを反映してタイ人学習者は全体的に3人称のみに使える設問では、使用率が高く、1・2人称にも使える設問では、使用率が低い。

4.1.1.2 使用率が高い文法形式と意味・用法

まず、「形容詞＋（シ）ソウダ」の様態表現では、使用率が80%を越えている。この意味・用法は、使用が可能と言える⁴⁷。

次に、「動詞＋（シ）ソウダ」の使用傾向を見る。動態動詞の変化動詞「晴れそうだ」、「（幽霊が）出そうだ」の予想・見通しの意味・用法は平均62.50%の使用率で、これに次いで「落ちそうだ」、「消えそうだ」の直前の徴候の意味・用法は、平均60.94%の使用率となっている。全体的に見ると「動詞＋（シ）ソウダ」の文型で、直前の兆候及び、変化の予想が適切

⁴⁴ ただし、[調査2]によれば、学習者が他のモダリティ表現を優先的に使用する場合がありますため、100%の使用率にはならない。また、これは、母語話者の使用傾向においても見られる。

⁴⁵ これは、山森（2004）の指摘と同様の結果である。

⁴⁶ 1人称では形容詞で自分の様態を表わすことがない。（例：×私は元気そうだ。（筆者作例））

⁴⁷ その中では、属性形容詞の「おいしそうだ」、「高そうだ」（98.98%）の方が、感情形容詞「こわそうだ」、「かなしそうだ」（87.44%）より少し使用率が高いが、両者とも高い使用率となっている。

だと考える学習者は60%を超えている。

4.1.1.3 使用率が低い文法形式と意味・用法

状態動詞の可能動詞接続の「食べられそうだ」、「できそうだ」の平均使用率は50%である。残り半分の学習者はこの様態の想定や様態の予想の意味・用法⁴⁸が理解できていないと言える。様態の意味・用法を表す状態動詞の「ユーモアがありそうだ」、「人気（にんき）がありそうだ」の使用率も46.88%で低いと見なされる。

さらに使用率が低いものは、比喩表現の「頭が割れそうだ」、「おなかがすいて、死にそうだ」（平均使用率30.80%）及び、様態の変化（想定）の表現「涙が出そうだ」（使用率20.31%）である。また、すぐに変化が見られない様態の予想（想定）の表現「きれいになりそうだ」では使用率は12.5%となり、低い使用率となっている。

このことから、「状態動詞+（シ）ソウダ」の様態の意味・用法に加え、「動態動詞+（シ）ソウダ」の様態の予想（想定）で、すぐに変化が生じない不明確な予想の意味・用法及び、比喩表現において、使用率が低いことが明らかになった。

4.1.2 日本語母語話者とタイ人の学習者のモダリティ形式別の使用の特徴

本節では、〔調査2〕を実施する。この調査は、タイ人学習者のモダリティの形式別の使用傾向がどのようになっているかを調査する。前章の調査方法に従って、同様の会話文完成テストを行い「（シ）ソウダ」、「ヨウダ」、「カモシレナイ」、「ト思ウ」、「伝聞（スル）ソウダ」、「何も入れない」⁴⁹の選択肢の中から、最も適切なモダリティ表現を1つ選択するという調査を実施した。

次に、日本語母語話者にも同様の会話文完成テストを実施し、その使用率を比較する。この調査から、日本語母語話者が適していると考えているモダリティ表現の「（シ）ソウダ」の文法形式と意味・用法に対し、タイ人学習者がどのようなモダリティ表現を当てはめて使用しようとしているかがわかる。今回の母語話者の調査では、使用率が顕著なものとして、

⁴⁸ 「動詞+（シ）ソウダ」の様態の意味・用法は、様態の想定、様態の予想の表現を含むと筆者は考える。不確かな静的な様態を表す場合は、様態の想定である。また、動的であるが、不確かな様態を表す場合は、様態の予想となる。これが、明確な動きを伴う場合は、変化の予想となり、これら全体が推移の予想の表現として、つながっていくと考える。先行研究で述べたケキゼ（2000）では、これを1つの基本概念として「プロセス」と呼んでいる。詳しくは、2.1.1.1 参照。

⁴⁹ 「何も入れない」という選択肢は、まず、いずれかのモダリティ表現を考えて、入れるようにした上で、どうしても何も入れることができないと考えた場合のみ選択してもよいという指示を出して〔調査1～2〕を行った。そのため、結果として調査対象者は、ほとんど選択していない。

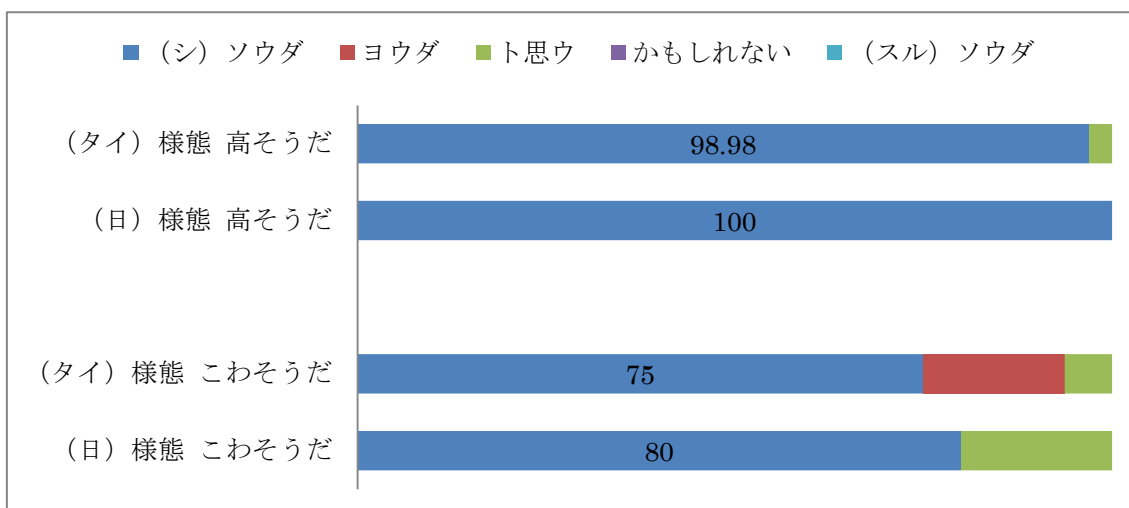
70%~80%以上のものを母語話者の使用傾向がはっきり見られるものであると考え、タイ人学習者との比較データとして取り上げることにした。

調査した設問の中から 10 の会話文の設問を取り挙げて分析する。(1) ~ (4) は、母語話者とタイ人学習者のモダリティ表現で、「(シ) ソウダ」の使用率がほぼ近似するものを示す。会話文 (5) ~ (10) は、母語話者とタイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用率が異なるものを示す。表中の (タイ) は、タイ人学習者 (32 名), (日) は日本語母語話者 (10 名) の略である。表中の数字は、それぞれの使用率を示す。

4.1.2.1 「形容詞+モダリティ表現」の形式別の使用傾向

まず、母語話者が「形容詞+ (シ) ソウダ」が適切であると考えられる設問に対し、タイ人学習者はどのようなモダリティ表現を使用しているかを調べる。結果を以下の【図 4 - 1】に示す。

【図 4 - 1】「形容詞+モダリティ表現」の形式別の使用比率



(1) <会話文 1> 「高そうだ」の使用傾向の比較

A : (宝石店で) このネックレスは (高い) ね。いくらですか。

B : 150 万円です。

属性形容詞では、日本語母語話者の「高そうだ」の様態の意味・用法の使用率は 100% である。タイ人学習者の使用傾向は「高そうだ」が 96.98% である。1 人のみ「ト思ウ」と選んだが、両方ともほぼ 100% 「(シ) ソウダ」を使うことがわかる。

(2) <会話文2>「こわそうだ」の使用傾向の比較

A：A先生は、写真で見ると、とても（こわい）ですよ。

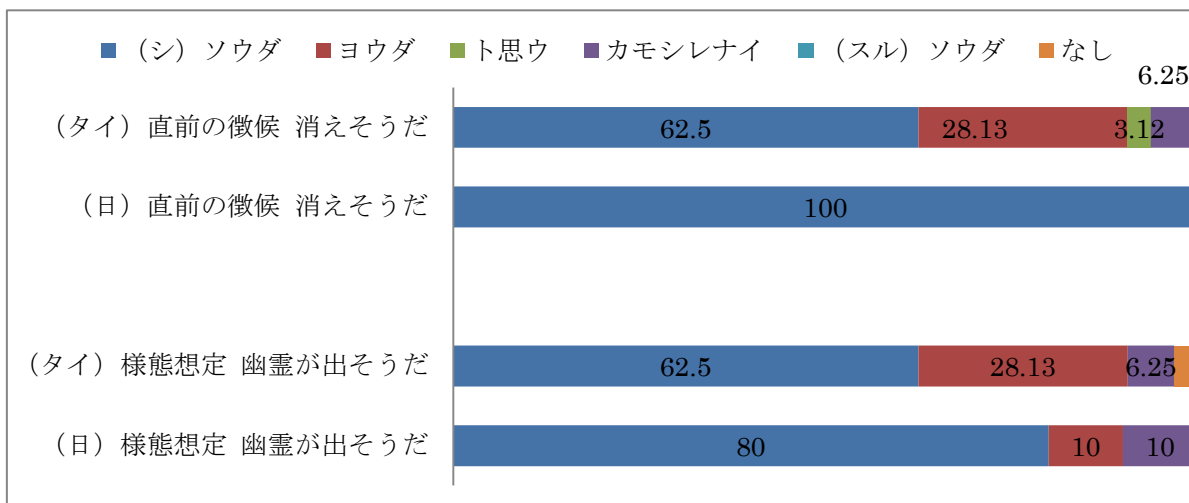
B：でも、本当は、こわくないですよ。

この感情形容詞について、日本語母語話者の使用傾向は、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用率が80%である。これ以外は「ト思ウ」(20%)である。「こわそうだ」のタイ人学習者の使用率は75%である。この他は、順に「ヨウダ」(18.74%)、「ト思ウ」(6.26%)となっている。全体的にみるとタイ人学習者及び、日本語母語話者ともほとんど「(シ) ソウダ」の様態の表現を選んでいる。以上から「形容詞＋(シ) ソウダ」は属性形容詞、感情形容詞とも母語話者とタイ人学習者の使用傾向の格差がないということがわかった⁵⁰。

4.1.2.2 「動態動詞＋モダリティ表現 (1)」の形式別の使用傾向

次に母語話者が「変化動詞＋(シ) ソウダ」で直前の徴候の意味・用法と予想の意味・用法が適切であると考えられる設問では、タイ人学習者はどのようなモダリティ表現を使用しているかを調べる。これは3人称に関する文である。日本語母語話者とタイ人学習者の使用率を比較する。結果を以下の【図4-2】に示す。

【図4-2】「変化動詞(1)＋モダリティ表現」の形式別の使用比率



(3) <会話文3>「火が消えそうだ」の使用傾向の比較

A：もうガスがなくなってきた。

⁵⁰ また「明日は中国正月で映画館は人多そうだ」という文での予想の意味・用法もほぼ同様の傾向が見られた。

B: 火が (消える)。

変化動詞の「消えそうだ」の直前の徴候の意味・用法では、日本語母語話者の使用率は100%である。タイ人学習者の「消えそうだ」の使用率は、62.5%である。それ以外の使用率は順に「ヨウダ」(28.13%)、「カモシレナイ」(6.25%)、「ト思ウ」(3.12%)となっている。「ヨウダ」の使用が少し増えるが、それでも過半数が母語話者と同様に「(シ) ソウダ」を使用している。

(4) <会話文4>「幽霊が出そうだ」の使用傾向の比較

A: 何がこわいですか。

B: 私は暗いところがこわいです。幽霊が (出る) から。

変化動詞の「幽霊が出そうだ」の設問では、予想(想定)の意味・用法は日本語母語話者の使用率は80%である。これ以外に「ヨウダ」と「カモシレナイ」が10%ずつとなっている。タイ人学習者は、「(シ) ソウダ」の使用率が62.5%である。これに続いて「ヨウダ」(28.13%)、「カモシレナイ」(6.25%)となっている。「ヨウダ」の使用が少し増えるが、それでも、過半数が母語話者と同様に「(シ) ソウダ」を使用している⁵¹。

以上から、直前の徴候の意味・用法及び、すぐに変化が明確に生じる予想の意味・用法において、タイ人学習者の使用率は、日本語母語話者より使用率が低いですが、それでもその使用率は、過半数であることがわかった。

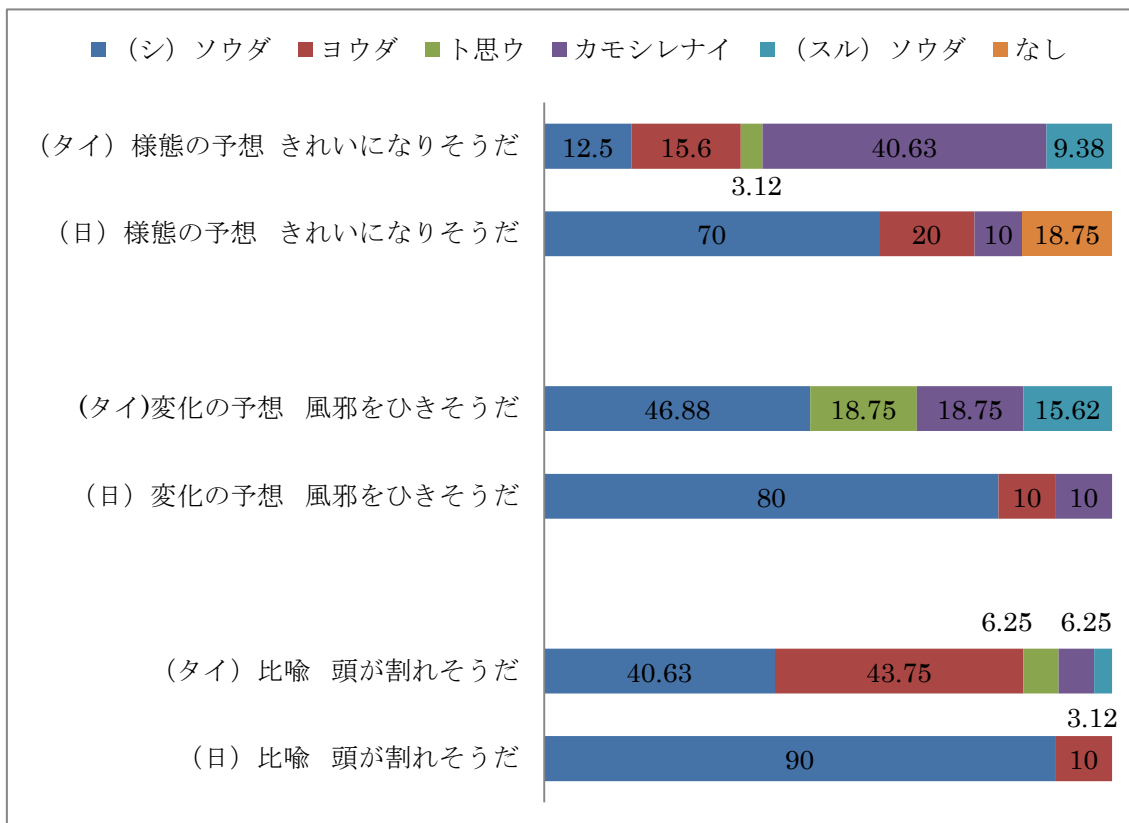
4.1.2.3 「動態動詞+モダリティ表現(2)」の形式別の使用傾向

次に「感覚動詞+(シ) ソウダ」で、すぐに明確な変化が起こる変化の予想の「変化動詞+(シ) ソウダ」及び、すぐに変化が起こらない様態(想定)の意味・用法について、タイ人学習者と母語話者の使用率を比較する。また、比喩表現において、タイ人学習者の使用傾向と母語話者と使用傾向を比較する。

結果は、この3つの設問において日本語母語話者の「(シ) ソウダ」の使用率は、70~90%であった。結果を次のページの【図4-3】に示す。

⁵¹ [分析資料3] 1回目のフォローアップインタビューのデータの1-1参照。

【図 4 - 3】「変化動詞 (2) + モダリティ表現」の形式別使用比率



(5) <会話文 5> 「きれいになりそうだ」の使用傾向の比較

A: ビタミン C をとったら、肌が (きれいになる)。

B: そうですか。じゃ、私も飲んでみようと思います。

日本語母語話者の「きれいになりそうだ」の使用率を見ると、様態の予想の意味・用法の「(シ) ソウダ」は、使用率は 70% である。続いて順に「ヨウダ」(20%)、「カモシレナイ」(10%) である。一方、タイ人学習者の「きれいになりそうだ」の使用率 (12.5%) は、母語話者 (70%) より低い。反対に、タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の表現に「カモシレナイ」(使用率 40.63%) の代用が見られる。特に、母語話者の「カモシレナイ」の使用率 (10%) と比べると、高い使用率である。

両方とも「ヨウダ」の代用が見られる。日本語母語話者の「ヨウダ」の使用率は 20% であり、タイ人学習者の「ヨウダ」の使用率は 15.6% である。

タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の表現に対して、代わりに、話者自身の意見を表す「ト思

ウ」や可能性の判断「カモシレナイ」を使う傾向がある。この結果から、タイ人学習者が、変化がすぐに見られない様態の予想の表現に「(シ) ソウダ」の使用ができるという判断ができず、約4割のタイ人学習者は「カモシレナイ」を使用している。

日本語母語話者が「カモシレナイ」をここで使用しない理由は、判断のモダリティの表現として「カモシレナイ」を使用するためである。この場合の様態の予想に対して、適切ではないという理由で、使用率(10%)が低い⁵²。

(6) <会話文6>「風邪をひきそうだ」の使用傾向の比較

A: 雨にぬれて、体が寒い。風邪を(ひく)。

B: じゃ、早く、うちへ帰った方がいいね。

「風邪をひきそうだ」(感情動詞)の表現では、日本人母語話者の「(シ) ソウダ」の使用率が80%である。また「カモシレナイ」及び、「ヨウダ」が、それぞれ10%ずつであった。

タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用率は46.88%で、日本語母語話者より低いながらも、約半分の学習者が使用している。続いて「ト思ウ」(18.75%)、「カモシレナイ」(18.75%)、「伝聞(スル) ソウダ」(15.62%)の順となっている。タイ人学習者は「風邪をひきそうだ」の文のように、すぐにある現象が起こると予想される場合は「(シ) ソウダ」を選択し、その使用率は、46.88%となる。これは「きれいになりそうだ」の使用率の12.5%より高い。

つまり、すぐには変化が生じない<会話文5>の「きれいになりそうだ」の様態の予想の使用率は、すぐに明らかな変化が生じる<会話文6>「風邪をひきそうだ」の変化の予想の使用率より低い。日本語母語話者の「きれいになりそうだ」の使用率(70%)及び、「風邪をひきそうだ」の使用率(80%)とそれぞれを比較しても、使用率の顕著な格差が生じている。

(7) <会話文7>「頭が割れそうだ」の使用傾向の比較

A: 風邪で熱があるし、頭が痛くて、(割れる)。

B: それは大変。早く病院へ行った方がいいよ。

日本語母語話者の使用率は、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用率は90%である。他には「ヨウダ」の使用率が10%である。

一方、タイ人学習者の「割れそうだ」の使用率は、40.63%で、半分以下の使用率である。反対に「(シ) ソウダ」より「ヨウダ」の使用率(43.75%)の方が少し高い。他には、「ト思

⁵² 先行研究2.1.2.2の「カモシレナイ」(平田2001:16)では、推量の結果、可能性が相対的に低い場合使われると述べている。日本語母語話者は、文脈に併せてこの意味・用法を中心に使用すると考えられる。

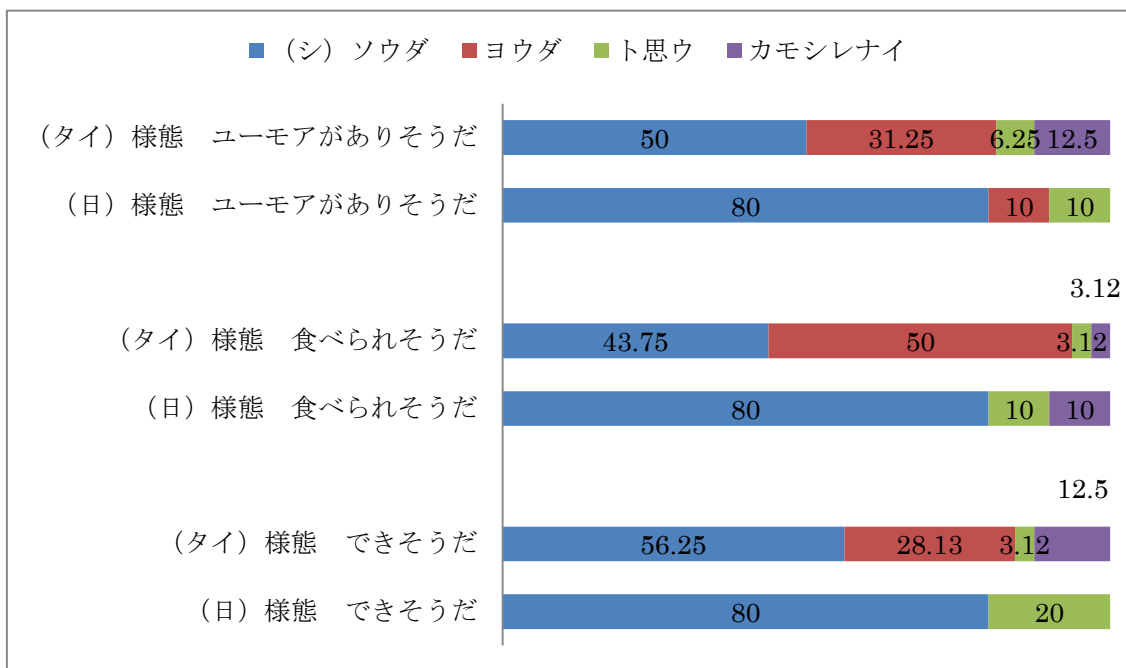
ウ」及び、「カモシレナイ」がともに使用率 6.25%となっている。他に伝聞の「(スル) ソウダ」の使用率が 3.12%である。タイ人学習者は、「(シ) ソウダ」の比喩表現に対し、「ヨウダ」の様態の推量の意味・用法を使う傾向があると言える。

つまり、動態動詞の変化動詞で変化がすぐ見られない様態の意味・用法及び、比喩の表現において、タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の使用率が低く、その代わりに「ヨウダ」、「カモシレナイ」を使用する傾向があることがわかった⁵³。

4.1.2.4 「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用傾向

次に母語話者が「状態動詞+ (シ) ソウダ」で様態の意味・用法が適すると考える表現に対して、タイ人学習者はどのような表現を使用しているかを調べる。この調査では、文法形式では、「存在動詞+ (シ) ソウダ」及び、「可能動詞+ (シ) ソウダ」を取り挙げる。結果は以下の【図 4 - 4】に示す。

【図 4 - 4】「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用比率



(8) <会話文 8> 「ユーモアがありそうだ」の使用傾向の比較

A: (写真を見て) どんな人だと思いますか。

B: この人は、かっこよさそうだ。そして、ユーモアが (ある) 人だと思います。

⁵³ 理解面については、[分析資料 3] の 1 回目のフォローアップインタビューの 1-1, 1-2, 1-3 参照。

「存在動詞＋（シ）ソウダ」では、日本人母語話者の「ユーモアがありそうだ」の使用率は80%である。他には「カモシレナイ」及び、「ト思ウ」がそれぞれ10%である。

一方、タイ人学習者の「（シ）ソウダ」の使用率は50%である。続いて「ヨウダ」（31.25%）、「カモシレナイ」（12.5%）、「ト思ウ」（6.25%）の順となっている。タイ人学習者の半数は、「（シ）ソウダ」の状態動詞の様態の意味・用法の代わりに「ヨウダ」、「カモシレナイ」、「ト思ウ」を使用している。

タイ人学習者は、「状態動詞＋（シ）ソウダ」の様態表現があることを十分理解していないため⁵⁴、母語話者の「（シ）ソウダ」の使用率（80%）に対して、タイ人学習者の「（シ）ソウダ」の使用率（50%）は低い。一方この設問で、「ヨウダ」の使用率を見ると、母語話者は「ヨウダ」を選んでいないのに対し、タイ人学習者の使用率は31.25%である。つまり、一部のタイ人学習者は、「（シ）ソウダ」の代わりに、「ヨウダ」を使用している可能性がある考えられる。

(9) <会話文9> 「食べられそう」の使用傾向の比較

A：（タイスキの店で）すきやきのぶた肉は、どうですか。

B：もう火が通ったから、（食べられる）よ。

「可能動詞＋（シ）ソウダ」では、日本人母語話者に「食べられそうだ」の使用率は80%である。他に「カモシレナイ」及び、「ト思ウ」の使用率がそれぞれ10%ずつである。

一方、タイ人学習者は「（シ）ソウダ」の使用率は、43.75%である。反対に、様態の推量表現の「ヨウダ」の使用率（50%）の方が、高い結果になった。

この「（シ）ソウダ」の様態の意味・用法に対して、上記の<会話文8>の結果に続き、ここでも「ヨウダ」の代用例が見られる。他には「ト思ウ」及び、「カモシレナイ」の使用率が共に3.12%となっている。「状態動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法において、タイ人学習者の使用率が日本語母語話者と比べて、低いことがわかる。

(10) <会話文10> 「できそうだ」の使用傾向の比較

A：ちゃんと勉強してきたから、きょうのテストは、（できる）。

B：わたしもがんばったから、きっといい点がとれると思います。

⁵⁴ 学習者の理解面については、[分析資料3]の1回目のフォローアップインタビューの1-1, 1-2, 1-3 参照。

この設問では、特に「可能動詞＋（シ）ソウダ」で1人称についての視点からの分析をする。日本人母語話者の「できそうだ」の使用率は80%である。他の使用率は、「ト思ウ」が20%である。

一方、タイ人学習者は「（シ）ソウダ」の使用率は56.25%である。これは、母語話者の使用率（80%）と比べるとかなり低い。他の使用率では順に「ヨウダ」（28.13%）、「カモシレナイ」（12.5%）、「ト思ウ」（3.12%）となっている。「（シ）ソウダ」の状態動詞の様態の意味・用法は、あまり使用していないことがわかる。1人称で、話者自身について形容詞を使って、様態の意味・用法ができないため、タイ人学習者は、動詞を使って1人称の話者自身の予想を伴う様態の意味・用法が同様に使えないと考えている傾向が見て取れる⁵⁵。そのため、「（話者自身が）きょう、テストはできそうです。」という予想を伴う様態の意味・用法の代わりに、推量の「ヨウダ」の意味・用法を用いている。この使用率は28.13%である。このため、母語話者の「（シ）ソウダ」の使用率（80%）に比べ、タイ人学習者は、使用率（56.25%）が低い。

4.1.3 「状態動詞＋（シ）ソウダ」の1人称の文の使用の問題点

4.1.3.1 場面における文脈化の問題

<会話文10>については、特筆することがある。この文は1人称の自分の様態を「できそう」という文型表現で表している。3人称ではないため、1人称の「（シ）ソウダ」の様態の意味・用法は、「ヨウダ」、「カモシレナイ」の文型形式に置き換えると問題が生じてしまう点が指摘される。

この会話文は、文脈からは他のモダリティ表現の「ト思ウ」と置き換え可能である。日本語母語話者は、全員「（シ）ソウダ」及び、「ト思ウ」を使用している。しかし、タイ人学習者の「ト思ウ」の使用率（12.5%）は低い。その代わり一部のタイ人学習者が代用しているモダリティ形式は、「ヨウダ」及び、「カモシレナイ」である。そのため、学習者は、話者自身が自分の様態を（非文）「×（私は）できるようです」という文を作ってしまった。タイ人学習者の「ヨウダ」の使用率は28.13%となっている。つまり、この学習者は、「ヨウダ」の方が適切と考えて、使用している。様態の「（シ）ソウダ」の様態の表現が、ここで使用できないのではないかと誤って理解しており⁵⁶、代わりに推量の意味・用法の「ヨウダ」を使用

⁵⁵ これは〔分析資料3〕1回目のフォローアップインタビュー(1-1, 1-2, 1-3)では、1人称で「状態動詞＋（シ）ソウダ」の様態表現があることをタイ人学習者が理解していないことが明らかになった。

⁵⁶ 〔分析資料3〕1回目のフォローアップインタビューの1-1, 1-2, 1-3を参照。

している。

つまり 3 人称の「(シ) ソウダ」は「ヨウダ」に置き換え可能であるが、1 人称の「状態動詞 (動詞可能形) + (シ) ソウダ」の様態表現は「ヨウダ」に置き換えられないことを理解していないため、このような「ヨウダ」の推量の意味・用法を「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の領域にまで広げて使用しているという現象が見て取れるであろう⁵⁷。

これ以外では「カモシレナイ」(使用率 12.5%) の使用がある。これも明らかに文脈に合わない意味・用法である。「△ちゃんと勉強してきたから、今日のテストは、できるかもしれない」という解答である。これは「しっかり勉強してきた話者が、自分に対して、テストができるかどうか、可能性が低い、多分、少しは、できるだろう」という謙遜した場面、または、消極的な期待にとどめる場面のみ限定されて使用される表現として可能である。しかし、通常表現として「話者自身がよくできるようになりたいという希望を表明している」という予想の場面の使い方では、これらの表現は、矛盾を含んだ表現となり、「カモシレナイ」を最も適切な表現として選ぶことは不自然であると考えられる。いずれも、場面における文脈化の問題で、意味・用法が適切に使用できていないことになる。

4.1.3.2 タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の置き換えの問題点

以上の〔調査 2〕をまとめると次のようになる⁵⁸。タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法は文法形式で「形容詞 + (シ) ソウダ」に対応し、「状態動詞 + (シ) ソウダ」の様態の意味・用法は使用が少なく、「ヨウダ」に置き換えたり、「カモシレナイ」を使っている傾向がわかった。これは「動態動詞 + (シ) ソウダ」で、変化がすぐに起こらない長期的な予想及び、様態の予想の意味・用法においても使用率が少ない。そこでは、特にこの様態の意味・用法を「ヨウダ」に置き換えていることもわかった。4.2.2 の箇所、後述するが、学習者の理由において、一対一の意味・用法の対応で、「ヨウダ」を様態の意味・用法に優先的に使用する考える傾向が見られる⁵⁹。そこから「動詞 + (シ) ソウダ」の様態の意味・用法を「ヨウダ」で代用している。そのため、1 人称の「(シ) ソウダ」の予想を伴う様態の意味・用法に対して、推量の「ヨウダ」に優先的に使用することで、非文を作る結果となった。

⁵⁷ 学習者の「ヨウダ」及び、「ト思ウ」、「カモシレナイ」の理解面については、〔分析資料 3〕の 1 回目のフォローアップインタビューの 1-1, 1-2, 1-3, 1-4 参照。

⁵⁸ 『少納言書き言葉コーパス』によると、状態動詞の可能動詞「できそう」は 973 件、それ以外の「動詞可能形 + (シ) ソウダ」は 103 件の使用数が見られる。また、動態動詞は変化動詞で直前の兆候を表すものも多い(「落ちそう」は 136 件)。また変化動詞の「～になりそう」は、2,599 件と使用数が多い。また形容詞では「おいしそう」が 375 件となっている。

⁵⁹ 後述の 4.2.2 及び、〔分析資料 3〕の 1 回目のフォローアップインタビューを参照。 .

1 人称の話者自身の予想を伴う様態の意味・用法は、「○（私は）～ができそうだ」という様態の表現ができるが、「×（私は）～ができるようだ」という推量を伴う様態の意味・用法に置き換えることはできない。しかしながら、本調査では、学習者の約 3 割が「ヨウダ」を使い、非文を産出していることが明らかになった。

4.2 意見表明の作文テストによるタイ人学習者の使用の特徴

4.2.1 産出面の「(シ) ソウダ」の使用傾向

モダリティ表現を選んで解答する会話文完成テストでは、客観的な選択式のテストのため、学習者の実際の「(シ) ソウダ」の運用面を確認することができなかった。そこで、学習者が自発的に、どのような表現として「(シ) ソウダ」を使おうとしているかを明らかにするため、〔調査 3〕を行う。

設問は「日本の○○について」の題名で日本の興味あることについてのイメージを想像したり、予想したり、もし日本の○○に行ったら、どんなことをしたいかという課題を設定し、それについて 600 字以内で作文してもらった。そしてこの作文産出の中で、タイ人学習者が「(シ) ソウダ」の意味・用法をどのように使用しているかを調査した。

この調査では、直前の徴候の意味・用法は出現しなかった。「(シ) ソウダ」を使った表現の延べ語数を使用率 100%として、その意味・用法の内訳を分析した。

結果を次に示す。「形容詞＋(シ) ソウダ」で様態の意味・用法は、71.43%の使用率（延べ語数 65 語⁶⁰）となった。予想の意味・用法 15.38%（延べ語数 14 語⁶¹）も含めると、全体の 86.81%（延べ語数 79 語⁶²）となり、「形容詞＋(シ) ソウダ」の様態及び、予想の意味・用法を頻繁に産出している。一方、「動詞＋(シ) ソウダ」で様態の意味・用法は 8.80%使用率（延べ語数 8 語⁶³）である。変化の予想の意味・用法は使用率 4.40%（延べ語数 4 語⁶⁴）である。「動詞＋(シ) ソウダ」の変化の予想及び、様態の意味・用法は、産出が少ない。文型と意味・用法別にどのような表現を産出しているかを次のページの【表 4 - 2】に示す。

60 異なり語数 19 語。

61 異なり語数 6 語。

62 異なり語数 25 語。

63 異なり語数 5 語。

64 異なり語数 4 語。

【表 4 - 2】 作文産出による「(シ) ソウダ」の文型と意味・用法別の使用実態

意味・用法	様 態	予想・見通し	様 態	変化の予想 今後の見通し
文型	(シ) ソウダ+形容詞		(シ) ソウダ+動詞	
作 例	おいしそうです (21) おもしろそうです (8) 寒そうです (5) 楽しそうだ (5) 味が薄そうだ (3) 気候がよさそうです (2) △有名そうだ (2) 甘そうです (2) 人が多そうです (2) 安そうです (2) 速そうです (2) 暖かそうです (1) 忙しそうです (1) 冷たそうです (1) 涼しそうです (1) (山は) 高そうです (1) にぎやかそうです (1) 静かそうです (1) ×きれいそう (4)	《仮定条件表現 ⁶⁵ 》 子供 (友達) と行ったら、 楽しそうです (2) 日本へ行ったら (機会があ ったら) 温泉へ行って、気 持ちがよさそうです (5) 日本は旅行するのに (さく らは/セーラームーンに会 ったら/雪を見たら) よさ そうです (4) 《理由表現》 寒そうですから、防寒着を 持って行った方がいいで す (1) 《予測表現》 外国人は日本が好きそう です (1) 日本の電車に乗ってみた いです。とても便利そうで す(1)	《仮定条件表 現》 △温泉に入っ たら、リラッ クスしそうで す (3) 日本の歌手は 人気がありそ うです (2) (日本の歌手 は) 疲れそう です (1) 《予測表現》 ×着物は有名 な日本文化と して、数えそ うです (1) ×着物は世界 中で見えそ うです (1)	《予測表現》 △山の上は年 中雪が降りそ うです (1) △しあわせに なりそうです (1) △私は富士山 を見て、すぐ 写真をとりそ うです (1) 雪祭りは北海 道のシンボル になりそうで す (1)
使用数	65 語 (19 語)	14 語 (6 語)	8 語 (5 語)	4 語 (4 語)
使用率	71.43% (55.89%)	15.38% (17.64%)	8.79% (14.71%)	4.40% (11.76%)
合計	91 語 (34 語) (100%)			

表中の使用数は、延べ数 (異なり数) を表す。

表中の記号の説明：× = 非文である。△ = 不適切な表現である。○または、何もないものは正用である。

「形容詞+ (シ) ソウダ」は様々な形容詞で、様態及び、予想の意味・用法の産出が見られる。これに対し、「動詞+ (シ) ソウダ」の様態及び、変化の予想の意味・用法は作例は少

⁶⁵ 日本語記述文法研究会編 (2009) では、仮定条件に帰結に用いることができると解説がある。

ない。

次に個々の作例をみていく。以下に文法形式別に主な作例を挙げて使用実態を見る。

(1) 「形容詞＋（シ）ソウダ」の文型の作例

正用が多く、様態及び、予想の意味・用法を併せて、延べ語数 79 語である⁶⁶。非文は「きれいそうだ」の延べ語数 4 語のみであった⁶⁷。以下に、学習者が作成した作文の例を挙げる。

- 「新幹線はとても速そうです。」(様態)
- 「温泉に行ったら、気持ちよさそうです。」(予想・見通し)
- × 「さくらはきれいそうです。」(様態)

(2) 「動詞＋（シ）ソウダ」の文型の作例

「動詞＋（シ）ソウダ」の文型では、変化の予想（今後の見通し）及び、様態の想定、様態の予想の意味・用法の作例ともに、産出が少ない。2つの意味・用法を併せて、正用は延べ語数 10 語である⁶⁸。また、誤用は、延べ語数 2 語である⁶⁹。特に状態動詞の様態の意味・用法の使用において、誤用が見られる。可能動詞を使って、動態動詞を状態動詞化する場合に、可能動詞を使用せず、動態動詞をそのまま使用した文法形式の誤りが見られた。

以下に、学習者が作成した作文の例を挙げる。

- 「日本の歌手はとても人気があります。」(様態)
- △ 「温泉に入ったら、リラックスしそうです。」(様態)
(この文は○「リラックスできそうです。」の方が、適切である。)
- △ 「富士山の上は一年中、雪が降りそうです。」(予想・見通し)
(この文は○「雪が降っていそうです。」の方が適切である。)
- × 「着物は有名な日本文化として、数えそうです。」(予想・見通し)
(この文は○「数えられそうです。」が正しい。)

(3) 「（シ）ソウダ」を「ヨウダ」に置き換えた作例

「（シ）ソウダ」の表現に対し、関連するモダリティ形式を使用し、不適切な表現と考えられる作例が見られた。以下に示す。

⁶⁶ 異なり語数 25 語。

⁶⁷ 異なり語数 1 語。

⁶⁸ 異なり語数 7 語。

⁶⁹ 異なり語数 2 語。

「(作文中に書き手は、根拠を述べていない場合)×私は、いろいろ日本の国を知ることが、役に立つようです。それで日本について勉強したいです。」(△「ヨウダ」の代用)
この文は「○私にとって～、役に立ちそうです。」(○様態の予想)の方が適切な表現と言える理由は、先行研究 2.1.2.3 の定義で述べた「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の使い分けでは、証拠(根拠)がない場合「ヨウダ」は、使えないため、この「ヨウダ」の作例は不適切となる。話者が、役に立つ事実(証拠または、根拠)を作文中で述べていないため「役に立つようです。」より、単なる予想(見通し)の表現の「役に立ちそうです。」の方が適切であると考えられる。

さらに、これは人称別の視点から「ヨウダ」と「(シ) ソウダ」の置き換えについて、適切ではないと指摘できる。3人称では、置き換え可能であるが、この文は作文の作者自身の1人称がこの文の主体となるため、自分の将来の予想の表現の文となる。つまり、この文において、自分のことを推量することはありえないため、推量の「ヨウダ」に置き換えることはできない。例外的に「ヨウダ」が使える場面は、自分を3人称に置き換えて、外側から客観的に述べる場合にのみ使用可能であると言える。そのため、一般的な表現として「(シ) ソウダ」を使用した方が適切であると考えられる。

4.2.2 「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現の使い分け

[調査1～3]の後、学習者に対して1回目のフォローアップインタビューを行った。「(シ) ソウダ」の意味・用法の理解面及び、関連するモダリティ表現の使用理由について調べるためである。主に[調査1]、[調査2]の質問票を見ながら行った⁷⁰。

その結果、「(シ) ソウダ」の意味・用法では「動詞+(シ) ソウダ」で、直前の徴候やすぐに明快な変化が現れる場合の予想の意味・用法は理解しているが、長期的な不確かな予想(見通し)及び、様態の意味・用法は、あまりわかっていないことがわかった。また比喻を含む様態の意味・用法は理解が不十分であることがわかった。「(シ) ソウダ」の非使用の原因を聞くと、以下のものであった⁷¹。

(1) 「(シ) ソウダ」を使わず、「ヨウダ」を使うと考える理由

学習者A:「動詞+ヨウダ」の意味で、だいたい様態を表すと思います。それから、物や人があって、それが、他の物に似ているとか、同じように見える時も使います。例えば、

⁷⁰ 詳細は[分析資料3]の1回目のフォローアップインタビューの1-1, 1-2, 1-3, 1-4参照。

⁷¹ 「」内の《 》は、文意をわかりやすくするため、筆者が加えたものである。

「あの人は人形のようにだ、という比喻の意味です。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-1)

学習者 B:「様態を表すのは、全部「ヨウダ」を使います。それに、動詞に続ける時は「ヨウダ」がいいと思います。」「ものがその状態に似ているから比喻で、比喻は様態の表現に似ているから、そして、動詞の様態は全部「ヨウダ」が適切だと思います。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-2)

この回答から、様態の予想の「動詞+ (シ) ソウダ」の意味・用法に対し、比況や様態の推量の「動詞+ヨウダ」を優先的に使用することがわかった。また「(シ) ソウダ」の比喻表現に「ヨウダ」を代用する理由も明らかになった。

(2) どのように「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現の使い分けをしているか。

学習者 A:「形容詞+ (シ) ソウダ」は、様態を表す時、使います。目で見て、ある物がそのように見える時、使います。」「すぐに起こることだけ、動詞にも「(シ) ソウダ」を使います。」「だいたい様態の意味は、「動詞+ヨウダ」を使うのがいいと考えています。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-1)

学習者 B:「すぐに起こることだから、「落ちそう」を使いました。」「すぐ変化が起こらないことだから、「きれいになるようです」を使うのが適切だと思います。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-2)

学習者 D:「形容詞+ (シ) ソウダ」の文型で、様態の意味があるので、よく使います。それから、「動詞+ (シ) ソウダ」は、すぐ起こることの予想や将来の予想の意味があると思います。」「それ以外の意味は、よくわかりません。」「習った「(シ) ソウダ」文型と意味は、全部覚えていないので、これだけを考えて答えました。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-4)

「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の理解が不十分であり、変化がすぐ起こる場合の直前の徴候の意味・用法に対して、使用すると考えていることがわかった。また、すぐ変化が見られない場合は「ヨウダ」を使うと言う使用理由を述べている。それ以外の意味・用法について理解が不十分であることがわかった。

(3) 関連するモダリティ表現をどんな意味・用法で使用しているか。

学習者 C:「ト思ウ」は、確実に起こる出来事や状態では、自分の感想を表すときに使おうと思います。それで、「カモシレナイ」は「ト思ウ」より、状態がそうなる可能性が低い、あいまいな状態の場合に使えらると思います。だから、確実ではないことを表す時、

私はいつも、よく「カモシレナイ」も使います。」「私自身がそうだろうと考えたら、「ト思ウ」を使います。でも、あまりそうではないと考えたら、「カモシレナイ」を使うのがいいと思います。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-3)

学習者 D:「文末で「ト思ウ」は、いつでも使えますから。だから「ト思ウ」をよく使います。それから「カモシレナイ」も少し使います。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-4)

以上から、「ト思ウ」、「カモシレナイ」を使う傾向が多い理由がわかった。「ト思ウ」は便利な表現であるため、いろいろな場面で使う理由も明らかになった。また、「カモシレナイ」は「ト思ウ」より可能性が低いため、「ト思ウ」よりさらにあいまいな推量ができると理解して、「カモシレナイ」を長期的な予想・見通しや様態の表現にも適切に使え则认为していることがわかった。

このことから、学習者は「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、不確かな長期的な予想の意味・用法の範疇についても「カモシレナイ」を優先的に使う理由が明らかになった。

(4) 「可能動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法を使わない理由

学習者 C:「《可能動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法に対して、「カモシレナイ」を使う理由は》可能形は、その可能性があるという表現だからです。(略) 予想? 推量? は、えーと、意味や使い方がまだよくわからないので、使いませんでした。それで、この文は、あいまいな表現だと思って、多分、「カモシレナイ」が一番、いいだろうと思いました。」

(1 回目のフォローアップインタビュー1-3)

このことから学習者は可能性の判断だから、実現の可能性が低い場合で、意見をいう表現として「カモシレナイ」が使えると理解していた。一方、様態の予想の意味・用法で「可能動詞の状態動詞化+ (シ) ソウダ」は使えないのではないかと考え、この場合は「カモシレナイ」が適切だと思い、様態の予想表現に「カモシレナイ」を使う理由が明らかになった。

以上から、「(シ) ソウダ」の様態の予想の意味・用法が使える文に対して、タイ人学習者は、「カモシレナイ」、「ト思ウ」、「ヨウダ」を使用する理由が明らかになった。「(シ) ソウダ」の意味・用法の不十分な理解と相まって、「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法を使用しないで、代わりに学習習得した際、使いやすい順に、関連するモダリティ表現を使用する理由が明らかになったと言える。

第5章 「(シ) ソウダ」の学習項目の改善の提案

本章では、前章の調査結果に基づき、【課題 2】の学習方法の改善の提案を行う。5.1 で、〔調査 1～3〕までの学習の問題点をまとめる。次に 5.2 では、その問題点から、学習項目の検討を行い、解決策として学習項目に「働きかける表現」を取り入れる提案をする。5.3 では、新しい提案による授業の学習効果の検証を行う。新たな学習項目に基づいた実験授業の実施後、授業の学習効果を探るため、〔調査 4〕を行う。5.4 では、新たな学習項目を設定した授業の学習効果をまとめる。また、2 回目のフォローアップインタビューにより、学習者の授業の理解面を調べる。5.5 では、新たな学習項目を立てて指導する際の意味・用法別の教え方の順序を提案する。

5.1 「(シ) ソウダ」の学習の問題点

前章では、タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向の特徴が明らかになった。その中で学習において問題となる項目が、いくつか見られた。本節では、その問題点をまとめる。

第一の問題点は、タイ人学習者の使用傾向の偏りがあるということである。〔調査 1～3〕の結果から見ると、様態の意味・用法の「状態動詞+ (シ) ソウダ」及び、長期的な変化の予想の意味・用法の「動態動詞+ (シ) ソウダ」の文型の使用率が少ないことがわかった。1 回目のフォローアップインタビューからは、様態の意味・用法について理解が不十分であることが明らかになった⁷²。

このようなタイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向の偏りが生じる原因として、次のような原因が考えられる。まず、1 つ目の原因は、タイ人学習者自身の学習習得の問題である。これは、事物や現象を外側から見て、その様態がどう見えるかという考えに基づき、理解しやすい表現から順に使用率が高いという使用傾向が見られた。そのため、意味・用法別の使用傾向に偏りが生じていた。

もう 1 つの原因として、教科書の「(シ) ソウダ」の取り扱いでは、主な 3 つの意味・用法の提示のし方において、関連性がなく、個別に提示されている点である⁷³。さらに、使用場

⁷² [分析資料 1] の 1 回目のフォローアップインタビュー-1-1, 1-2, 1-3, 1-4 参照。

⁷³ 先行研究 2.1 の主な 3 つの意味・用法が 1 つの推移する予想の基本概念の中に位置づけられていない。また、「状態動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の取り扱いが明確ではない。一部の学習者は、「動詞+ ヨウダ」の様態の推量の意味・用法を優先して使用するため、「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法を使わない傾向がある。

面が明確に設定されていない点が考えられた⁷⁴。

このため、既成の学習法では、意味・用法の使用場面が不明確で、そのまま授業で導入した場合、学習者は、「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法が使用できない状況が生じる。また関連するモダリティ表現の学習後に、各モダリティ表現の使用で混用が生じてくる。この理由で、「(シ) ソウダ」の意味・用法の使用傾向に偏りが生じると考えられる。

第二の問題点は、様態の意味・用法の誤用があるということである。〔調査 1~3〕では、非文の産出が見られることである。4.2 の作文産出の〔調査 3〕では「可能動詞+ (シ) ソウダ」文法形式の産出で誤用が見られた。

さらに、学習者は、1 人称の「動詞+ (シ) ソウダ」の文型で様態の意味・用法の理解が不十分であった。「(シ) ソウダ」は、「語る表現」の 3 人称に対する「描写の場面」で使用される。またこれは「ヨウダ」との置き換えが可能である。しかし、1・2 人称の文で「ヨウダ」に置き換えられない、もう 1 つの「(シ) ソウダ」の使用場面がある。これは、「働きかける表現」の「希望表明の場面」である。

この「働きかける表現」の場面の取り扱いは、既存の初級教科書の中では、学習項目として、明確に取り扱われていない⁷⁵。従って、既成の教科書の学習項目のみで教師が教えると、一部のタイ人学習者は、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法は外から見た様子を表す「描写の場面」だけを考えてしまい、「働きかける表現」の 1・2 人称では、「(シ) ソウダ」が使えないのではないかと誤解することもあり得る⁷⁶。そのため、〔調査 2〕の調査結果では、「ヨウダ」を使用し、非文を産出するという結果が見られた。

次節以降で、学習項目の再検討から、この 2 つの問題点をどうすれば克服できるかを考え、その提案を行う。

⁷⁴ 先行研究の 2.2.2 では、教科書の提示において「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の 3 人称の文で描写する場面及び、1・2 人称の文で、話者の希望を表す場面の使い方の区別がない。このため、一部の学習者は、話者自身の希望を表す文にも、推量の「ヨウダ」を使用している。詳しい結果は 4-1 を参照。

⁷⁵ 仁田 (2000)、菊池 (2000a, 2000b) には、述べられている。但し、『みんなの日本語初級Ⅱ教え方の手引き』及び、『(同) 中級Ⅰの教え方の手引き』、『あきこと友だち 4』、『みんなの日本語初級Ⅱ』、『みんなの日本語中級Ⅰ』、『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』、『どんなときどう使う日本語表現文型 200』及び、日本語記述文法研究会編 (2009) では、様態の意味・用法の人称別の置き換えの是非については、述べられていない。同様に「語る表現」と「働きかける表現」の区別がなく、例文が提示されている。

⁷⁶ これは、実際に 1 回目のフォローアップ・インタビューの発言にも見られた。

5.2 「(シ) ソウダ」の学習項目の再検討

5.2.1 学習の問題点の解決策

既存の教科書での取り扱いを見ると、初級教科書では、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法では提示が少なく、中級教科書の主な学習項目として取り挙げているものが多い。

高橋（2010）には、様態の意味・用法で、会話タスクを実施することで、初級学習者に対して「(シ) ソウダ」の運用面の学習効果が見られたという報告がある。様態の意味・用法を中心に、使用面に重点をおいた学習法として評価できる。

本論文では、さらに、学習項目の改善レベルまで遡り、効果的な様態の意味・用法の指導法を考えたい。既存の学習項目で見逃されている様態の意味・用法の明確な場面の提示が必要と思われる。

そこで、指導法として、川口（2005）の「働きかける表現」の話者の「希望表明の場面」を追加することを考える。この新しい教授法の提案では、「語る表現」より「働きかける表現」を重視し、初級レベルの教科書から区別して教えることを提案している。その理由として「働きかける表現」の使用場面の方が、「語る表現」の使用場面より、実用的な会話において、その必要性が高いためである⁷⁷。

筆者は、川口（2005）の知見を用いて、場面別で「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の学習を中級レベルを待たずに、初級レベルから、教えた方がよいと提案したい。人称別及び、場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類次のページの【図 5-1】に示す。

⁷⁷ 「働きかける表現」の主体の人称とは、文全体の主体となる人を示す。可能動詞の場合、文脈によって、2つの使い方がある。状態を表す用法で、「(うちのパソコンが使えない時)大学のパソコンが使えるそうだ。」という用法がある。これは、描写の場面であり、文の主部は「パソコンが」である。同時に主体は3人称の「パソコン」である。しかし、可能動詞の場合のもう1つの用法として、話者自身の能力を表す用法がある。「(使い方が簡単なら、私にも)このパソコンが使えるそうだ。」という表現である。この場合、文意として、「私」という主体が、使えるかどうかその能力を表す場面であるため、1人称の「私」が、希望の表明の文として主体となる。この文で「パソコン」は対象となる。このように文脈によって主体は、主格とは異なる場合がある。（作例は筆者によるものである。）

【表 5-1】 使用場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法

機能	場面	意味・用法	主体の 人称	例 文
語る 表現	描写の場面	直前の徴候	3 人称	今にも、本が落ちそうだ。
		変化の予想		今日は、いい日になりそうだ。
		様態		あの店のケーキはおいしそうだ。 あの人はお金がありそうだ。
働き かける 表現	希望表明の場面		1 人称	今夜のパーティに、私は行けそうです。
		希望表明の確認 の場面	2 人称	約束の時間に間に合いそうですか。

(例文は筆者の作例である。)

【表 5 - 1】の「形容詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、「動詞＋(シ) ソウダ」の直前の徴候、変化の予想、3 人称の様態の意味・用法は、全て「語る表現」の現象描写文である。これは、「描写の場面」として、推量の意味・用法の「ヨウダ」と置き換えられる。

しかし、1・2 人称の様態の意味・用法は、「働きかける表現」である。これは「ヨウダ」に置き換えられない。これは、1 人称では肯定文として使われる。この表現は、川口 (2005) が、新しい教授法として提案する「働きかける表現」の中の話者自身の「希望表明の場面」であると考えられる。例えば、「今夜のパーティは行けそうです。」の例文では、1 人称の話者自身の希望 (行きたいこと) を表明する場面であると言える。

さらに、話者が 2 人称に対し、疑問文として使用する場合、相手への「希望表明の確認の場面」になると、筆者は考える。これは、話者が聞き手に対し、例文として「(あなたは) 約束の時間に間に合いそうですか。」という疑問文の中で、よりはっきりと明示されるためである。これは、2 人称の文で、相手の希望の表明 (時間に間に合うこと) を疑問文で、確認している場面と考えてよい。従って、「(シ) ソウダ」の様態の「働きかける表現」は、1 人称の「希望表明の場面」及び、2 人称の「希望表明の確認の場面」があると考えられる⁷⁸。

以上から、第 4 章の解決策として、実験授業では、「語る表現」の「描写の場面」と「働き

⁷⁸ 『ワークブックあきこと友だち 3+4』の練習問題の中に疑問文で「何時ごろ、むこうに着きそうですか。」の提示がある。また、『みんなの日本語中級 I 教え方の手引き』では、「～そうもない」の否定形で、悲観的な予想を述べる練習として、「仕事、終わりそう？」－「ちょっと終わりそうにもないんだ。先に帰って。」という 2 人称に対しての、希望の確認及び、1 人称の否定的な予想表明の会話例文が提示されている。全体的に初級、中級も含め、教科書での取り扱いが少ない。

かける表現」の「希望表明の場面」を新たな学習項目として設けた授業を行ことを考えた。その中で、場面別の会話タスク授業を実施することにした。

この2つの学習項目を立てて「(シ) ソウダ」の意味・用法を指導することで、次の3点の学習効果が期待できる。

1. 第一の問題点の改善として、様態の意味・用法の「語る表現」の使用率の少なさを解決し、母語話者の使用傾向に近い使用ができる学習効果が期待できる。
2. 第二の問題点の改善として、様態の意味・用法の「働きかける表現」の誤用を解決し、母語話者の使用傾向に近い使用ができる学習効果が期待できる。
3. 初級レベルから、優先学習項目として、「働きかける表現」の場面で使う練習をすることから、話者自身の希望を述べる表現として、学習者が会話場面ですぐに使えるという実用的な効果が期待できる。

5.2.2 「働きかける表現」の場面の「(シ) ソウダ」と共起しやすい表現

川口（2000, 2003, 2005）は「働きかける表現」の場面に対して、文脈化が重要であると述べている。そこで、初級レベル動詞及び、共起しやすい表現について、どのようなものがあるかを調べる。

まず、「働きかける表現」で、特に使用される動詞がある。話者自身の変化を表す自動詞が特徴である。例えば「形容詞+なる（よくなる, 忙しくなる）」の「なる（変化動詞）」が挙げられる。また1・2人称の時間的な状態の変化を表す動詞「間に合う」, 「遅れる」, や場所の移動を表す動詞「着く（到着する）」が挙げられる。また、可能動詞の状態動詞化した形もよく使用される。（例：「できる」, 「食べられる」）これらの動詞は、「(1・2 人称) +ガ格+ (対象) +二格+自動詞」を基にする構文である。特に「(対象) 二格+自動詞」及び、「(対象) ガ格+自動詞」の文型で使用される。

この動詞で表現できる様態の意味・用法は、1・2 人称自身の様態の推移及び、1・2 人称の時間的, 空間的な移動の推移及び、1・2 人称の主体が対象に働きかける場面の予想である。以下に『みんなの日本語初級 I, II』（田中他：2003）の新出単語から主な動詞を一覧表にして次のページの【表 5-2】に示す。

【表 5-2】初級レベルの「希望表明の場面」で使用する主な動詞の一覧表

意味・用法	文型	動 詞
主体そのものの様態の変化	ニ格＋動詞	(時間に) 間に合う㊶㊷㊸・(時間に) 遅れる㊹㊺㊻ (授業に) 遅刻する・(時間/場所に) 着く㊼/到着する・(役に) 立つ・ [名詞・形容詞] になる㊽・(酒に) 酔う・ (試験に) 合格する/失敗する・(日本の習慣に) 慣れる
主体が対象に働きかける様態の予想(能力や可能性あり)	ガ格＋動詞	[可能動詞] できる㊾・書ける㊿Ⓚ・座れる㊾㊿・食べられる㊿・勝てる㊿・行ける㊿・使える㊿・読める㊿・寝られるⓁ・覚えられるⓁ・答えられる・買える・飲める [自発動詞] 聞こえる・見える [存在動詞] (物ガ) (場所ニ) ある/ないⓂⓃ (サイズが) 合う・(会議が) 終わる㊾Ⓛ・うまくいく・見つかる・(服が) 売れる㊿Ⓛ・(問題が) わかる・(夢が) かなう

表中に教科書ごとに「働きかける表現」の例文があるものに、印をつけた。表中の記号は、㊶=『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』, ㊷=『みんなの日本語中級Ⅰ』, ㊸=『文化初級日本語Ⅱ』, ㊹=『あきこと友だ4』及び『(同) ワークブック 3+4』, ㊺=『ホップ・ステップ・ジャンプ (一)』, ㊻=『どんなとき, どう使う日本語表現文型 200』, ㊼=『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』及び『(同) ワークブック』である。

注意すべき点は、これらの動詞は、3 人称の様態の意味・用法の「語る表現」の「描写の場面」においても使用できる。文脈上、主体の人称に注意し、2 つの表現を区別する必要がある⁷⁹。

次に「働きかける表現」の「希望表明の場面」と共起しやすい表現を述べる⁸⁰。単文では、話者自身の「希望表明の場面」の肯定文で、「きっと」、「たぶん」とよく共起する(工藤浩: 2000)。(例: きつとうまくいきそうです。/今夜は多分, よく寝られそうです⁸¹。)複文では、条件節や理由節と共起しやすい⁸²。(例: 地下鉄の駅ができれば, 便利になりそうですか。/これは、テレビでよく宣伝している健康食品ですから、疲れによく効きそうです。)

⁷⁹ 詳しくは、5.2.1 及び、注の 78 を参照。

⁸⁰ 工藤浩 (2000) では、「(シ) ソウダ」の「語る表現」の「描写の場面」において、共起しやすい表現は、「みるからに」、「いかにも」があると述べている。

⁸¹ 作例は筆者による。

⁸² 「(シ) ソウダ」は、仮定条件の帰結として用いることができるという解説が、日本語記述文法研究会編 (2009) 見られる。

以上の「働きかける表現」の場面における動詞及び、共起しやすい表現を文脈化することが重要である。これらは、実験授業の中で活用できると考え、会話文タスクの例文の中に取り入れることにした。

5.3 新しい提案による授業の学習効果の検証

ここでは、新しい指導法の提案による実験授業実施の後、その学習効果を〔調査4〕で検証した。

5.3.1 実験授業の実施計画

実験授業は2015年3月18日9:00～12:00に行った。対象者はブラパー大学教育学部の日本語教師養成コースの初級レベル終了の大学4年生32名である。実験授業の方法は次の通りである。様態の意味・用法を「語る表現」の「描写場面」及び、「働きかける表現」の「希望表明の場面」の学習項目を立てて、会話文作成タスクの実験授業を実施することにする。話者が疑問文で、聞き手への問いかけとして使う「希望表明の確認の場面」も会話タスクに取り入れた。実施概要は、前述した3.3.2の通りに行う。教師は、タスクシート（場面別のイラスト及び、会話タスク内容）を配布し⁸³、各グループで、どのような使用場面で、どのような意図で、会話をするか考えた上で、自由に話し合っ、て、会話文を作成する。1グループは4-6人程度で全8グループとする。会話文ができたなら、2人（または3人）のペアで会話文を覚えて、3-5分でロールプレイをする。授業時間は90分である。この授業の教案を次のページの【表5-3】に示す。

⁸³ また、単語については、学習者の日本語のレベルの応じて、段階的に与えるようにする。場面別の会話文作成タスクで参考にした教材は、鮎澤（1998）、鎌田他（2013）、Sasaki(2003)、小山（2004）である。

【表 5 - 3】 場面別会話文作成タスクの授業の教案

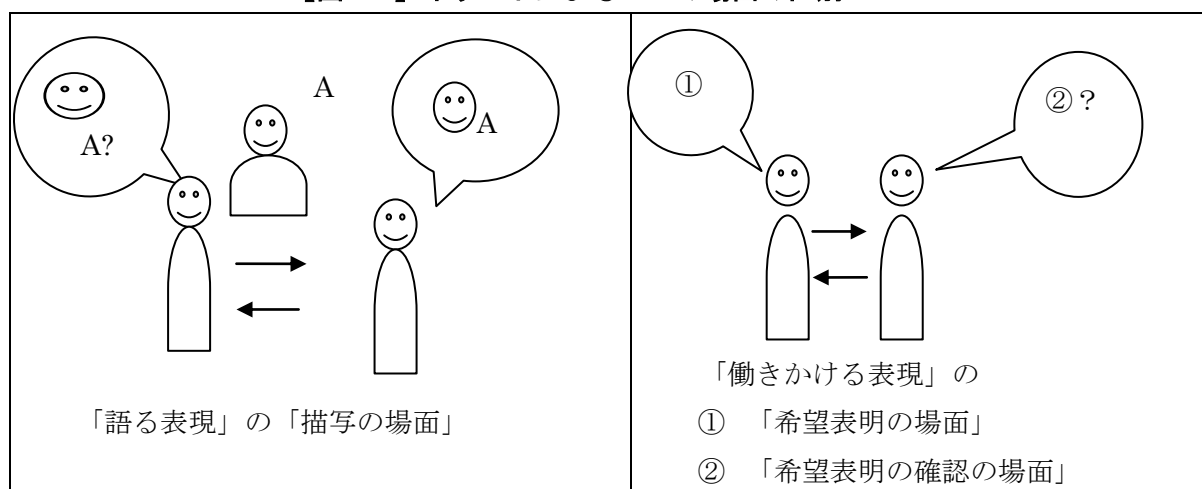
学習項目	学習者の活動	教師の活動	教材など
導入 15 分間 文型・意味・用法 3 つ・ <u>予想場面の提示</u> タスクの説明	<u>イラスト</u> を見て、予想場面について、どんな場面があるか、話し合う。 1 グループ 4-6 人ずつで 8 グループに分かれる。	<u>イラスト</u> を+例文意味・用法の解説+ <u>描写場面/希望表明場面か、だれに、どういう意図で、会話するか/グループ分け</u>	基本概念, 基本的な意味・用法 3 つ+ <u>語る表現と働きかける表現の提示</u>
展開 1 タスク 1 30 分間 「 <u>語る表現</u> 」で直前の徴候, 変化の予想, (主に形容詞の) 状態でタスク	<会話文作成タスク 1> 自由に話し合っ、て、会話文ができれば, 2 人 (または 3 人) のペアで会話練習 ↓ <会話文発表>ペアでロールプレイ 1 グループ 3~5 分	グループ活動の説明 タスクカード+絵配布+机間巡視, 人称, 単語, 共起表現に明示・会話文のチェック段階的に表現形式を与える。 <u>文脈化の指導 (+司会)</u>	タスクカード <u>場面タスクの指示 (絵で)</u> <u>働きかける表現の希望表明の確認の場面</u> を明示
展開 2 タスク 2 30 分間 「 <u>働きかける表現</u> 」動詞の状態で意味・用法で, タスク	<会話文作成タスク 2> ペアで話す内容は自由に話し合っ、て, タスクを実施。会話文ができれば, 2 人 (または 3 人) のペア会話練習 ↓ <会話文発表>ペアでロールプレイ 1 グループ 3~5 分	グループ活動の説明 机間巡視し, 適時語彙や会話文のチェック 段階的に学習者に語彙や表現形式を与える。 <u>文脈化の指導 (+司会)</u>	タスクカード, イラスト配る <u>場面と文脈化の適切さ確認</u> <u>疑問文で 2 人称の希望表明の確認場面のやりとり明確化</u>
まとめ 15 分間	(口頭)「 <u>働きかける表現</u> 」 <u>復習</u>	(口頭) <u>希望表明の確認の場面の会話文再確認</u>	

まず、授業の〔導入〕と〔展開 1〕として、「形容詞+ (シ) ソウダ」の文型や比較的タイ人学習者が理解できている直前の徴候の意味・用法で「動態動詞 (変化動詞) + (シ) ソウダ」での場面別会話タスクを実施し、タスクのやり方に馴れてもらう。これは「語る表現」の「描写の場面」の会話文作成タスクである。

次に〔展開 2〕では、学習者が理解できていない状態の意味・用法の「状態動詞 (可能動詞) + (シ) ソウダ」、及び、変化の予想の意味・用法の「動態動詞 (変化動詞)」を取り挙げ、場面別の会話タスクとして行う。〔展開 1〕と同様の手続きで実施する。これは「働きかける表現」の「希望表明の場面」及び、「希望表明の確認の場面」を中心とした会話文作成タスクである。最後に〔まとめ〕として、主な学習項目を使った会話文を復習する。

具体的な場面別の会話文タスクの条件づけとして、話者と聞き手（1・2人称）が、3人称について説明している「語る表現」の文なのか、それとも話者と聞き手（1・2人称）自身の希望や期待を互いに表明している場面の「働きかける表現」の会話のやりとりなのかをイラストで、明示することにした。タスクに使用したイラストは以下の【図 5-3】である。

【図 5-1】イラストによる2つの場面の区別



場面別の会話文作成タスクの「語る表現」の「描写の場面」では、使用するイラストの中に、話者と聞き手以外の3人目の人物や物を絵の中に描いておく。教師は、学習者に絵の中の3人称に対して、その人や物の様態を表すという条件を示した。

一方、「働きかける表現」の「希望表明の場面」及び、「希望表明の確認の場面」では、イラストの中に話者と聞き手のみの絵を描き、学習者に自分自身の今後の様態の希望している予想を表す場面または、相手の希望を確認する場面を使用するという条件を提示した⁸⁴。

また、この実験授業の効果を比較するためのクラスをもう1つ通常クラスを設けた。このクラスは同大学同学部の同レベルの学生（32名）である。このクラスは、同様の90分授業で、田中他(2009)の『みんなの日本語中級I本冊』及び、Etsuko(2000)の『どんなとき、どう使う日本語表現文型200』を使い、既成の学習項目に従い、様態の意味・用法を中心に教えた。また通常クラスの授業は、同日中に実験授業の後、実施した。通常クラスの教え方は、田中他(2010)の『教え方の手引き みんなの日本語中級I』に従って、教えた。

⁸⁴ 実験授業で使用したイラストはとびら型で、様態の予想や変化の予想を表すようにした。詳しく調査方法の3.3を参照。

5.3.2 アンケートによる学習者の使用傾向の比較

実験授業の学習効果を検証するために、実験授業体験者に対し、3週間後の2015年3月18日に〔調査4〕を行った。選択式のアンケート調査を実施し、理解の定着を検証した。通常クラスの学習者にも、同様のアンケート調査を実施し、「動詞+（シ）ソウダ」の主な3つの意味・用法ごとに3項目の例文を取り上げ、使用傾向をまとめた⁸⁵。

〔調査4〕の実施方法を述べる。対象者は、前記の実験授業体験者の学習者32名及び、通常クラスと同レベルの学習者32名である。次の手順で行った。学習者が、主な3つの意味・用法の使用実態を調査した。学習者の「（シ）ソウダ」の20項目の例文を読み、自分で、各例文の表現を使用すると考える場合は○、使用しないと考える場合は×で回答してもらった。その後、○の場合は、どんな意味・用法があるかを回答してもらった。また、わかりにくい項目は、学習者から質問を受け、簡単なタイ語で、説明を加えた。出題項目は、会話文完成テストの例文とは異なる文を調査項目で使用した⁸⁶。

実験クラス32名及び、通常クラス32名を対象に意味・用法ごとに3項目ずつ回答してもらった。従って、合計は、96回答となる。表中の（ ）の数字は、使用率を示す。表中の略語の「通常」は既成の教科書で学習した通常授業クラスである。「実験」は新たな学習項目を設定した実験授業クラスである。

使用傾向の比較を次ページの【表5-4】に示す。表中の太字の数字は、各意味・用法ごとに使用率が高いものを示す。また★印は、1人称の「働きかける表現」の「希望表明の場面」である。

⁸⁵ 3項目ごとの番号は、アンケートの質問票の項目の番号に対応する。質問票は〔分析資料2〕を参照。

⁸⁶ 詳細は3.3.3〔調査4〕に準じる。「形容詞+（シ）ソウダ」の様態（及び、予想）の意味・用法は、すでに〔調査1～3〕で、使用率が高く、母語話者の使用頻度とも近いと見做し、理解できているとし、〔調査4〕では、実施しない。

【表5-4】「動詞+（シ）ソウダ」の3つの意味・用法の使用傾向（使用数及び、使用率）

使い分け 意味・用法		使用しない		使用する					
				様 態		変化の予想		直前の徴候	
直 前 の 徴 候	クラス別	通常	実験	通常	実験	通常	実験	通常	実験
		06.風で今にも木 が倒れそうだ。	2 (6.25)	0 (0)	6 (18.75)	2 (6.25)	5 (15.63)	5 (15.63)	19 (59.38)
	08.コップの水が今 にもこぼれそうだ	2 (6.25)	0 (0)	4 (12.5)	0 (0)	4 (12.5)	2 (6.25)	22 (68.75)	30 (93.75)
	11. スーパーの袋 が破れそうだ。	2 (6.25)	0 (0)	4 (12.5)	0 (0)	4 (12.5)	2 (6.25)	22 (68.75)	30 (93.75)
	3項目合 96/96 (3項目平均)	6 (6.25)	0 (0)	14 (14.58)	2 (2.08)	13 (13.54)	9 (9.38)	63 (65.63)	85 (88.54)
変 化 の 予 想	04.そろそろ雨が やみそうだ。	4 (12.5)	2 (6.25)	4 (12.5)	3 (3.12)	19 (59.38)	23 (71.88)	5 (15.63)	4 (12.5)
	09.今日は、せんだ く物がよく乾きそ うだ。	4 (12.5)	0 (0)	8 (25.00)	5 (15.63)	17 (53.13)	25 (78.13)	3 (3.12)	2 (6.25)
	14.今年は電気料 金が上がりそうだ	9 (28.13)	2 (6.25)	8 (25.00)	9 (28.13)	15 (46.88)	21 (65.63)	0 (0)	0 (0)
	3項目合計 96/96 (3項目平均)	17 (17.71)	4 (4.17)	20 (20.83)	17 (17.71)	51 (53.13)	69 (71.88)	8 (8.33)	6 (6.25)
様 態	12.きのうよく勉 強したから、テス トでいい点がとれ そうだ。★	19 (59.38)	2 (6.25)	11 (34.38)	25 (78.13)	2 (6.25)	3 (9.38)	0 (0)	2 (6.25)
	13.あの人は背 が高く、走る のが速いから、 たぶんサッカー ができそうだ。	12 (37.5)	10 (31.25)	12 (37.5)	19 (59.38)	6 (18.75)	3 (9.38)	2 (6.25)	0 (0)
	16.あの人はお 金がたくさんあ りそうだ。	14 (43.75)	10 (31.25)	16 (50.00)	19 (59.38)	2 (6.25)	3 (9.38)	0 (0)	0 (0)
	3項目合計 96/96 (3項目平均)	45 (46.88)	22 (22.92)	39 (40.63)	63 (65.63)	10 (10.42)	9 (9.38)	2 (2.08)	2 (2.08)

まず、【表 5 - 4】の 3 つの意味・用法の使用傾向の中で、直前の徴候の意味・用法を見る。3 項目とも、通常クラスの学習者の使用率（平均 63.63%）に対し、実験授業の学習者の使用率（平均 88.54%）が高い。

次に、変化の予想の意味・用法を見る。同様に 3 項目とも、通常クラスの学習者の使用率（平均 53.13%）に対し、実験授業の学習者の使用率（平均 71.88%）が高い。

最後に、様態の意味・用法を見る。通常クラスの学習者の使用率（平均 40.63%）に対し、実験授業の学習者の使用率（平均 65.63%）が高い。

さらに、項目別に分析する。項目 12.「きのうはよく勉強したから、テストで、いい点が取れそうだ」は 1 人称の様態表現である。この項目は「ヨウダ」と置き換えできない。この項目は、「働きかける表現」の「希望表明の場面」である。実験授業クラス体験者は、様態の意味・用法使用率（78.13%）と通常授業のクラス（34.38%）と比較して大きな格差が出ている。学習者は、特に「働きかける表現」の「希望表明の場面」として、「(シ) ソウダ」を使う傾向が見られる。それと対照的なのが、項目 16.「あの人は、お金がたくさんありそうだ」である。この項目は「語る表現」の「描写場面」である。3 人称の文のため、「ヨウダ」と置き換え可能であり、「(シ) ソウダ」を使用しなくても支障がない。つまり、学習者は 3 人称に対し、推量の「ヨウダ」をそのまま優先的に使うことが十分考えられるため、通常授業体験者の使用率（50%）と実験授業体験者の使用率（58.38%）の間では、大きな差が出ていない。そのため、全体別の見方をすれば、実験授業を体験した学習者は 1 人称の項目 12.において「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法を話者自身の「希望表明の場面」で使えると考え、この項目において使用率が特に高い結果となった。

また、項目 14.「今年は電気料金が上がりそうだ」の文で、長期的な変化の予想を表現についても、実験授業の学習者の使用率（65.63%）は、通常授業の学習者の使用率（46.88%）より高くなっている。

以上のことから、全体的に実験授業で「(シ) ソウダ」の非使用が減少したことがわかる。また、直前の徴候、変化の予想、様態の意味・用法を適切に日本語母語話者の使用傾向に近い状態で、意味・用法を区別することができるようになったと言える⁸⁷。

つまり、第一の問題点の使用傾向の偏り及び、第二の問題点の非文の産出が減少したと言える。この結果は、今まで使用できないと考えていた 1・2 人称の「状態動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法において「働きかける表現」の「希望表明の場面」の使用ができるよう

⁸⁷ 日本語母語話者の使用傾向は、4.1.2 の〔調査 2〕の結果を参照。

になり、その使用領域を拡大させている様子が見てとれる。

次に、理解面で学習者がどのような表現を想定して、「(シ) ソウダ」を使用したかについて2回目のフォローアップインタビューの分析を含め、学習効果を考察する。

5.4 学習効果のまとめ

5.4.1 学習者の「(シ) ソウダ」の「様態」の意味・用法の理解

〔調査4〕の後に行った2回目のフォローアップインタビューの結果を含め⁸⁸、様態の意味・用法を中心に学習効果を述べる。尚、以下の《 》は、文意をわかりやすくするため、筆者が加筆した箇所である。

(1) 3人称の文の様態の意味・用法の「語る表現」の「描写する場面」の理解について。

学習者A:「(シ)ソウダ」は、予想の意味があることがわかりました。」「様態の予想も「(シ)ソウダ」が使うことがわかりました。」「雨がやみそう」「せんとく物が乾きそう」は予想です。これは、様態でもいいと思います。変化の予想の意味も「(シ)ソウダ」にあることが、よくわかったので、この文も○にしました。」

(2回目のフォローアップインタビューの2-1)

学習者B:「その様子を予想して、後で、それが確かかどうか、わかるときは、様態の意味が変化の予想の意味につながっていくと思いました。だから「動詞+(シ)ソウダ」も様態の意味で使えることがわかりました。」

(2回目のフォローアップインタビューの2-2)

学習者D:「3つの意味・用法がよく整理できたし、関連していることもわかりました。」
「《「今日のテストはできそう」を選んだ理由は、》ちょうど、テストが始まるころの表現だと思いました。だから、様態かもしれないけど、変化の予想が一番いいと考えました。そして、すぐ始まるころだから、直前《の徴候》の意味もあると思って2つ選びました。タスクで、ものの直前の出来事だけでなく、他の人の様態を説明するとき、「動詞+(シ)ソウダ」で、様態の表現ができることがわかりました。」「今までは、私も友達も、いつも「ト思ウ」、「カモシレナイ」を使っていました。細かい意味を表す使い方がわからなかったのです。だから、会話のロールプレイが、よかったです。」

(2回目のフォローアップインタビューの2-4)

この回答では、学習者Dは、すぐにテストが始まって、いい点をとれるだろうと考えて、様

⁸⁸ 2回目のフォローアップインタビューの結果は、〔分析資料3〕を参照。

態の予想の意味・用法に、もうすぐ起こる出来事の変化の予想の意味・用法を関連させて、「《話者が》いい点がとれそうだ」の表現が使えると、その使用理由を述べている。

これは、今まで「ト思ウ」、「カモシレナイ」が使やすいという理由で使用していた場面に
対し「語る表現」の「描写の場面」の「(シ) ソウダ」の表現が使えると考え、適応している
と言える。

「(シ) ソウダ」の様態の「描写の場面」の方が適切だと考え、使用ができるようになった
と言える。また学習者 A, B は「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、変化の予
想の意味・用法の適切な使用場面を理解し、使っていると考えられる。

(2) 「動詞+ (シ) ソウダ」の「働きかける表現」の「希望表明の場面」の理解について。

学習者 B: 「《「(シ) ソウダ」は、》特に自分のことの予想を表すときも使えるし、例文で
考えると、「《筆者作例の会話例文を学習して》私にも漢字が少ないから、読めそう。」と
か「《筆者作例の会話文例文を学習して》熱くないから、私にも、飲めそう。」の例文を
勉強したので、使えることがわかりました。「ヨウダ」の様態の意味も使います。両方使
えることがわかりました。今まで、使わなかったけど、様態の予想で、「(シ) ソウダ」
の文型が、使えることも、わかりました。」「私自身の予想で、自分が出来事が起こるこ
とを期待している時は、「(シ) ソウダ」がいいと思います。でも、普通は、様態は「ヨウ
ダ」を使うと思います。」「その様子を予想して、後で、それが確かかどうか、わかると
きは、様態の意味が変化の予想の意味につながっていくと思いました。だから「動詞+ (シ)
ソウダ」も様態の意味で使えることがわかりました。」

(2 回目のフォローアップインタビューの 2-2)

この発言から、学習者は話者自身の予想を伴う様態表現が使えることを理解していると言え
る。また、普通の様態の意味・用法には、「ヨウダ」の推量の意味・用法を以前と同様に使うと
発言した。前章の 1 回目のフォローアップインタビューと同様に「ヨウダ」を使用することも
想定しており、様態の意味・用法を場面別に区別し、場面別の相違を考えていることが伺える。

つまり、学習者は、項目 12. 「きのうよく勉強したから、テストでいい点がとれそうだ」にお
いて「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の「働きかける表現」の「希望表明の場面」で会話の
内容を文脈化した上で、使用していると考えてよいだろう。使用場面に併せることで「動詞+
(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の理解が深まったことが伺える。

以上から、学習効果として、様態の意味・用法の理解が促進された。今まで使用できないの
ではないかと考えていた「状態動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の「働きかける表現」が
使用できるようになったと言える。

5.4.2 学習効果の定着の検証

意味・用法を意識化し、場面と結びつけながら、文脈化して会話文を作り、ロールプレイを行うことは、初級後半の学習者用のタスクと言える。

この初級レベルの学習者に対し、「描写の場面」と「希望表明の場面」の使用場面別の学習項目を立てることで「(シ) ソウダ」の文法形式と意味・用法を文脈化して、使用する学習方法が実践できた。

第一の学習効果として、第一の問題点であった使用傾向の偏りを是正することができたと言える。「語る表現」の「描写の場面」の3人称の文では、直前の徴候、変化の予想の意味・用法に様態の意味・用法を関連づけた上で、使用できるようになり、3人称の様態の意味・用法の使用率が過半数以上となった。同時に3つの意味・用法別の使い分けができるようになり、それぞれの意味・用法が適切に使えるようになった点で効果的であるといえる。

第二の学習効果として、次ことが挙げられる。「働きかける表現」の「希望表明の場面」での1・2人称の様態の使用率が、78.13%になったことである。ここでは、学習者は「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法と「ヨウダ」の推量の意味・用法との使い分けを考えた上で、話者自身の様態の予想の意味・用法について、「(シ) ソウダ」の適切な使用ができるようになった。特に「働きかける表現」の「希望表明の場面」で、「(シ) ソウダ」が使えるようになるということである。これは第二の問題点であった「ヨウダ」を使った非用を減らすことができたと言える。

第三の学習効果として、「希望表明の場面」という1人称の話者自身の希望表明及び、「希望表明の確認の場面」という2人称の聞き手への問いかけ表明における、話し手と聞き手の相互間の「働きかける表現」が使えるようになったと言える。3人称に対する様態の描写文ではなく、話者自身が希望を述べる場面の使用ができるようになった点で効果的であると言える。

文法形式及び、意味・用法を文脈化した上で、場面と結びつける作業を行うことで「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使い方において、学習効果が表れた。

また3週間後に行ったアンケート調査からは、実験授業の学習効果が保持されていることが検証された。理解面の促進の効果については、2回目のフォローアップインタビューにより、学習効果の定着が検証できた。

以上の結果から【課題2】の解答として「働きかける表現」の「希望表明の場面」の指導を新たな学習項目に追加するという提案ができる。

5.5 「(シ) ソウダ」の意味・用法の教え方の順序の提案

本節では、新たな学習項目を立てて指導する際の意味・用法別の教え方の順序を提案する。まず、授業の導入で「語る表現」の「描写の場面」と「働きかける表現」の「希望表明の場面」を提示する。その中で、主な3つの意味・用法をこの2つ場面に関連づけて教えるようにする。

今までの指導法では、まず、初級で主に「語る表現」の「描写の場面」で「形容詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法及び、「動詞＋(シ) ソウダ」の変化の予想、直前の徴候を中心に教えている。その後中級で「動詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法を中心に教えている。指導の順は、3人称に対する「描写の場面」を教えるから、1・2人称の「希望表明の場面」を教えるという順である。また様態の意味の場面及び、人称については、区別されないことが多い。

本研究では、ちょうど反対の指導順となる。まず、文型の提示では、会話文で1・2人称の文で、使用場面を例示して取り上げるとよいと思う。使用場面は会話文では、話者と聞き手(1・2人称)が、3人称について説明している「語る表現」の文なのか、それとも話者と聞き手(1・2人称)が、互いに希望を表明したり、問いかけている「働きかける表現」の場面なのかを明示して、会話文タスクを実施するとよいと思われる。

ここでは、「働きかける表現」の1人称の肯定文の「希望表明の場面」及び、2人称に対して、疑問文で問いかける「希望表明の確認の場面」を中心に指導する。また、その場面で、共起しやすい表現やよく使う動詞を文脈化した形で活用し、使用場面別の会話表現に取り入れる練習することが望ましいと思われる。

使用場面の区別の提示方法について「希望表明の場面」では、1人称の文で話者自身の今後の様態の予想をする場面で使われると解説するとよい。例えば、「今夜のパーティに、(私は) 行けそうです。(筆者作例)」という使用場面を提示すると効果的である。また、話者が2人称の相手の様態を予想して問いかける「希望表明の確認の場面」においては、例として「約束の時間に間に合いそうですか。(筆者作例)」の使用場面を提示すると効果的である。

その後に3人称の「語る表現」の「描写の場面」を教える。「動詞＋(シ) ソウダ」の変化の予想、直前の徴候及び、「動詞・形容詞＋(シ) ソウダ」の様態の意味・用法を指導する。3人称の人や物を表す時に使われると解説する。指導の順は、初めに1人称の「希望表明の場面」を教え、2人称に対する疑問文で「希望表明の確認の場面」を続けて教える。その後で、3人称に対する「描写の場面」を教えるという順番を提案する。

第6章 結論

本章は、全部で3節から成る。まず、6.1では、本論文の概要を述べる。次に6.2で、本論文の結論を述べる。最後に6.3では、今度の課題について述べる。

6.1 本論文の概要

本論文は、タイ人初級日本語学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向から見た「動詞+ (シ) ソウダ」の意味・用法の効果的な指導法を提案するものである。

第1章 本論文の目的と課題

タイ人学習者は、「(シ) ソウダ」の意味・用法の理解が不十分なため、不適切な文を産出することがある。どのような学習の問題点があるかを明確にするため、タイ人学習者の「(シ) ソウダ」の使用傾向を解明した。この使用傾向に基づいて、指導法の改善を提案することにした。そこで、以下の2つの課題を設けた。

【課題1】「(シ) ソウダ」のタイ人学習者の使用実態の把握からその傾向を明らかにし、学習の問題点を明らかにする。

【課題2】「(シ) ソウダ」の意味・用法からの場面別の教え方を提案する。

第2章 先行研究

「(シ) ソウダ」の基本概念はケキゼ(2000)、Kekidze(2004)の「成立条件」及び、菊池(2000a, 2000b)の「次の絵」の概念を基に、定義づけをした。本論文では、「(シ) ソウダ」の概念を静的様態の想定から、動的な変化の予想、見通し、そして直前の徴候までの推移の予想表現と定義づけることにした。

本論文では、意味・用法の分類については、日本語記述文法研究会編(2009)から、それぞれの様相の顕著なものとして、①様態②変化の予想、見通し③動きの直前の徴候の3つの主な意味・用法があると規定した。分類を次のページの**【表2-2】**に示す。

【表 2-2】本研究における「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類

	意味・用法	文 型	例 文 (出典)
①	直前の徴候	動態動詞+(シ)ソウダ	おい, シャツのボタンが <u>とれそう</u> だよ。 (日本語記述)
②	変化の予想	動態動詞+(シ)ソウダ	午後は, 雨に <u>なりそう</u> だ。(日本語記述)
		形容詞+(シ)ソウダ	鈴木を説得するのは, <u>難し</u> そうだ。(日本語記述)
③	様態(可能性の 推量を含む)の 予想	形容詞+(シ)ソウダ	このメロンは <u>おい</u> しそうだ。(日本語記述)
		状態動詞+(シ)ソウダ (動詞可能形+(シ)ソウダ)	田中君は留学してたから, 英語が <u>でき</u> そうだ。 (日本語記述)
	比 喩 表 現	動態動詞/状態動詞+(シ) ソウダ	腹が減って, <u>死</u> に <u>そう</u> だ。(日本語記述)

表中の略語の日本語記述は、日本語記述文法研究会編(2009)の略である。

日本語学習者の使用傾向の研究では、山森(2004, 2006)は、次の3点を指摘している。(1)日本語非母語話者は主観的な表現「ト思ウ」や「カモシレナイ」の使用が顕著である。(2)認識のモダリティの中で「(シ) ソウダ」は「ヨウダ」, 「ラシイ」, 「ミタイダ」と比べ、母語話者の使用頻度に近い反面、その文法形式と意味・用法には偏りがある。(3)その偏りは非母語話者は形容詞に接続する様態の表現が中心であり、動詞に接続する形式で現状観察に基づく予想を表すもの及び、仮定した場合の事態の推移の予想の使用が少ないというものであった。

これは、他の先行研究においても、同様の日本語学習者の使用傾向が見られた。

教科書の「(シ) ソウダ」の取り扱いでは、タイで市販されている主な初級及び、中級の教科書を分析した。そこでは、主な3つの意味・用法が網羅されているものの、意味・用法の関連性がなく、提示されていた。さらに、様態の意味・用法の場面別及び、人称別の相違についての区別がなく、提示されていた。

指導法の提案では、高橋(2010)は「(シ) ソウダ」の文型に対して、意味・用法と場面を組み合わせる方法がよいという提案があった。そこで「(シ) ソウダ」の主な意味・用法は、どのような場面で使われるかについて考察することにした。

そこで、使用場面別の指導法として、川口(2005)の「語る表現」の場面及び、「働きか

ける表現」の場面の2つの場面別の教授法の知見を取り入れることにした。

第3章 研究方法

調査対象者は、ブラパー大学教育学部32人の初級レベルの大学生である。調査期間は、2015年1月から4月までである。調査項目は次の4つの調査を実施した。まず、【課題1】の究明のため、使用傾向の調査として〔調査1〕、〔調査2〕及び、〔調査3〕を行った。その解決策として【課題2】の学習方法の改善を行い、実験授業を実施した。その後、授業の学習効果の検証として〔調査4〕を行った。

(1) 会話文完成テスト

会話文完成テストを使って、タイ人学習者の「(シ) ソウダの意味・用法別の使用傾向を調査した。

(2) 会話文完成テスト (2)

日本語母語話者とタイ人学習者のモダリティ形式別の使用傾向を比較する。日本語母語話者と比較するため、日本語母語話者10名にも〔調査1〕と同様の会話文完成テストを実施した。「(シ) ソウダ」の表現に対して、どのような関連するモダリティを代用するかについて、意味・用法別に日本語母語話者とタイ人学習者の使用率を比較した。

(3) 意見表明の作文テスト

タイ人学習者の主体的な言語運用能力を調べるために、作文テストで「(シ) ソウダ」の産出面の使用傾向を調べた。どのような理由で「(シ) ソウダ」を使用したかについて、その理解面を見るために、1回目のフォローアップインタビューを実施した。

(4) 実験授業のアンケート調査とフォローアップインタビュー

〔調査1〕、〔調査2〕及び、〔調査3〕から意味・用法の理解の不十分な点をまとめ、それらを基に【課題2】の究明を行う。その解決策として学習項目として新たに「働きかける表現」の「希望表明の場面」を設定し、意味・用法の場面別会話タスクの実験授業を行った。その後〔調査4〕として、実験授業の学習効果を検証した。また理解面の促進について、2回目のフォローアップインタビューを実施した。

第4章 「(シ) ソウダ」の使用傾向からみた問題点

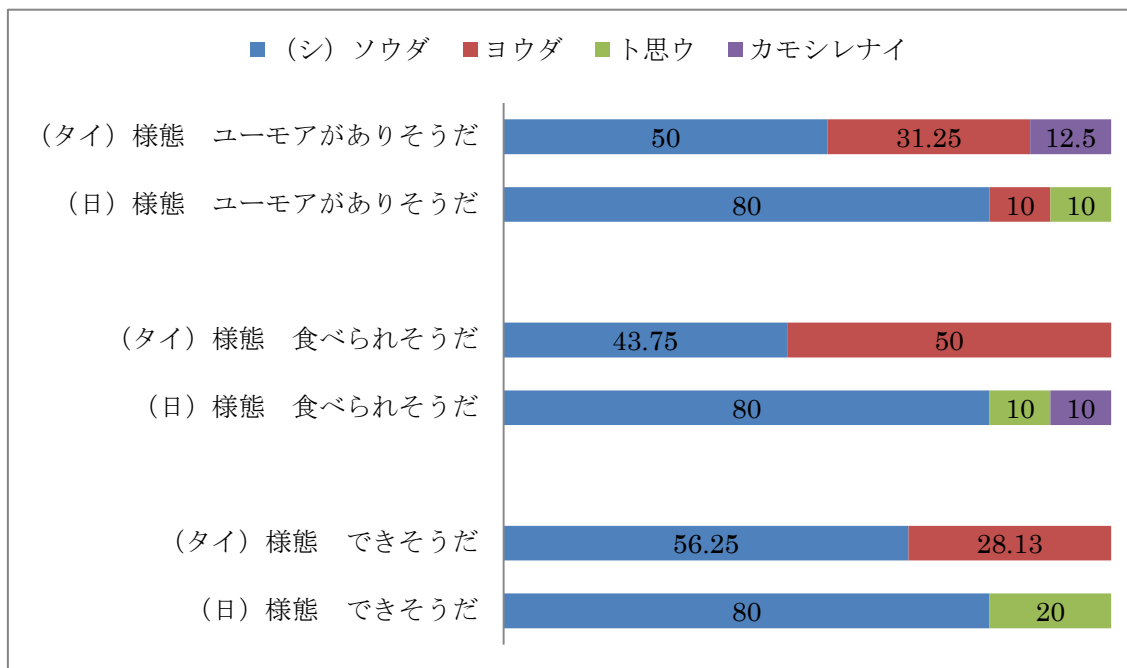
「(シ) ソウダ」及び、関連するモダリティ表現について、日本語母語話者の使用傾向とタイ人学習者の使用傾向を比較した。

その結果は、「動詞+(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用傾向では、日本語母語話者

の使用率（80%）と比べ、タイ人学習者の使用率（平均約 50 %）が低いことがわかった。他のモダリティ表現との置き換えの問題では、タイ人学習者は「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法を「ト思ウ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ」を代用する傾向が見られた。

動詞+（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の使用傾向は、以下の【図 4 - 4】に示す。

【図 4 - 4】「状態動詞+モダリティ表現」の形式別使用比率



表中の略語の（タイ）は、タイ人学習者 32 人、（日）は日本語母語話者 10 人である。

「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法においては、「語る表現」の場面と「働きかける表現」の場面の 2 つの使用場面がある。その 2 つのうち、「(シ) ソウダ」の使用においても「働きかける表現」の使用場面の方が、「語る表現」の使用場面より、実用的な会話において、その必要性が高いと考えられる。

これに対して、既成の教科書では「語る表現」の「描写の場面」と「働きかける表現」の「希望表明の場面」の区別がなく、また初級は、前者が学習項目の中心となっている。そのため、一部の学習者は「動詞+（シ）ソウダ」の 1 人称の文で、話者自身の様態の予想の意味・用法の場面に対して、間違っ「描写の場面」として捉え、「ヨウダ」の推量の意味・用法を優先的に使用する傾向が見られた。この結果、学習者が非文を産出していった。例として「×ちゃんと勉強してきたから、今日のテストは、できるようだ。」という誤りである⁸⁹。

⁸⁹ 詳細は、4.1.2 [調査 2] の会話文完成テストの〈会話文 10〉を参照。

第5章 「(シ) ソウダ」の学習の改善の提案

既存の教科書での取り扱いにおいて、初級では「語る表現」の「描写の場面」が中心である。タイで使用される主な教科書では、中級レベルになって、様態の意味・用法の「働きかける表現」の使い方を学習するという考え方が取られている。

しかし、川口（2005）の新しい教授法の提案では、初級レベルの教科書においても「語る表現」よりも「働きかける表現」を重視し、教えることを提案している。その理由について、川口（2005）は、「働きかける表現」は、自分自身の希望を表したり、聞き手へ問いかけを表明する会話場面で、実用的に使われるためであると述べている。使用場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法及び、人称別の使い分けを以下の【表 5-1】に示す。

【表 5-1】使用場面別の「(シ) ソウダ」の意味・用法

機能	場面	意味・用法	主体の 人称	例 文
語る表現	描写の場面	直前の徴候	3 人称	今にも、本が落ちそうだ。
		変化の予想		今日は、いい日になりそうだ。
		様態		あの店のケーキはおいしそうだ。 あの人はお金がありそうだ。
働きかける表現	希望表明の場面		1 人称	今夜のパーティに、私は行けそうです。
	希望表明の確認の場面	2 人称	約束の時間に間に合いそうですか。	

(例文は筆者の作例によるもの)

そこで、筆者は、川口（2005）の知見を用いて、「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法の学習方法について、中級レベルを待たずに、初級レベルから、早目に教えた方がよい学習項目であると考えに至った。この2つの「語る表現」と「働きかける表現」を区別する理由は、「語る表現」は、3人称の文で使用し、「働きかける表現」は、1・2人称の文で使用されるという人称の使い分けの必要があるためである。

以上の理由から、第4章の使用傾向の偏りの解決策として、「働きかける表現」の「希望表明の場面」を設定し、場面別の会話タスク授業を実施した。

実験授業の3週間後に〔調査4〕として、意味・用法の場面別の使い分けの調査を実施し、学習効果を調べた。理解面の促進の効果については、2回目のフォローアップインタビュー

を実施し、学習効果の定着を検証した。

その結果、様態の意味・用法において「語る表現」の「描写の場面」と「働きかける表現」の「希望表明の場面」の2つの場面別の指導法により、使用傾向の偏りが減少した。

「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法が適切に使用できるという学習効果が認められたことから、場面別の指導法を学習項目として設定することが有益であると提案できる。

6.2 本論文の結論

タイ人学習者の使用傾向の偏りは、会話文完成テストの結果から、「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法において使用率が低く、「ヨウダ」との混用が観察された。その際1・2人称の文では、「ヨウダ」の推量の意味・用法を使った非文の産出が生じる問題点が明らかになった。作文テストの結果からも「動詞＋（シ）ソウダ」の文型の使用が「形容詞＋（シ）ソウダ」の文型の使用と比べて、少ないことが明らかになった。

その解決策として「働きかける表現」の「希望表明の場面」を学習項目として取り入れる提案をした。そこで、意味・用法の場面別会話タスクを実施することで、「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法が、適切に使用できるようになった。「ヨウダ」との使い分けも含めた「（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の場面別の使い分けができるようになった。

【結論1】：タイ人学習者の様態の意味・用法の使用傾向の偏りが見られた。「状態動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の使用率が低いことがわかった。

調査結果は、前述の【図4-4】のように母語話者の使用率が80%であるのに対して、タイ人学習者の「存在動詞＋（シ）ソウダ」及び、「（可能動詞の状態動詞化＋（シ）ソウダ）」の文型で、様態の意味・用法の使用率は、平均使用率50%であった。

これに加えて、「変化動詞＋（シ）ソウダ」においても不確かで、すぐに変化が起こらない予想の場合は、同様に使用率が低いことがわかった。日本語母語話者の使用率は70～80%であるのに対し、タイ人学習者の平均使用率は50%以下であった。

また、1回目のフォローアップインタビュー⁹⁰では、これらの意味・用法の理解が不十分であることがわかった。そのため、タイ人学習者は「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の適切な文に対し、「カモシレナイ」、「ヨウダ」を代用する傾向があることがわかった。また、1人称の「働きかける表現」の場面で、推量の意味・用法の「ヨウダ」を代用して、非文を産出する問題点が明らかになった。

⁹⁰ [分析資料3] の1回目のフォローアップインタビュー1-1, 1-2, 1-3, 1-3 参照

【結論2】新たな学習項目の改善を行った。「働きかける表現」の「希望表明の場面」を指導することで、学習者は、1・2 人称の「(シ) ソウダ」の様態の意味・用法が適切に使えるようになった。学習効果が確認できたことにより、「(シ) ソウダ」の学習において、「働きかける表現」の場面を初級学習項目として追加することを提案したい。

解決策としての「語る表現」の「描写の場面」及び、「働きかける表現」の「希望表明の場面」を指導する学習項目を設定し、実験授業を行った。この授業の学習効果の検証⁹¹の中から、以下に、様態の意味・用法のみの学習者の使用率を取り出して、まとめる。これは、同レベルの 32 名を対象に行った既成の学習項目のみの授業を受けた学習者の使用数及び、使用率と、比較した結果である。以下の【表 6 - 1】に示す。

【表 6 - 1】「動詞+ (シ) ソウダ」の様態の意味・用法の使用傾向 (使用数及び、使用率)

意味・用法の 使い分け	使用しない		使用する					
			様 態		変化の予想		直前の徴候	
クラス別	通常	実験	通常	実験	通常	実験	通常	実験
★12.きのうよく勉強したから、テストでいい点をとれそうだ。	19 (59.38)	2 (6.25)	11 (34.38)	25 (78.13)	2 (6.25)	3 (9.38)	0 (0)	2 (6.25)
13.あの人は背が高く、走るのが速いから、たぶんサッカーができてそうだ。	12 (37.5)	10 (31.25)	12 (37.5)	19 (59.38)	6 (18.75)	3 (9.38)	2 (6.25)	0 (0)
16.あの人はお金がたくさんありそうだ。	14 (43.75)	10 (31.25)	16 (50.00)	19 (59.38)	2 (6.25)	3 (9.38)	0 (0)	0 (0)
合計 32×3=96 (3 項目平均値)	45 (46.88)	22 (22.92)	39 (40.63)	63 (65. 63)	10 (10.42)	9 (9.38)	2 (2.08)	2 (2.08)

表中の略語：「通常」は既成の教科書の学習項目のみで学習した通常授業のクラスである。「実験」は新たな学習項目で、行った実験授業のクラスである。表中の数字は使用数（使用率）である。太字は使用数（使用率）が高いものである。★のマークは1人称の「働きかける表現」の「希望表明の場面」である。

⁹¹ 他の意味・用法の直前の徴候及び、変化の予想においても使用率が高くなった。詳しくは 5.3 の【表 5-4】を参照。

【表 6-1】を見ると、通常クラスと比べ、実験クラスの学習者の方が「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の使用率が高い。その中で「働きかける表現」の場面において他の項目より、使用率が高い。学習者は、文脈化を的確に行う作業から、場面別の「（シ）ソウダ」の使用が可能になったと言える。また、実験授業の3週間後に学習効果の調査を行ったことで、様態の意味・用法の場面別の使い方の理解が定着していることが検証できた。2回目のフォローアップインタビューからも理解面の促進が見られた。「ヨウダ」の推量の意味・用法と「（シ）ソウダ」の様態の意味・用法を場面別、人称別の使い分けを考えた上で区別し、使用できるようになった。

さらに、この学習効果の意義は、「（シ）ソウダ」を使った会話場面で、初級レベルにおいても、すぐに活用できる点で有効であると言える。また、中級で「働きかける表現」の場면을学習した場合でも、初級の「描写の場面」中心の学習の影響があるため、中級において、特に意識して「働きかける表現」の場면을区別しないこともあり得ると思われる。

「働きかける表現」は、学習者自身の希望の表明や相手の希望を問いかける場面で、使用する可能性が高いため、初級レベルにおいても、この「働きかける表現」の場면을指導する学習項目を提案したい。

従って、授業で教える順番として、まず「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法の「働きかける表現」の話者の1人称の文の「希望表面の場面」と教え、続けて2人称の文の「希望表明の確認の場面」と教える。その後で3人称の文の「語る場面」の「描写の場面」で使われる「動詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法、変化の予想、直前の徴候及び、「形容詞＋（シ）ソウダ」の様態の意味・用法を教えるとよいと思われる。

6.3 今後の課題

今回のタイ人学習者の人数は問題なかったが、日本語母語話者は10人で少なかったため、使用率を精密に調査するために、さらに多くの母語話者のデータをとり、分析してみたい。

また今回の調査では「（推量）ヨウダ」の意味・用法別の使用頻度の分析は行わなかった。同じ認識のモダリティの種類の中で「（シ）ソウダ」と「ヨウダ」の使用傾向の比較及び、意味・用法の置き換えの適切さの研究は、今後の研究課題として考えたい。

さらに、教え方については「ヨウダ」について、「（シ）ソウダ」と区別しながら、別の使用場面別の学習方法を考え、どのような場面を設定して教えると効果的であるかを研究したいと思う。

付 録

【付録1】「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類の詳細

(1) 菊池 (2000a、2000b) の意味・用法の分類

基本的な6つの意味・用法に分けている。まとめて【表1-1】に示す。

【表1-1】 菊池 (2000a、2000b) の意味・用法の分類 (筆者作成)

	分類	意味・用法	例 文
1	様態の予想	話者がまだ現実のものとなっていない次の局面(次の絵)を思い描いて述べる。(予想と現実の様態を描写)	・あの二人たぶん、 <u>結婚しそう</u> よ。 ・実際に <u>ありそう</u> な話だね。
2	想定 (想像)	話者が体験していない場面・感情・感覚を思い描いて述べる。	・彼は <u>うれしそう</u> だ。 ・(大きなかばんを見て) <u>重そう</u> だね。
3	仮想	話者が仮想世界を思い描いて、現実がそのような性質を持つことを話者が描写する。	・三蔵法師の一行が、(略)河原の砂煙の中から姿を <u>現しそう</u> 。 ・障害児達のことを思うと、胸が <u>張り裂けそう</u> だよ。
4	予想	やがて得られた場合の局面で、そういえるだろうと思い描いて述べる。	(機上から下の村を見て)戸数は百戸ぐらいは <u>ありそう</u> だ。
5	次の局面	次の絵の描写(直前の徴候を含む)	・雨が <u>降りそう</u> だ。
6	婉曲	断定をさける婉曲的な表現として慣用化したもの。	・〜と <u>見られそう</u> だ。/〜と <u>言えそう</u> だ。

(2) 仁田 (2000) の分類

接続する品詞と意味・用法から2つに分けている。これをまとめて【表1-2】に示す。

【表1-2】 仁田 (2000) の「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類 (筆者作成)

	意味・用法	文 型		例 文
1	状態把握様相 (外への表れからもその特性、状態を捉える用法)	「形容詞+ (シ) ソウダ」 「状態動詞+ (シ) ソウダ」		このリンゴ、 <u>おいしそう</u> だ。
2	状態把握様相 (外見から特性、状態を捉える用法)	実現の徴候	「動き動詞 + (シ) ソウダ」	あつ、荷物が <u>落ちそう</u> だ。
		現状観察の予想		雨宿りしようよ。寒い。風邪を <u>ひきそう</u> だ。
		仮定の場合の事態の推移の予想		なんとなく気持ちが(略) <u>傾いていきそう</u> だ。

①過去形になると非現実を含意したり、そのような様相が起こらない意味となる。例「急いで階段を下りて、転びそうだった。」②「(シ) ソウダ」は様態を述べた後、すぐそれを否定できるが

「ヨウダ」はできない。

例文：×「このリンゴ，おいしいようだが，本当はおいしくない。」（作例は，仁田（2000））

○「このリンゴ，おいしそうだが，本当はおいしくない。」（作例は，仁田（2000））

(3) ケキゼ（2000），Kekidze（2004）の意味・用法の分類

基本的な4つの意味・用法に分けている。まとめて【付表1-3】に示す。

【付表1-3】 ケキゼ（2000）Kekidze（2004）の意味・用法の分類（筆者作成）

	分類	意味・用法	例文
1	変化の予想	ひとつの対象に起こる連続的な変化を表すプロセスの用法	・（傾いている家を見て）あの家， <u>倒れそう</u> だね。
2	特徴・性質	「モノ」における外的な特徴から内的特徴を判断する用法	・（ある人の顔を見て） <u>優しそう</u> な人だ。
3	出来事の見通し	「出来事における成立条件」の用法	・天気がいいから，洗濯物が <u>乾きそう</u> だ。 ・（試食して），これなら <u>売れそう</u> だ。
4	やわらげ	判断のやわらげの用法	・髪の毛はぼさぼさで長く（略）とても <u>みすぼらしそう</u> な男です。

(4) 田野村（1999）の意味・用法の分類

国語学の研究では，基本的な5つの意味・用法に分けている。まとめて【付表1-4】に示す。

【付表1-4】 田野村（1999）の意味・用法の分類（筆者作成）

	分類	意味・用法	例文
1	寸前までの変化の予想	未来における事態の実現の予想の表現	・あのコップが <u>落ちそう</u> だ。
2	状態の存在，可能性の予想	現在成り立っている事態の予想の表現	・食べられ <u>そう</u> な野菜の採集を始めた。 ・急傾斜のガレ場ではあるが， <u>降りられそう</u> だ。 ・ <u>うれしそう</u> な顔をしている。
3	未確認	当否の確認ができない時の予想	（ビールを飲んで）くらくらと目まいがして，椅子から <u>倒れそう</u> になった。
4	仮想のもとでの予想	実際に起こりえない事態の予想の表現	山も川も村もなく，（略） <u>死しかなさそう</u> である。
5	誇張	話し手の無責任な予想や空想の表現	髪の毛がぼさぼさで（略）とても <u>みすぼらしそう</u> な男の人です。

国語文法の分類でこれ以外に、村田は(2007:170-176)意味・用法として①様態を表す場合は外見の様子や対象や現象を捉えた判断を述べたり、比喩表現などで印象を述べる。②動きがある場合はその可能性があるという予想表現と事態の起こる直前の状況の表現があると述べている。風間(1964:158-168)では、状態性の動詞に接続し、傾向・方向づけ・未発・比喩があると述べている。

(5) 森田 (1990) の分類

接続する品詞と意味・用法から7つの分類をまとめて、【表1-5】に示す。

【表1-5】 森田 (2000) の「(シ) ソウダ」の意味・用法の分類(筆者作成)

	意味・用法	文型	例文
1	様態: 外観から判断してそういう状態であると述べる	「形容詞+(シ)ソウダ」	水を <u>おいしそう</u> に飲み干した。
2	推量: 話者がそうだろうと、主観的に推量して述べる。	「状態動詞+(シ)ソウダ」	良子は見かけによらず、気性が <u>強そう</u> である。
3	話者が婉曲しながら、推量して述べる。		
4	予測: 話者が将来そういう状態になるだろう、そういう事態が起こるだろう、そういうことをするだろうと予測して述べる。	「無意志の瞬間動詞+(シ)ソウダ」	企画が <u>変わりそう</u> なのよ。
5	形勢: 一般的情勢を背景によって客観的にそういう形勢にある予想を述べる。		
6	寸前: 話者がそういう状態になる、そういうことが起こる、そういうことをする寸前だと判断し、直後の瞬間に起こることを予想して言う。		
7	非実: 実際はそうでないことを知った上で比喩的にまた誇張して述べる	「形容詞+(シ)ソウダ」, 「無意志瞬間動詞+(シ)ソウダ」	胸が <u>張り裂けそう</u> だよ。

菊池 (2000a) は森田(1990)の予測、寸前、形勢について、次の絵を思い描ける性質を現実がそなえているケースであるとしている。

(6) 日本語記述文法研究会編(2009)の意味・用法の分類

動詞接続の場合は5つ、形容詞接続の場合は2つの分類がある。まとめて【付表1-6】に示す。

【付表1-6】日本語記述文法研究会編(2009)の「(シ)ソウダ」の意味・用法の分類

	意味・用法	文型	例 文
1 徴 候	直後にあることが起こる、その徴候が存在することを表す。	動作 動詞 ・	・あつ、雨が降り出しそう だ。 ・おい、シャツのボタンがとれそう だよ。
2 予 想 ①	1の用法に連続するものとして、現状をふまえて、今後の見通しを述べる。	変化 動詞	・空が暗くなってきた。午後には雨に なりそう だ。 ・この調子なら、この仕事は今週中 に片付き そう だ。
3 予 想 ②	話し手の予想を表す。根拠に基づく場合もあれば、予感を表す場合もある。(仮定条件の帰結として用いることができる)		・今日は祭日だから、電車が混み そう だ。 ・来年はいい年に なり そう だ。
4 様 態	動作や変化をを引き起こすような性質を主体が供えているということを表す。 そうであると思わせるような性質を主体が供えているということを表す。	状態 動詞	・このコップは熱いものを入れて ると、割れ そう だ。 ・あの人ならそういうことを 言い そう だ。 ・鈴木さんはジーンズが似合 い そう だ。 ・田中さんは留学してたから、英 語が でき そう だ。
5 比 喩	拡張的な用法で、程度の強さを大げさに表現する。	いずれ にも	・腹が減って死に そう だ。
6 様 態	主体の性質や内的状態が外観として観察されることを表す。	形容詞	・このカバンはみるからに重 そう だ。 ・彼はいつもおいし そう に食 べる。
7 予 想	様態から今後の見通しや予想を表す。(今後の様態を表す場合は見通しとして解釈できる。)		・(早朝に)今日は祭日だから、映 画館は人が多 そう だ。

(筆者作成)

- ① 前の段階で次が必ず起こる場合は「～ところだ」を使う。②ほかの用法で「～シソウになった」は、実現寸前であったが、実現しなかった用法である。例文は「おぼれそうに

なった。」がある。また、実現寸前の停止状態を表す用法があると述べている。例文は「幼馴染の名前を思い出せそうで、思い出せない」である。

(7) 「(シ) ソウダ」の否定形の文法形式と意味・用法

豊田 (1998) では以下のように「～ナサソウ (状態の否定的判断)」と「～ソウニナイ (予想の否定的判断)」の2つの文法形式と意味・用法について解説している。

- ・形容詞など対象の状態が「～ではない」と判断させるとき「なさそう」が使われる。
- ・動詞は動きを表し、現在の様子からある変化・動きが予想される意味になる傾向が強く、否定で「そうにない」が使われる。例外として状態性が強い意味の動詞や様子が強調される内容では、「動詞+ない形」から接続する「なさそう」も使われる。

【付録 2】初級教科書の練習形態の分析

各教科書においてどのような練習形態があるかを分析する。練習形態は大きく 2 つに理解面と運用面にわける。文型のみ提示と活用変換の練習形態を理解面の文型の定着の練習と考える。空欄補充、結合完成、絵からの文作成、会話文と会話練習、読解文の質疑応答の練習は運用面に焦点を当てた練習と考える。

【㊦2-1】『みんなの日本語初級Ⅱ』における「(シ) ソウダ」の練習形態別出現数

練習形態	文型意味・用法例	形容詞+(シ) ソウダ	動詞+ (シ) ソウダ			主な例文
		様態	様態	変化の予想	直前の徴候	
理解面	文型のみ提示	11	0	5	5	このかばんは重そうです。 今にも火が消えそうです。 今年は輸出は減りそうです。
	活用変換	5	0	7	0	写真で見るとこわそうですが、～。 今年は米の値段が上がりそうです。
運用面	空欄補充	5	0	3	3	ずいぶん古そうですね。 後ろのポケットからハンカチが落ちそうです。 時間におくれそうです。
	結合完成	10	6	8	5	寒そうですから、暖房をつけましょうか。 資料がたくさんありますので、いいレポートが書けそうです。 西の空が明るくなったので、もうすぐ雨がやみそうです。 袋が破れそうですから、新しいのをください。
	絵で作文	5	0	0	0	はさみがついていて便利そうです。 ひもが切れそうです。
	絵/場面 で 会話文	11	0	9	3	幸せそうですね。 上着のボタンがとれそうです。 去年より（さくらが）早く咲きそうです。
	読解/質 疑応答	3	0	0	0	あけみさんはうれしそうだった。
合計		50	6	32	16	総合計 104 項
			54			

出現数は延べ数

【表 2-2】『あきこと友だち』の「(シ) ソウダ」の練習形態別出現数（ワークブック含む）

文型意味 ・用法 練習 形態	形容詞 + (シ) ソウ ダ	動詞 + (シ) ソウ			主 な 例 文	
		直前の 徴候	変化の 予想	様 態		
理 解 面	文型 のみ 提示*	25	3	6	0	いつも高そうな服を着ています。 もうすぐ雨がやみそうだから少し待ちましょう。 バスは来そうにないから、タクシーで帰りましょう。
	活用 変換	20	4	1	4	おいしそうです。 風で、木が倒れそうです。 病気がよくなりそうです。 何時ごろ、むこうに着きそうですか。
運 用 面	空欄補充	0	0	0	0	
	結合 完成	7	3	0	0	(映画に誘う場面で) おもしろそうだし、割引券もあります。 このシャツはボタンがとれそうだから、着ないほうが いいですよ。
	絵で 作文	7	2	0	0	あの人はひまそうです。 本が落ちそうです。
	絵/場面会 話作成/会 話練習	3	1	0	0	(兄弟は仲が) よさそうでした。
	読解/質疑 応答	2	0	1	0	発表を見ておもしろそうだったので、～ 道がこみそうです。
合 計	64	13	8	4	総合計 89 項	

*文法形式では、否定形「(シ) ソウにない」も文法説明がある。

出現数は延べ数

【表 2-3】『文化初級日本語』における「(シ) ソウダ」の練習形態別出現数

文型意味・ 用法 練習 形態		形 容 詞 + (シ) ソウ 様態	動詞+ (シ) ソウ			主 な 例 文
			直前の 徴候	予想 見通し	様態	
理 解 面	文型の み提示 *	11	4	5	8	(あのコートは) あたたかそう。 もうすぐ雨が降りそうですね。 しばらく(雨が) やみそうにありませんね。
	活用 変換	6	1	1	1	よさそう⇔よくなさそう 降りそう⇔降らなさそう
運 用 面	空欄 補充	0	0	0	0	—
	結合 完成	0	0	0	0	—
	絵で 作文	4	2	0	0	おいしそうなケーキですね。 ボタンがとれそうです。
	絵/場面 で会話 文作成 と会話 練習	7	3	4	6	あのワンピース、涼しそうですね。 かばんが落ちそうですよ。 走れば、間に合いそうです。 (漢字が少ないから)、私にも読めそうです。
	読解文/ 質疑応 答	0	0	0	0	—
合計		28	10	10	15	総合計 63 項
			35			

*文法形式では、否定形「(シ) ソウにない」も文法説明がある
出現数は延べ数

参考文献

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
- 鮎澤孝子・金子智子・長谷川恒雄他 日本語教育学会編 (1998) 『タスク日本語教授法』 凡人社
- 石田敏子 (2000) 『改訂新版日本語教授法』 大修館書店
- 市川保子 (2011) 『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク
- 石橋玲子 (2000) 『日本語教師を目指す人の日本語教授法入門』 凡人社
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末モダリティに見られる”Writer/Reader Visibility”」 『日本語教育』 123号 日本語教育学会, pp.86-95
- 今井慎悟 (1992) 「モダリティ形式のモダリティ度」 『日本語教育』 77号 日本語教育学会, pp.62-75
- 烏日哲 (2010) 「中国人学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について『絵本との一致度』の観点から」 『日本語教育』 145号 日本語教育学会, pp.1-11
- 大島弥生 (1993) 「中国語・韓国語における日本語のモダリティ習得に関する研究」 『日本語教育』 81号 日本語教育学会, pp.93-101
- 大関浩美 (2010) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』 くろしお出版
- 黄鈺涵 (2003) 「日本語初級・中級教材における推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」について—台湾人日本語学習者のための提言—」 『早稲田大学日本語研究』 2号早稲田大学, pp.95-119
- 風間力三 (1964) 『『死にそうだ』と『死ぬようだ』』 森岡健二他編『口語文法講座』 3, 明治書院, pp.158-168
- 川口義一 (2000) 「「ナラ表現」の「文脈化と教材化」」 『紀要』 13 早稲田大学日本語研究教育センター pp.27-49
- 川口義一 (2003) 「「文脈化」による応用日本語研究—文法項目の提出順再考—」 『ヨーロッパ日本語教育』 第7号 ヨーロッパ日本語教師会・英国日本語教育学会, pp.119-126
- 川口義一 (2005) 「文法はいかにして会話に近づくか—「働きかける表現」と「語る表現」のための指導—」 『フランス日本語教育』 第2号 2005/1 フランス日本語教師会, pp.110-121
- 菊池康人 (2000a) 「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味—あわせて、その否定各形の意味の差について」 『日本語教育』 107号 日本語教育学会, pp.16-25
- 菊池康人 (2000b) 『『ようだ』と『らしい』—『そうだ』『だろう』との比較も含めて—』 『国語学』 51巻1号 日本語学会, pp. 46-60
- 木下りか (1998) 「ヨウダ・ラシイ—真偽判断のモダリティの体系における「推論」—」 『日本語教育』 96号 日本語教育学会, pp.154-165
- 工藤浩 (2000) 「第3副詞と文の陳述的なタイプ」 仁田義雄他編『日本語の文法モダリティ』 3巻, 岩波書店, pp.203-205
- 工藤真由美 (1995) 「アスペクト体系とテキスト」 ひつじ書房

- ケキゼ・タチアナ (2000) 「(～し) そうだ」の意味分析『日本語教育』107号日本語教育学会, pp.7-15
- 佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84号 日本語教育学会, pp.1-95
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 高橋志野 (2010) 「様態の～ソウのモデル授業」『国際大学交流セミナー報告書』愛媛大学国際連携機構・国際教育支援センター
- 田野村忠温 (1992) 「現代語における予想の『そうだ』の意味について」『国語語彙史の研究』12巻 和泉書店
- 寺村秀夫 (1990) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺田和子・三上京子・山形保子・和栗雅子 (2001) 『日本語の教え方ABC』アルク
- 豊田豊子 (1998) 「『そうだ』の否定の形」『日本語教育』97号 日本語教育学会, pp.60-71
- 富田英夫 (2007) 『日本語文法の要点』くろしお出版
- 中畠孝幸 (1991) 「不確かな様相—ヨウダとソウダー」『三重大学日本語学文学』2号三重大学日本語学文学会, pp.26-33
- 仁田義雄 (1992) 「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77号 日本語教育学会, pp.1-75
- 仁田義雄 (1992) 『日本語モダリティーと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (2000) 「第2章認識のモダリティーとその周辺」『日本語の文法モダリティー』3巻 岩波書店
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 「第8部モダリティー」『現代日本語文法』4巻くろしお出版
- 平田真美 (2001) 「『カモシレナイ』の意味—モダリティーと語用論の接点を探る—」『日本語教育』108号 日本語教育学会, pp.60-68
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 睦路美礼・川木冴子 (2000) 「『ように』の基本的な意味—様態用法を中心として—」『東海大学紀要・東海大学留学生教育センター』20号 東海大学出版会, pp.17-26
- 村田水恵 (2007) 『入門日本語の文法』アルク
- 森田富美子 (1990) 「いわゆる様態の助動詞『そうだ』について—用法の分類を中心に—」『東海大学紀要・東海大学留学生教育センター』16号 東海大学出版会, pp.55-70
- 山森理恵 (2004) 「上級日本語学習者の発話におけるモダリティーの使用実態—母語話者との比較から—」『2004年日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, pp.65-70
- 山森理恵 (2006) 「認識のモダリティーの使用について—日本語学習者と日本語母語話者の使用に比較を通して—」『東海大学紀要東海大学留学生教育センター』26号, 東海大学出版会, pp.73-85
- Kekidze Tatiana (2004) 「『(し) そうだ』の成立条件」『言語と文化 Issues in Language and Culture』第5号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語言語文化専攻, pp.195-211

資料の出典

- Sasaki Mizue, Kadokura Masami (1996) 『会話のほんご Japanese Through Dialogues For Intermediate Learners 』 The Japan Times
- 石沢弘子他 (2002) 『教え方の手引き みんなの日本語初級Ⅱ』 スリーエーネットワーク
- 鎌田修他 (1998) 『生きた素材で学ぶ 新・中級から上級への日本語 Authentic Japanese: progressing from Intermediate to Advanced [Workbook]』 The Japan Times
- 鎌田修他 (2013) 『生きた素材で学ぶ 新・中級から上級への日本語 [ワークブック] Authentic Japanese: progressing from Intermediate to Advanced [Work book] New Edition』 The Japan Times
- 国立国語研究所 (2011) 『少納言書き言葉コーパス』 <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> (閲覧: 2014/10/26)
- 小山悟 (2004) 『J-BRIDGE TO INTERMEDIATE JAPANESE』 凡人社
- 田中よね他 (2002) 『みんなの日本語初級Ⅱ』 スリーエーネットワーク
- 田中よね他 (2009) 『みんなの日本語中級Ⅰ 本冊』 スリーエーネットワーク
- 田中よね他 (2010) 『教え方の手引き みんなの日本語中級Ⅰ』 スリーエーネットワーク
- 文化外国語専門学校編 (2006) 『新文化初級日本語Ⅰ 教師用指導手引き書』 凡人社
- 文化外国語専門学校編 (2008a) 『新文化初級日本語』Ⅰ・Ⅱ 凡人社
- 文化外国語専門学校編 (2008b) 『新文化初級日本語Ⅱ 教師用指導手引き書』 凡人社
- Etsuko Tomomatsu, Jun Miyamoto, Masako Wakuri (2000) 『どんなとき, どう使う日本語表現文型 200 初中級 』 Technology Promotion Association
- กนกวรรณ เลหาบุตรณะกิจ (2002) 『ฮอปป์・ステップ・ジャンป์ (一)』 โครงการเผยแพร่ผลงาน วิชาการ คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย
- บุษบา บรรจงมณี และคณะ (2009) 『日本語あきこと友だち』 4,5,6 กรุงเทพ 国際交流基金
- วันชัย สิลพัทธ์กุลและคณะ (2004) 『ワークบุ๊ก あきこと友だち 3+4』 กรุงเทพ 国際交流基金

謝 辞

チューラーロンコーン大学の日本語講座の修士課程の集大成として、私自身が研究成果をここに論文としてまとめることができ、大変うれしく思う。まだまだ不十分な点はあるが、小さな論文が生まれた。これは、指導教官のアサダーユット・チューシー先生のご指導の賜物である。いつも多くの示唆、提案、指導をいただき、大いに参考になった。この場を借りて、深く感謝したい。先生のご指導のおかげで、私の小さな研究レポートのようなものが、日本語教師の研究者の書いた論文らしい形にまでなり、ここに完成できた。これは、先生の力がなかったら、できなかったと思う。

要旨のタイ語訳は、後輩の大学院生のスティーパーさんをお願いした。この場を借りて、感謝したい。カノックワン先生の励ましにも感謝したい。先輩の香山恆毅さんや同期の橋本功さんが、下読みしてくれたこと、またアドバイスをしてくれたことも感謝したい。

また2015年3月にバンコク国際交流基金で行われたタイ国日本語教育研究会の発表の際、運営委員の方からも、貴重なご指摘をいただき、感謝している。

日本語母語話者の調査をお願いした際、調査対象者を日本側で、募集して下さった大阪大学の大学院生の中井靖子さんにも感謝したい。タイ側で、募集して下さったブラパー大学付属高校の宅間先生、カセムバンディット大学の西田先生、また応援していただいたJICAのシルバーボランティアの石田先生にも感謝したい。

ブラパー大学の教育学部の日本語教師養成学科で教鞭をとりながら、大学院に通わせてくれたブラパー大学教育学部長のモントリー・ヤムカシーコム博士にも感謝したい。ブラパー大学教育学部の同僚のヤオワパー先生及び、調査対象者となってくれた教え子たちにも感謝したい。

本論文の研究テーマについては、この研究の先鞭をつけた3人の先生がいる。そのうち2人は、愛媛大学の高橋志保先生、東京大学の向井留美子先生である。タイと日本の大学の国際交流でも大変お世話になった。2人とは、2010年に行われたみずほ財団主催の国際大学教育セミナーにおいて、いっしょに仕事をした仲である。私自身も招聘教員として、教授法を発表すると同時に、協力してセミナーを運営した。特にこのセミナーで、高橋先生からは、この論文の前半の構想を示唆していただいた。3人目は、私の母校の東海大学の山森理恵先生である。先生からも、本論文の示唆をいただいた。

この論文は、多くの人々の協力があって、完成したものである。指導教官及び、先生方、学友、同僚、知人、教え子たちに感謝したい。

2015年 5月

斎藤 太郎

海に見える研究室にて